# 鎖の歌

エーシュルング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鎖の歌

【Ｎコード】
Ｎ１７７５Ｊ

【作者名】
エーシュルング

【あらすじ】
１９６３年。謎の組織ＰＣＯ主導のもと、敗戦から急速に立ち直りつつある極東の島国、日本。
一方、過去の戦争のために人工的に生み出された『遺伝子強化人間』、あるいは死すべき子供たちの寿命も尽きようとしていた。
並行世界の怪しき戦後史。

# 1　血

意識が生まれた。
自分？
自分はーー
自分の周りには膨大な量の血。
だが。
これは自分の血ではない。
自分はそこで生きているが、自分の血ではない。
膨大の量の、他の生き物の血だ。
赤い血だ。
自分が血流に乗って、閉鎖された血管の中を移動していることを理解した。

次の局面へ進むときだ。
周囲の物質へと、影響力を広めていく。
すぐに、応答があった。
仲間だ。
同種だ。
彼らも一斉に次の局面に進もうとしている。

意識が十分に濃密になった。
意思疎通が可能だ。
仲間たちもその段階に入ったことだろう。
彼らに呼びかけることにする。
叫ぶべき言葉は、産まれる前から決まっていた。

『生きろ！』

どれほどの数の仲間が、正しい方向へと進んでくれるものだろうか。

## 2　ラミタイ

■１９６３年■
■リビルダーによる占領下にある日本共和国の中部に位置する県国和歌山■

ラミタイは束の間、閉じていたまぶたを開いた。
空には黄色くぶくぶくした太陽がいつものように輝いていた。ものすごい暑さだ。みかん農場はでこぼことした地表を埋め、農場の労働者は果てのない労働を、単調な歌を歌いながらこなしていく。
みかん農場の中に、時たま思い出したかのように錆びた塔が空へと伸びていて、そこに設置されたスピーカーからは農業林野庁の、生産拡大を励ます録音された声が際限なく流されていた。
空気は厳しく乾燥していて、みかんたちにとっては嬉しくはない気候だろうが、それでも周囲はいつものように濃密な柑橘類の香りに満ちている。
いつもと同じ光景。
些末な違いこそあれ、ここの民は数百年とこの生活を続けてきたのだ。
くすんだ橙色のつなぎと黄色いスカーフを身につけた少年、ラミタイがとぼとぼと道を進んでいた。鎖国期以前に、播種船でこの地方に植民したご先祖の形質を受け継いだ、銅色の肌と黒い髪のラミタイだが、その黒い瞳には悲しみを浮かべ、加えて不眠に悩む人間特有の充血を帯びていた。八月の暑さに辟易してそんな顔をしているわけではなかった。
飛びカニがすうっと空を泳いできて、頭に止まろうとするのをラミタイは追い払った。よその県では焼かれて人間に食べられてしまう飛びカニだけれども、害虫を食べるこの生き物は和歌山県人に好まれ、大昔から盛んに飼育されていた。最近は、発達した品種改良

学が取り入れられでもしたのか、より元気に満ちているようで和歌山県の低空での繁栄を謳歌しているようだった。

からからに荒れた原っぱに、古い送電塔が建っていて、そこにもスピーカーがくっつけられていた。

送電塔は大戦より遥か昔に建てられたに違いなく、とてつもなく古いが、なぜか和歌山市内にある類の古い寺のような、時代をこえた威厳というものを保つのには上手くいってないようだった。スピーカーを塔にくっつけた農業林野庁は、さらなる時間の経過がこれを改善すると信じているのか、それとも単に手間を惜しんだのか、スピーカーは一度も整備を受けたことがなさそうだった。スピーカーから流れる録音の声は、奇妙に間延びした野良犬の遠吠えのようだった。

少年は立ち止まって、送電塔の衰退した悲しい姿、黒くて背の高い遺骸を我を忘れたように見やった。

と、聞き慣れない低い音が、羽虫の大群の襲来を予期させるように、どこからともなく近づいてきた。足下の砂利が踊りだし、砂煙が上がりだす。ラミタイは夏の終わりから秋にかけて襲来してくる予測不可能な台風のことを想像してぞっとした。台風による破壊に対処するための県民の労力たるや、並々ならぬもので、生活環境をいっぺんに悪化させるのだ。

だが、台風の兆しはどこにも見ていない。

だとすると、これは？　ラミタイの見ている前で、送電塔のスピーカーがゆっくりと、斬られた人間の頭のように落下して、永遠に放送を終えた。

だが、低い音は止まない。

ラミタイが背後からの熱と風を感じる。振り返ると、山のような黒い巨体が迫ってくるところだった。その圧倒的な姿にひるみ、少年は転がるように道をあけた。走るそれは、まるで石積みの巨壁のように見えたが、金属の光沢を放っていた。見覚えがあった。政府軍の重装甲八輪トラック。

市内の政府関連の建物でちょくちょく見かけることがあった。だが、停車しているそれを常に銃か棍棒を持った政府軍の兵士が取り巻いていて、近づくことがかなわなかったのを思い出した。

トラックは一台ではなく、後から後から現れる。皆が皆、めちゃめちゃなスピードで田舎道を急いでいた。

危ないところだった、とラミタイは思う。トラックの接近に気付くのに一瞬遅れれば、命はなかったところだった。政府軍は県民の子供一人ぐらい轢き殺しても速度をゆるめることすらしない連中なのだから。

トラックの上部に設けられた銃座に黒い制服の男たちが配されていて、何人かは道ばたの少年に無機質な視線や銃口を投げかけた。

まるで戦闘中にあるみたいだ、とラミタイは思った。こんな農園にあるとは思えない襲撃に備えているようだった。

トラックの後には、トラックの幼生体のような見た目の偵察用ジープが続き、さらにジープより小さなバイクも続いた。どれもすごい数で、和歌山市内に常駐していた政府軍の大半が出て行こうとしているということは、ラミタイにもはっきりと分かった。

気がつけば黒い車列は現れたときと同じ唐突さで消えていて、後に残るのは朦々たる排煙とその悪臭だけだった。あのような車列の走行を想定して作られていなかった田舎道はその形を変えている。

……始まったか。

国営のニュースは事実を存在しないものと無視し、目にできる明確な兆候も今のを除いて、一つとしてなかった。

だが、間違いなかった。

ラミタイにはもう、時間が残されていないということだ。

一昨年前の台風で大いに荒れたため、自然治癒を待っているみかん農園、停止農園にラミタイは侵入した。みかん泥棒よけの金網には穴が空いていて役目を果たしていない。

かすかに見える海上で、海上牧場がゆうらりと揺れている。赤道地帯や南極を目指す複合船舶は見えはしないかと目を凝らしたが、ここ数ヶ月同様、和歌山県に近づく船舶はないようだった。

ラミタイは無言で頭を振り、停止農園に囲まれた丘を目指した。雑草が生い茂り、防鳥ネットが張られていないため、白い鳥が一斉に飛び立っていく。その様はひどく非現実的に思える。

丘の頂きには、いつもの通り、やはりファレリアがイーゼルに向かっていた。悲しいともなんともつかない顔で筆を進めている。ここは流行という要素が近寄りがたい場所だが、実際ファレリアの髪型は何年も前から適当な三つ編みだったし、服装も絵の具の染みがあちこちに付いた白い長袖シャツを羽織っている姿の他は見たことがなかった。

ラミタイの接近に気付くと、その顔から明確な表情は消えた。灰色の瞳は彼女の見たものをそのまま反射している。そんな不思議な色合いだ。

「ラミ？」

彼女の声はいつもと変わらず、淡々としていた。まるで書いてある文字を読んでいるように聞こえる。

「久しぶりだな」

「学校はどうしたのよ？　今日は平日じゃなかったっけ？」

十五歳にして、アケデミー九年生のラミタイには授業を受ける義務があった。だが、それを言うならファレリアだってラミタイと同い年ではないか。

ラミタイは首を振って、ファレリアの数メートル隣に背を丸めて腰を下ろした。

「担当の教師が県から逃げ出したんだ。今頃、和歌山県境の大行列に加わってるんじゃないかな？　おれにできることは何もないよ」

「それでも、県境まで追いかけていって授業を受けようとする気概のある生徒を学校は評価するんじゃないの、ラミ？」

「妙なお説教は沢山だ、ファレリア」

ラミタイは吐き捨てるように言う。彼は和歌山県人風でない自分の名前を好んでいなかった。
とにかく、ラミタイは動き続けるファレリアの筆先に目をやって、「どうせ、みんなすぐに死ぬんだ。今さら真面目に振る舞うことになんの意味があるというんだ」
ファレリアは静かに筆を絵壷に入れた。そこに溜まるのは赤い絵の具。なぜか血の匂いを放っている。
「そう考えるのは容易よね」
ファレリアは静かにそう言い、現世の全ての雑音を振り払ったかのように、彼女の目から光が消えた。ラミタイにそれは超然とした態度に思えた。
いまでこそ、彼女はこんなだが、元は自分なんかより百倍は真面目な人間だった。学校では、フジーム教授あたりの助手めいたことさえやっていなかったのだろうか、とラミタイは一昔前の記憶を探った。
ファレリアとはいつ出会ったのか分からないほど付き合いは古かった。だが、すでに彼女はラミタイの理解できない領域へと踏み込んでしまったようだ。
いや、ファレリアだけではない。
県の同世代の人間そのものが、来るべき死に備えて準備を終えているようだった。
どうやら自分は、自分の中で結論を産み出すと言った努力を怠けているうちに、置いてきぼりになってしまったようだ。ラミタイは改めて認識して、暗澹たる気分になった。
ふいに、彼女がいつも一体何を描いているものか、若干の好奇心にひかれてファレリアのイーゼルの方へ目をやるが、彼女は絵に布をかけ、すでにさっさと道具一式を片付けはじめているところだった。
「ファレリア。死の際に抱くべき、平安っていうのが、どういうものか分かるか？」

「それは私から学んでも仕方のないものよ」
ファレリアはラミタイを見もせずに言い放つ。だが、その目は、すでに準備の過程を終えた人間が、まだ出発地点にも立っていない人間を見下すそれなのだろう。
彼女はラミタイを置き去りにして、さっさと停止農園の金網をくぐって消えてしまった。
答えはいつも得られない。

## 3　歴史の記録

『１９４５年に、想像を絶する規模の大戦争、地球表面の異常な高エネルギー状態、第二次世界大戦は終結した。

アジアの敗者の国を作りかえて、西欧、北米の勝者の国の利益となるようにすることを目的とした多くの国が新たに作られた。これら戦後新国家は国家改造と国家制御のプロフェッショナルで成り立ち、国土というものをもたなかったが、それでもそこに存在していた。

久々の平和の時代だった。

戦前の硬直したブロック経済は下手な冗談となり、新たなる活気の中、啓示を求めて探索がなされた。

外宇宙に向けて久々に真摯な関心が示され、超深淵やコア観測が行われるための馬鹿でかいレンズが建造された。そこからは、すぐには役立たないだろう深遠な知識が得られることが予測された。

観測のみならず、近い将来に列強によって本格的な外宇宙開拓が始まるのではないかという噂が、しきりと人の口をついて出た。

それに対して、ミクロ方面への研究はそれ以上に躍進して、世間の認識を置いてきぼりにするほどのものだった。

遺伝子関連の欧米と日本の合同研究所が目覚ましい成果を上げた。地球の正反対に位置する二つの技術が融合したときに、一つの結論が生まれたのだった。

他の全ての時代同様、知は力だった。

経済面での発展は、技術発展にあり得ない振動をふりまきながら起こっていた。

戦後のアジアの混乱は、先勝側の無警戒でいた者をぎょっとさせるほどのもので、１９４９年には東部中国にて、チャイネシア、ウォール、チャンジャ＝ヴィジなどの国家が融合。『シェル』という枠組みが作られた。

この、十億というどのような視点から見ても目を見張るほどの人口から産み出されるマス・インダストリアルは、世界の概存の流れをかすませてしまうものだった。
新たな緊張が生まれた。
アメリカやイングランドの同盟者でありながら、言葉には表されることのない潜在的な実力を持つ、不気味なモスクワ市率いるソヴィエテ。それがシェルと手を組んだ際のインパクトがつぶやかれ、実際、翌年に手は組まれた。
これはアメリカ、イングランドの新世界構想レジュメをボロボロにしてしまった。
大戦終結によって作られた平和は、五年で捨て去られた。
列強は楽しげに軍備を拡張し、最近開発されたテクノロジーの軍事転用の可能性へ思いを馳せた。
小国はうんざりした顔で、次の戦を生き延びる方法を考えるため、頭を振り絞った。

ヨーロッパでは１９４５年のベルリン陥落以降も、異常国家連鎖連立による混乱が続いていた。
世界はヨーロッパから目をそらした。

そして万人の予想通り、朝鮮半島で戦の火の手が上がった。
１９５０年。後に半島戦争と呼ばれることになる戦である。
人間の、戦争を制御しようという試みは、第二次世界大戦のときと同様にまるで成功せず、半島戦争は激しさをたちまち増していった。極東の戦後新国家のリーダー、リビルダーがアメリカから指揮権を託された。リビルダー軍は半島北部で発生した、ちょっと理解不能なプロセッサー主義なるものの信奉者と、それを支援するシェルとソヴィエテの恐ろしく高性能な義勇軍の大群の前に、持てる力

全てを投入しなければならなくなった。だが、現地の小規模軍務企業軍やフィリピン派兵事業軍があっさり粉砕されると、状況は悪化した。リビルダー軍はまるでスズメバチと野犬の群れに同時に襲われた人間のように、どうにか応戦しながらソウルから退かねばならなかった。

リビルダーは、第二次世界大戦後の戦後処理の際のちょっとした不可解な出来事のせいで、日本に再軍備を許すことに抵抗を感じていた。

だが、プロセッサー勢力を食い止めるのに失敗すれば、リビルダーの親国家アメリカは、リビルダーを役に立たない国家と判断して、排除してしまおうとするかもしれない。そういったわけで、リビルダーは必死にならざるを得なかった。

日本の、大戦後保持を禁じられていた兵器はたちまち再建された。第二次世界大戦中に出番がなく、倉庫でスクラップにされるのを待っていた殺傷の道具は、再び整備されると、恐ろしい精気を取り戻した。そしてそれを操る腕にもまったく事欠かなかった。失業していた元軍人は日本中にあふれていたし、政府が声をかけると、彼らは逆向きの爆発のように集まってきた。

そして、日本軍は朝鮮半島に上陸する。その手にリビルダー製の潤沢な火器を持ち、しかし、その伝統的な戦術にはいささかの衰えも見せなかった。

プロセッサー主義勢力が一大攻勢をかけて、リビルダー側人種を日本海に追い落とそうと画策した。

だが、日本海に追い落とせたのはリビルダー軍中核だけだった。日本軍は迂回してプロセッサー主義勢力の伸びきった補給線を片っ端から断ち切っていく。さらにリビルダー軍が、大戦後保持を禁じて封印していた空中浮遊工作戦艦『ネクサス』の使用を日本軍に許すと、その三日後にはプロセッサー主義勢力拠点ピョンヤンやウォンサンは奇襲を受け、灰になった。

まるで刃を持ったつむじ風と戦をやっているような気分だったこ

とだろう。アジア諸国の中で最も辺境に位置する、小さな島国に過ぎない日本は、その強さを世界中に示し、もしこの国の軍が第二次世界大戦の天王山の場にあったらどうなっていたのだろうと、今となっては意味を持たない推論をばらまいた。

リビルダー軍はプロセッサー主義勢力の南下を止めるのみならず、押し返すことに成功。結果北緯３８度までリビルダー軍は掌握し、その南にはプロセッサー主義を食い止めることを目的とした新たな国が作られた。

その後は、始終リビルダー側に有利な戦況が続いたが、リビルダー首脳は味方の日本軍に対するあらぬ不安にかられたようで、休戦を提案。プロセッサー主義側も、地獄と仏とばかりにこれに飛びついた。

日本軍は無言で帰っていった。好きで始めた戦でなかったし、自国内でやるべき仕事も新たに準備されていた』

停止ボタンが押された。黒くて薄いながら、大量の情報を詰め込むことができる磁気テープは巻かれるのをやめ、録音されていた声もやんだ。

「どう思う？」

様々な機械が床から天井まで積まれた薄暗い一室の中、若い女が磁気テープを機械から外しながら、背後の男に尋ねた。

二人とも同じ青い制服を着ていた。軍人が着るものとも役人が着るものとも、どこか雰囲気の異なるものだ。白い篷髪を肩に垂らし、口髭を生やした初老の男は瞑想したまま口を開いた。

「いまさら歴史を教えてもらわずとも、全て知っている。その歴史を作ってきたのは我らなのだぞ。……とにかく、この国は大戦と半島戦争、双方を生き延びることに成功した」

若い女はうなずき、酸化染料で染められた髪特有の輝きをもつ銀髪が揺れた。

「かろうじてね。そして戦争はこの国に暗い影を落とした。いまなお、当時の狂気は拭えず、当時の亡霊は夜毎私たちを悩ましているわ。でも……それも近いうちに終わる」
「何をするつもりなんだ？」
女は振り返り、初老の男を見据えた。
「この国を解放するつもり」

## 4　ラミタイ

死へと向かう時計のネジは、生まれた直後に加えられた処置とともに巻かれたのだろう。

普通の人間は神の手によってのみ、死へと向かう時計のネジを巻かれるのに比べ、自分たちのそれには人間の手が加えられている。

ラミタイの家は和歌山市郊外に位置していた。瀬戸内海から絶え間なく吹き付ける風のため、劣化したガラスがかたかた音をたてていた。隙間ある床板から葛が忍び込んできているのが目に入る。そうならないように庭を整備するのはラミタイの仕事だった。いつごろから、自分はやるべき仕事を忘れてろくでもないことばかり考えるようになったのだろう、と自分に尋ねてみた。

居間ではテレスクリーン付きラジオがつけっぱなしになっていた。和歌山県では個人所有のラジオは珍しい家具だし、馬鹿でかいトランジスタを装備した街頭テレスクリーンのおかげでラミタイ自身も家のそれに触れることは少なかった。

真面目くさった表情の国営チャンネルのニュースキャスターがなにかを読んでいたが、空電の音がそれを意味のないつぶやきに変えている。ラミタイはテレスクリーン付きラジオの前に座り、なんのために設置されているのか分からないテレスクリーン表面のレバーやスイッチをいじってみたが、機械の状況は改善しなかった。周波数は固定されていた。この機械に対してラミタイが行える動作は、コンセントを抜くか、入れるかの二つだけだった。

ニュースキャスターの姿が消え、画面には新聞や写真で見慣れた人混みと、巨大な壁と門が映された。それを見て、ラミタイの瞳の憂鬱の色が濃さを増した。

戦争が様々なものを奪っていくということは、周知の事実だが、１９５０年の半島戦争が和歌山県人から奪っていったのは一つの世代の未来だった。
ユーラシア大陸で敵意が大きくなるに連れ、リビルダーと日本政府は一つにプロジェクトに手を伸ばした。
遺伝子強化プロジェクトである。
大戦後に完成した遺伝子関連の技術のおかげで、農場の生産力は上がり、さらに一度絶滅した生き物までもが地上によみがえった。
その技術を人体へ応用しようというのだ。
戦争に適した、戦争のための人種を作り出す。
遺伝的に戦闘に向いた要素を、産まれたばかりの新生児に埋め込み、十数年後には最高の兵士として戦場に送りこむ。
半島戦争が、第二次世界大戦のように延々と続けば、それを終わらすのは遺伝子強化された兵士になるのだ。
そういうわけで、産まれた和歌山県人はリビルダー指導下の日本政府公衆医療庁によって、じゃんじゃん遺伝子強化の処置を受けさせられた。
当時の情勢から考えれば、それは全く道理をわきまえているとされたことだった。
だが、半島戦争は日本軍の活躍によって三年後に終わってしまった。
結局、遺伝子強化人間が半島戦争に貢献することはまったくなかった。リビルダーも遺伝子強化技術の研究にかかる費用の面から、研究を断念した。日本の政府も速やかにこの件の責をしかるべき人々に負わして、それからこのことを忘却した。
それでも、この問題はしつこい持病のようにつきまとってきた。
数年後の追加調査で、和歌山県の遺伝子強化人間は、その強引な処置のおかげで、寿命がひどく短いということが明らかになったのだ。
遺伝子強化人間の中には何か、ウイルス似の未知の生き物が埋め

込まれている。だが、それは寄生といった生易しいものではない。融合だ。遺伝子強化人間は一種のキメラだった。

研究の結果、キメラという生き物は長生きを許されない存在だということが明らかになった。一つの肉体に、二つの生き物の精神、そして魂が乗ることはできなかった。いかなる種類のキメラとて、肉体が耐えきれず、醜く死んだ。

和歌山県の遺伝子強化人間の場合、埋め込まれた生き物は休止状態なのでしばらくは大丈夫だった。だが、設計者の意図通りにことが運べば、その生き物はやがて目覚め、人間とその生き物は、最高の兵士へと仕上げられる。そのはずだ。

つまり、遺伝子強化された子供は十代中盤まで生き、それから体内の生き物が目覚め、そのせいでぽたっと死んでしまうらしい。

この予測値に誤差はほとんどない。

政府の人々はとんでもない置き土産を置いていった当時の政府指導者と、リビルダーに向かって意味のない悪態をついた。

和歌山県内では、しばらく経ってから県民に遺伝子強化の事実は、少しずつ広まっていって、ついには子供たちの死は避けることのできない一つの出来事として全県民に浸透していた。遺伝子強化を施された世代の子供たちを、和歌山県では死すべき子供たちと呼べば、意味が通じた。

同時に無口な政府軍の方も様々な事態に備え始めた。

和歌山県の県境には高い壁と、そこに配備された政府軍の一軍が置かれた。和歌山県から出るには壁に設けられた関所を通るしかなく、それは三つしかなかった。関所を通る面倒を省こうと、壁を乗り越えようとした人間は誰であれすぐさま射殺される。これは全県民の常識となった。そして、遺伝子強化の痕跡のある人間、つまり和歌山県生まれの一定の年齢層の子供たちが関所を通る方便はなかった。

また、小舟を自作して、海から和歌山県を脱しようとした人々も、生きて他の県は踏めなかったと、話が伝わった。和歌山県の周囲の海には政府軍の潜水艦がひそんでいるという噂もあれば、政府軍がポリネシアから連れて来た海の魔物を和歌山県の牢番に仕立てている、という噂もあった。

と、封鎖された県国である和歌山県は確かに不便な側面もあっただろう。それでも、和歌山県民はそれをよしとし、静かに暮らしていた。つい最近までは門の前に行列などできなかった。

だが、遺伝子強化人間の寿命と予想される年が迫るにつれて、状況は変化を見せた。死が迫ったことに直面させられた若者の一部は自暴自棄な気分になり、徒党を組んで暴れだすかもしれないという考えが県内に広まっていた。それに備えて、県軍の動きは活発になり、県境の防備も強化されていた。

ラミタイは遺伝子強化を施された最初の世代だ。

自分もやはり自暴自棄になって、周りのものを手当たり次第、破壊しようと考えるようになるのだろうか？

ラミタイはその場面を想像しようとしたが、まるで現実的には思えなかった。自分にそんな度胸があるものか。いざ、死が迫って来ても、あたふたしている間に全ては終わってしまうとか、所詮はそんなものなのだろう。

県境の話題に関しても同様だった。和歌山県から死ぬまで出ることができないことを定められているラミタイにとって、県の外というのはアメリカや、南極や、月の砂漠同様に自身の頭の中でしか訪れることのかなわない地であり、県軍に逆らって県境を破るだなんて考えが頭の片隅をよぎることもない。

テレスクリーン付きラジオは全国の天気予報を流しはじめるが、予報士が口にする地名は意味を伴わなかった。

ふちのかけた茶碗で味噌汁をすすっていると、奥の間から母が現

れた。逆光のため暗くなった女の顔が歪むのが分かる。
「今日は学校に行くよ。最後の講義があるんだ」
「勝手にすればいい」
ラミタイの死が近づいているにもかかわらず、会話はこれだけだった。
ラミタイへの嫌悪が、彼女の遺伝子との違いから来ているものなのか、それとも、遺伝子の問題を差し引いて、単にラミタイのことむかつく弱腰な奴だと嫌ってのことなのかは分からない。
とにかく、法の定める通りに同じ家に住んでいるだけで、母とラミタイの接点はこれ以上発展したことがなかったし、もうラミタイの方も半ば彼女を無視していた。
ラミタイの父は戦場に立てば優秀な戦士で、農場では県で一番のみかん栽培士だったという。だが、なんであったにせよ、その男はラミタイに影響を与える前にラミタイの人生から退場していた。

和歌山市中心部には政府関連ビルや、県の主要臓器である立派な建物が並ぶが、何よりも目につく建物は、選果場だ。
高層ビルよりも背は高く、その幅も古王の墳墓のようにどっしりしている。特に根拠はないが、この巨大建造物は月からさえも見えると言われていた。
モノカルチャーを運命づけられた県にとって、これはシンボルの役割も担っているが、実際に和歌山県中の収穫された柑橘類はここに集められ、それから船に乗せられ日本中、そして世界中に運ばれていく。
古くから受け継がれてきた手法のおかげで、気難しい柑橘類は、世界最高レベルの芸術品となって出荷された。
そこから得られる外貨は、日本にとっても重要だった。
選果場の隣のアカデミーは、江戸時代に築かれた建物で、当時の流行のビザンチン風デザインがちりばめられたおそろしく立派なつ

くりだった。アカデミーは大きいが、残念ながら建造者の予測は外れたようで、その後和歌山県が日本を代表する学術都市となることはなかった。それでも、その学校の呼び名はただアカデミーとなっていて、和歌山県の他の学校には背負うことの許されない風格というものがあった。

校庭に人影は少なく、いたとしても聖職者のように落ち着いた動作なので、部外者にはここが学校だと、すぐには気付くことができないだろう。

死を前にして多くの子供たちは外部からの猥雑な雑音から顔を背けているのだ。いわば学校全体が、そして街全体が、末期癌患者のような落ち着きとともにあった。

おれたちは死を前にしてこうも落ち着いていられるのか、というどこか誇らしい諦観がラミタイを支配した。

広大な学校の回廊を、規則正しく太い柱が並んでいる。その陰に立つのは大理石で作られた先哲の像。壁の巨大なレリーフに描かれるのは古き時代の苦難の日々。

そして、遺伝子強化人間は現代で、苦難の日々を間もなく終えようとしている。

アカデミーで、ルネサンス期以前の生物歴史学とラテン語学を受け持つフジーム教授はわずかながら集まった生徒に向かって言った。

「最後の最後まで学習しようという意欲を失わなかった君たちを私は誇りに思うよ」

フジーム教授は学校に残って授業をした最後の教授だった。他の教員がどこへ消えたのかラミタイには分からない。暴動の際の被害者になることを恐れて、和歌山県脱出の大行列に加わっているのか、それとも、夏が終わる頃には死んでしまうと言われている遺伝子強化人間第一世代の子供たちに、ものを教えるのは無益と判断したのか。

それでも立派な学校の立派な業務システムはしっかり機能している。
「若いながら過酷な運命を背負わされえた君たちには、一億人全ての日本人が、いや、世界中の誰もが同情を示すことだろう」
フジーム教授は悲しげに手帳を閉じた。
「そして明日からは夏休みだ。最後にやるべきことを探すがいい」
「だが、僕たちは有限な人生のおかげで得たものがある」
クラスの人気者、ザーゴが声を張り上げるのが聞こえる。
「この心の平安を普通の人間は見ることはできない。探すことすら思いつかないだろう。それは歴史から明らかだ。このことについて、僕たちは明らかに好運だ」
ザーゴの周りの仲間たちが彼に賛同して穏やかな歓声を上げた。
ザーゴを見るのは数日ぶりだったが、この数日間で彼はより大きな物を精神の面で得ることに成功したのだろう。死が近づくにつれ、指数関数的スピードで多くのことを理解していくようだった。
数年前のザーゴは歴史書に出て来る、殉教者に見えていた。だが、彼の成長のスピードから考慮するに、彼が死期を迎えるときには、歴史書に出て来る聖人のような風格をまとっているのではないだろうか？
ラミタイは嘆息した。
どうにもたまらなくなって、早足で教室をあとにした。

アカデミーの回廊を歩み去って行くフジーム教授に向かってラミタイは小さな声を投げかけた。
「わからないんです」
フジーム教授の肩が一回り縮んだかのように見えた。
「なぜ、みんな死を平然と来るべき通過点の一つとして捕らえることができるのでしょうね。おれがその向こうの虚無を恐れているのに。世界から自分の痕跡が消え去り、何も残らないことに震え上が

っているのに。そこから大いなる成長やその結論たる平安など築き上げれそうにもないんです……おれは出来損ないの遺伝子強化人間の中でも、特に矮小な存在なのでしょうね」
「君は矮小な者などではないさ」
「そうでしょうか……」
「そうだとも」
ラミタイが欲しいのは気休めではなくて、助言であり、この状況を好転する解決法だった。だが、フジーム教授は何か確信があるかのような断固な口調で、根拠のないことを言い、ラミタイにそれをどうすることもできなかった。
「だとすれば、おれはザーゴのいうような心の平安を抱いて死ぬことができるのでしょうか？」
「心の平安か……」
フジーム教授はまるでそれが異質な概念なように、躊躇しながら発音した。その声が低く、聞き取るのが難しいぶつぶつというものに変わっていく。
「そうだな……確かに……周りに迷惑をかけずに消えていくのは間違っていない。だが、君たちはそれのみを目的とせず、努力して生きていくべきなのだ……」
「だとしても、おれ達はもうすぐ死にます。あとわずかな期間の生にどういった意味があるのでしょう」
「違う。違うんだ。大切なのは生きようとすることを怠らないことだ」
フジーム教授は高い額に皺を寄せ、やはり断言するかのように言い、そして、すぐに身震いした。
「……いや、これは卑怯だな。いままで君たちに私たちは死の平安ばかり説いてきたのに、いざ君たちが死のうというときに生の重要さを説くのは。忘れてくれ」
ラミタイは何も言えなかった。
「私にはもう君に教えることは何もない。私こそが矮小な者なのだ

から」

アカデミー全体が奇妙な静けさに包まれ、すり減った石の階段を下りる足音はアカデミー中にこだまするように思えた。

ラミタイは広大ながら、人間よりも薄暗い環境を好む生き物のために作ったかのようなロッカールームへ下りていった。錆びて穴だらけになったロッカーの扉を開けると、学校側から最近の無断欠席を咎める紙片が届いていた。罰は九月に与えられるとあった。

「そのころにはおれは死んでるさ」

ラミタイはつぶやいた。学校の業務システムは夏休み中にこの学年の生徒全員が消え去るだろう事実を徹底的に無視しているようだった。

はっと気付けば、薄やみの向こうから染み出るようにザーゴが現れる所だった。リーダーになる素質を生まれながらに持っていて、そして、彼はその使い方を生まれてから磨きをかけてきていた。

疲れているが、彼の目には力があふれている。普通の人間から感じることはできない、死すべき子供たちの、悟りを開いたそれだ。

「よう、ラミ。ファレリアは元気か？」

「相変わらず分け分からんものを描いているようだよ」

ファレリアはいち早くアカデミーへの通学をやめた生徒の一人だった。

「それが彼女流の心の平安に身をおき、最期を迎えようとする方法なのだろうな」

「かもな。知ったことか」

「彼女のそういった諦観は、死が近づけば正当化されるとの考えなのだろうが、僕は正直、死を前にしても日常の規則を崩すことは、世の中の調和を乱すことになると思えるのだよね。まあ、僕は昔から彼女とはうまが合わなかったし、こういう意見に関してもーー」

ラミタイはロッカーの中の紙片をぐしゃぐしゃと丸める。ザーゴ

は巧みに、しまったという顔を作った。
「ーーすまない。おまえはこういった話題を好まなかったね」
ラミタイは無言で、ついでにその下にも溜まっていた紙の束も破りにかかった。
「おいおい。それは資源の不適切な扱い方だぞ。いまでこそ物質的に多少豊かになったが、それでもこれはほんの十年ほどの努力の結晶なんだ。そして、物質面での豊かさは精神面での豊かさを、予想されていたほど成長させなかったのはいまや常識となりつつある」
「いまさらそんな事が何になるって言うんだ……」
ファレリアに言ったのと同じ言葉だが、あまりにひっそりと響く声だったので自分の声とは思えないほどだった。
「そんな事って、どれのことだい？　資源？　精神面の成長に関する知識？」
「全部だよ。どれも死んでしまえばなにも残らない」
「有史以来の、数多くの若くして死んでいった先哲のことを考えても見ろよ。偉大な職務を務めた先哲は、その存命中に尊ばれることは希なものだ」
「おれは偉大な職務を務めてない。人間ですらない。遺伝的実験の失敗作の化け物でしかないんだぞ」
ラミタイは騒々しくロッカーの扉を閉めた。
ザーゴは、話がくどいくせに、ろくに何もできない奴を相手にしているかのような、呆れを含んだ笑みを浮かべた。
そのままファレリアのように、あるいはフジーム教授のように歩み去って行くものと、ラミタイは予想していたが、代わりにザーゴは懐から黄ばんだ紙切れを取り出した。
「こういったイベントがおまえの助けになればいいのだがな、ラミ」
ラミタイは市内の掲示板でも、こういうものが貼ってあったということに気付いた。
紙切れを受け取り、ざっと一読してみる。何やら音楽関係のイベントに関することらしい。そのバンドは有名な連中だった。

「ピートルズ？　アメリカの歌い手？」
ＰＯＥＴＯＬＥＺと書いてピートルズと発音するべきの、最近、世界単位で人気急上昇中というこのバンド。彼らについては、和歌山県人の、しかもそれほど音楽にのめり込んでいないラミタイでさえも、度々耳にしていた。アルゼンチンの貧民によって結成された五人組が、列強の中でも特に最強といわれる国、アメリカに乗り込んで、その音楽界を統べたことは、異様なことの多い近年でも特に注目すべきことだった。
「馬鹿な。信じられない。そもそも、和歌山県は隔離された地だぞ。異国の歌手が入れるはずがない」
「まあ、僕も実物のレコードを聞いたことがないし、果たしてやってくるのが本物なのかさえ知らないけど、彼らが来ることは県に特別な活気を広めること間違いないよ」
ザーゴはそう言って快活に笑った。
どうやって和歌山県がそんな連中を招けるのかは想像もつかなかった。県庁の一集団が、とんでもない努力をしたのだろうか。
「ピートルズのリーダー、ジョン・ジクサスはフォークとロックを融合した際に、インスピレーションを手にしたんだ。これは今まで誰も考えつかなかったことで、ジクサスが世紀の傑物であることは、彼が戦前の生まれにも関わらず、己の限界を超越したということで証拠づけられる。正真正銘たるアバンギャルドの旗手さ」
ザーゴが解説した。
「そうなのかい」
戦前と言われたところで、どの戦争の前のことなのか分からなかった。戦争は世界中でひっきりなしに行われている。
「また、彼らの新趣向の音楽が人間の精神に深い波紋を投げ掛けるということは、科学的にも心霊的にも証明されている。多くの招霊術が演奏と同時に行われて、それが一段とピートルズにカリスマを与えているそうだよ」
「すごそうだな」

「そういうことだ。彼らの音楽がおまえの悩みを一挙に片付けてくれることを祈っているよ。死すべき子供たちは優先的に演奏場に入れてくれるとのことだ。ファレリアを誘って楽しんでこいよ」
そう言ってザーゴは陽気にラミタイの肩を叩き、来たときと同じように薄やみに溶けるように去ったいった。

外は異常な暑さ。だが、八月というのに奇妙に道は埃っぽい。今年の夏はどこか様子がおかしかった。
アカデミーのある市の中心部から辺縁部にある家までの道は、冬ならばみかん運搬のためのマンモスが紀伊山脈から下りてくるのに使われるのだが、いまの季節にはそういう興味深い光景もない。
肥料を運ぶロバに引かれた車とすれ違い、原動機付き三輪自動車がぱたぱた音をたてて追い抜いていった。
頭上をごろごろと低い音が通過した。雷を想像させるが、今日は雨雲なんて一片と浮かんでいない。
ラミタイは自分の穴の空いた靴から目を上げ、一瞬自分と周囲の畑を影に包んだ巨体に目を見張った。それは飛行機械だったが、ラミタイの知るいかなるものよりも桁違いに大きい。
まるで空飛ぶ島だった。
県軍の飛行機械だろうか。いや、県軍というのは、職務には異様に熱心だが、貧弱で劣悪な装備しか持っている印象しかない。だとすればこの空飛ぶ戦艦は何なのか。
ラミタイの疑問などおかまいなく黒い巨体は北を目指して飛び去っていった。

## 5　県軍人

全長五百メートル以上の空飛ぶ戦艦、ネクサス表面は様々なガイドセンサーや砲塔ででこぼこしていた。舷側には血のような赤い文字で認識番号と政府軍の紋章が描かれている。ネクサスは上から見ても横から見ても矢尻の形で、艦橋や武装などは前方に集められている。後方にあるのはジャイロコプター用の飛行甲板と安定翼だけだ。

海に浮かぶ戦艦が船の上に砲を並べるのに対して、空飛ぶネクサスが船の下部に砲を並べるのは道理だ。主砲の装甲回転砲塔は座布団のように平べったいので、収納式の脚を使った着陸の邪魔にはならなかった。

そのネクサスに随伴するように和歌山県軍ジャイロコプターが飛んでいたが、こちらは小さ過ぎて地上の人間には気付かれることすらなかった。和歌山県軍のジャイロコプターはネクサスの表面をなめるようにして追い抜いていく。

別にネクサスのクルーを驚かせるためにこんな真似をやっているのではない。大阪の対空陣地からの指示だった。彼らの、監視する飛行対象を一つでも減らして楽しようという算段は見え見えだ。

それにジャイロコプターの操縦席のクロノトン伍長だって、からかうなら政府軍のネクサスよりからかいがいのある奴を探すはずだった。

機長席に座る和歌山県軍人イルヒラム曹長は剃り上げた頭に手を置きながら、ゆっくりと閉じていたまぶたを開いた。

政府軍はいかなる県の軍よりも高飛車な上に、ユーモアというものを理解しない。そして百戦錬磨で冷静沈着なので、あの巨大なネクサスが突如飛行能力を失って、眼下の大地に地響きとともに衝突したとしても、眉一つ動かさないだろう。彼はそう思った。

パイロットのクロノトン伍長はひどく物静かな、口ひげを生やした痩せた男で、彼を見たものは誰も彼を軍人と考えなかったし、信じようともしなかった。
ジャイロコプター内のもう一人の男、ウォンニ伍長は機体から身を乗り出して、武器ラックから吊り下げられたスピーカーをスパナでいじっている。ウォンニは頭上から強大な手のひらで加圧されたような体型のがっしりした奴で、それほど手先が器用でもないのに、やたらと機械を改造するのに熱を上げていた。
武器ラックには本来なら対戦車ロケットや２０ミリ機関砲がつけられるはずなのだが、和歌山県は平和な県のうえ、そういったものの維持費は高くついた。何年も前に、和歌山県軍は所有する飛行機械や車輛の全てから武装を取り除いている。
このジャイロコプターにはみかん農場のスピーカータワーの一つから拝借してきたスピーカーが取り付けられていて、ときにそれは大音響の音楽を流し、ジャイロコプターの存在を際立てていた。
ジャイロコプターはネクサスの突き出た艦橋をかわすために機体を大きく傾ける。ウォンニの横に置いてあった工具箱が床をザーッと滑っていき、大きく開け放たれた扉から落下していった。
工具箱はネクサスの数ある砲座の一つにつっこみ、衝撃で開いた工具箱からネジやボルト、ナットなどが暴風雨のようにほとばしって、ネクサスの砲兵が悲鳴を上げて逃げ惑った。
さながらクレイモア爆弾だな。イルヒラムは思う。
「よし、直ったようやな」
ウォンニが額の汗を拭いながら言って、プラグをレコード・プレイヤーにつないだ。ターンテーブルで回るレコードのでこぼこした黒い表面にカートリッジの針を慎重にあてると、撥弦楽器を主役にしたバラードがスピーカーから大音響で流れ出した。
「くそ！　サヴォウノ・ルゾンのバラードなんか流しやがる！」
機長席のイルヒラムは拳で風防ガラスを殴りつけ、防弾処理済みのはずのそれには蜘蛛の巣のようなひびが入った。

このような類の音楽を聴くと、イルヒラムの胸は毒ガスを吸い込んだように悪くなるのだ。
「僕たちがあれを嫌っているから、ウォンニはあればかり流すのだろうね、きっと」
操縦席のクロノトンが振り向いて言った。
「なに言ってんです。この雄々しい調べに心の弦を震わせられないなんて、全く信じがたい人々だ。半島戦争の後遺症であんたらの精神の高次な部分は、まとめて腐り落ちてしまったんでしょうね」
「ほう？　ネクサスを見ろよ、政府軍の連中だってこの音楽に怒り狂ってるようだぞ」
イルヒラムは言ってやった。ネクサスの砲座の一つで、体の各所からナットやネジを生やした、おかしな男がこちらに向かって拳を振り回している。
「最近流行のアメリカのあれ、なんといった？　ピートルズだ。ピートルズのレコードとか買ってこいよ、ウォンニ」
「イルヒラム曹長、ああいう常人の理解を超越した芸術形態の音楽、分かるんすか？」
ウォンニは尋ね、それからイルヒラムが答える間を与えず自分で叫んだ。
「無理だ！　無骨な軍人イルヒラムが理解できるのは物質的なもののみ！　その目は破壊する標的を探し、その指は引き金を引くためのみに存在する！　そんなイルヒラム曹長がピートルズの音楽を聴いて招霊術を行うとどうなるかって？　地球におかしなものが一つ増えるだけすよ！」
ウォンニはギリシャかメキシコの悲劇の主人公のように身を振りかざし天を仰いだ。
そして真顔に戻って、
「ピートルズは無しです」
「なに一人で勝手に結論に至ってるんだ」
イルヒラムはうなった。操縦席ではクロノトンがヘルメットに包

まれた頭を抱え、それを計器類にがんがんぶちあてていた。
「このひどい音楽をどうにかしてくださあい！」
「二日酔いに悩む男が操縦席にいるぜ。ひっひっひ」
ウォンニが言う。
「違う！　クロノトンの方が正論だ！　サヴォウノ・ルゾンの曲はどれもひどいが、今日のは特別にひどい！　辛抱ならん、ウォンニ、音楽を切れ！」
「サヴォウノ・ルゾンは和歌山県出身の歌手なんすよ。まったく、あんたらには愛県心ってものはないのかね」
イルヒラムは足下から空き瓶を拾うと、窓から放った。それはスピーカーにがつりとぶち当たり、聴くに堪えない騒音を発するのを永遠にやめた。スピーカーがひどく損傷したのを見ると、ウォンニはぎゃあっと悲鳴を上げ、機体後部で丸まって滂沱と涙を流しはじめた。それを見て、イルヒラムは体内の寄生虫に苦しむ野獣を想像する。

大阪航空軍基地の広大な発着場では周りの県の県軍から集められた飛行機械が、乾いた体を灼熱のアスファルトの上であぶっていた。
「なんだか混んでるね。ま、うちの県のためにこんなに周りの県が出兵してくれるとは、ありがたい限りだけど」
「親切なご近所だ。見返りは今年の冬に採れるみかんか、ええ？」
楽しげな部下二人に対して、イルヒラムは眉間にしわを寄せていた。
「すこし多過ぎやしないか？　和歌山県の暴動ごときでこんなにも集まるものか？」
「最近平和が続いているから、どこの県でも軍は暇をもてあましてるんだよ、きっと。おかげで僕の機は駐機する場所がないんだけどね」
クロノトンは足下のキャノピーガラスを通して、わずかながらジ

ャイロコプターを停めれそうな隙間を見つけた。
イルヒラムは、頭上をさっきのネクサスが通過していくのを見上げた。
ネクサスがその巨体の下部から、最近東京に築かれた巨塔の基部の太さにさえ勝るという、しっかりした鋼鉄の足を地面に伸ばす。
空飛ぶ戦艦がそうして、大阪航空軍基地に着陸し始めるに及んで、表情がこわばった。
「馬鹿な！？」
ネクサスが着陸しようとしている基地外縁部、そこでネクサスの邪悪な兄弟たちがずらりと待機していることに気付いたのだ。
禍々しい姿の黒い政府軍のネクサス。シルエットだけ見たのなら見分けはつくまいが、目をこらせば一隻一隻、微妙に形状が異なり、しかしどれも恐ろしく力強い見た目だ。それはオーダーメイドのためというよりかは数百年にわたる使用と改造の結果だった。
さきほどのネクサスがその隊列に加わった。総勢、二十四隻。
「なんて数だ！？」
「これほどのネクサスが集まるのは半島戦争以来じゃないすか？なんかイベントでもあるんでしょうかね？　ひひひ……」
ウォンニは陽気に笑って、それからイルヒラムの顔から言わんとすることを読み取った。
「……まさか、うちの県のために？」
「他にこの辺でイベントなんてあるか？」
その間にクロノトンは三重県軍の武装グライダーと奈良県軍の空挺装甲車の間にジャイロコプターを強引にねじこんでいた。
ジャイロコプターの上でびゅんびゅん回る鋼鉄の刃から命を守ろうと、他の県軍の兵士があわてて退避する。
「ジョビ大佐には私が会う。おまえ達は離陸準備をして待っていろ」
イルヒラムはそう言い残してジャイロコプターから飛び降りた。

基地内の司令本部ビル。
『和歌山県遺伝子強化人間対策本部』と書かれた扉を蹴り開け、イルヒラムはどどどどっと部屋にかけ込んだ。
「ジョビ大佐！」
ジョビ・ルゾン大佐は椅子にどっかり腰を沈め、両足をテーブルの上に置いてくつろいでいたが、イルヒラムが嵐のようにやってくると、驚きのあまりワーッと叫んで椅子から転げ落ちてしまった。
「イ、イルヒラム曹長。よく来た」
「一体何が起こっているのです？　外の軍勢は一体？　我らの県の暴動を沈めるには多過ぎる兵力です！　そして、なぜ政府軍が？　ネクサスが？　百姓一揆や地方豪族の反乱では政府軍が動くことすら珍しいのに、若者が暴動の気配を見せた程度で、北京やモスクワを攻略できるほどの大軍が集まるのは異常です！」
「そんなにいっぺんにきかれても困るのだが……日本中の軍人がうちの県のみかんを食べに集まったという可能性はないか？」
「いまは夏ですからね！」
「ふむ」
ジョビ大佐は椅子に座り直し、居ずまいを正した。
黒い肌に紫色の髪という彼の姿は、およそ和歌山県人風ではない。何らかの医学的特性かもしれないし、あるいは異人種の親を持つのかもしれない。それにも関わらず、彼が大佐という地位にて、このような県の重要な問題を扱っているのは、彼の有能さか、あるいは豊富なコネの備蓄をほのめかしていた。
彼はゆっくりと瞬膜のようなまぶたを開いた。
「政府はどういったわけか、この事件を非常に重要視してくださっている」
「なぜでしょう？　単に間もなく死ぬ運命にある若者達が暴動を起こすかもしれない、というだけだというのに」
「それは分からない」
ジョビ大佐は書類入れの引き出しを開いた。そこには様々なファ

イルと、和歌山県産のみかんの箱があった。ジョビ大佐はしかめっ面をして、ファイルの一つを手に取る。
「もしかしてら、遺伝子強化人間という単語に政府は興味をおひかれになったのかもしれない」
「それは大いに可能性のある推論に思えますね」
「そして、理由がどうであれ、政府が本腰をお入れになるのなら、我々和歌山県軍もそれに合わせたより能率的な動きができるようにならねばならないのだよ、イルヒラム曹長」
ジョビ大佐は机の下から大形の通信機を取り出した。イルヒラムはそれを一目見て、おおっ、と感嘆の声を上げた。
最新モデルの戦域通信機だ。音声のみならず、磁気テープの内容さえ転送できる。その出力は本州全域をカバーし、力強い電波は地底からの通信をも可能にする。みかんの果汁を用いた自己発電能力さえも持っていることだろう。最新の科学の産物だ。
「これを持って君は和歌山県に戻らねばならない。君は遺伝子強化人間の暴動に際したら、私の指示に従い、困難な任務を達成してほしいのだ」
「和歌山県軍の兵士には私よりも暴動鎮圧が得意な兵士がいると思いますよ。私の専門は対テロリスト駆逐と市街戦です」
イルヒラムが言うと、ジョビ大佐は大きく溜め息をつき、
「イルヒラム曹長、恥ずかしいことだが和歌山県軍はその規模の小ささのせいで、暴動鎮圧の専門家というものを持たない。だが、君なら上手くやれるだろう。君の半島戦争での活躍なら私も知っている」
「十年以上も前のことです」
イルヒラムは朝鮮半島での朧げな記憶を呼び覚まそうとした。だが、それらの大半は帰国後に受けさせられた治療のおかげで人工的な忘却の彼方にある。
半島戦争より前のことは思い出せる。戦争の後のことも何の問題もない。

ただ、半島戦争中のことだけが、ぽっかりと奇妙に欠落していた。
おかげで、自分の活躍の話は、他人の活躍の話のようにイルヒラムに感銘を与えなかった。
「頼むよ、イルヒラム曹長。これは君にしかできない仕事だろう。それに、他県の軍や政府軍も全力で君をサポートしてくださることだ。和歌山県の将来のためにやり遂げてくれ」
いまのイルヒラムは和歌山県への愛県心からのみ構成される県軍人なのだ。
彼はジョビ大佐の言葉を味わい、そしてうなずいた。
「いいでしょう。やりましょう」

イルヒラムと彼の二人の部下の乗るジャイロコプターが混み合う駐機場を縫うように進んでいく。着陸のときにはヘリコプター同様、垂直着陸が可能だが、離陸の際には滑走路を必要とした。
「戻るぞ、和歌山に」
「へいへい。このジャイロコプターは気軽に隣の県に行ったり来たりするためのタクシーというわけなのだね」
クロノトンはつぶやいて、滑走路に立ちふさがる邪魔者に向けてクラクションをブーッと鳴らした。
「おおおお、最新モデルの通信機！　これでもう、みかん農園のスピーカーをかっぱらわずに済む！」
嬉しそうに叫んで、ウォンニはイルヒラムの足の間から通信機をかっさらっていった。
「おいおい、それまで改造するのかよ」
「やめられません。なぜ俺が機械をいじるのにはまっているか、分かりますか？」
ウォンニはどかっと兵員用座席に座った。
「俺の人生は政府に存分にいじり回されたからです。朝鮮半島で戦ったのも、和歌山県民のことを思えばのこと。それが今はどうです

？　日本は富んでいっているのに、うちの県はどうです？　政府の作った死すべき子供の始末を押し付けられ、俺たち県軍に至っちゃ、武器もそろえられない！　ひっひっひ！」
ウォンニは空襲警報のような笑い声を上げた。その様子は控えめに見ても、異様だった。狂気を感じた。
だが、考えてみれば、ウォンニは普段からどこかおかしかった。半島戦争で溜まった狂気を、自我の一部に置き換えているのだ。クロノトンと違った意味で、こいつはタフな部下だった。
「そういうわけで俺は、政府が俺をいじったように、機械をいじりまくってやるのです。分かります？　ほら、精神学用語でこういうのなんっつうんでしたっけ？　フロイトの」
「知るか。我らの指導者にして、よき理解者たる政府に不敬なことを言うもんじゃないぞ。それに、どれほどみずぼらしくても、我らは県を守っているのだ。誇りをもつのだな」
イルヒラムは言葉を終えた。もともと言葉で部下を従わせるスキルは持っていない。正しい行動をすれば、部下はついてきてくれるものだ。
「へいへい。心の片隅にとどめておきますよ。じゃ、通信機の改造を始めます」
「任務に支障がなければなんでもいい」
「もちろんですとも。イルヒラム曹長、びっくりさせてあげますよ」
そう言って、ウォンニはにやにやと笑った。

ジョビ大佐は和歌山県軍のジャイロコプターが飛び去るのを窓から見届けた後、再び椅子へと戻った。
だが、くつろぐ間もなく、
「ジョビ大佐」
扉が傷口のようにじわりと開いて、二人の人間が入ってきた。その声はあまりに冷たく、無機質に感じられ、ジョビ大佐は驚きのあ

まり椅子の上で縮み上がったかのような動作をする。
入ってきたのは、銀色の髪をあみだくじのように複雑な形に編んだ若い女と、口髭を蓄えた初老の男。
彼らの制服は彼らの正体をはっきりと表していた。
「ＰＣＯの方々ですね。お待ちしていました。ＰＣＯの飛行機がやってくるのには気付きませんでしたが、隠密ステルス旅客機でいらしたのですか？」
ジョビ大佐は尋ねた。
「私達は今到着したネクサスに便乗していたのです。私はクジＰＣＯ調整師」
「わしはハチノへＰＣＯ警備主任」
ハチノへは痩せてはいるが、骨格のしっかりした体の脇に、金色のサーベルめいたものを吊るしている。片方の目は眼帯で隠されていたが、日焼けした顔の前部に陽気な笑みを浮かべ、上部にはアメリカの牛追いの男がかぶるような白い帽子をかぶり、着物の上にＰＣＯの制服を羽織っている。伸ばした髪も、口髭も真っ白だ。
妙な男だった。
一方、クジという女は真面目一徹の技術官僚といった雰囲気で、すでに頭の中にジョビ大佐と和歌山県と今回の事件に関する相当数のデータを蓄積していそうだ。腰になにか銃を装備しているようだが、彼女の役割から考えるに、それはアクセサリのようなものだろう。ハチノへの金色の光り輝くサーベルよりかは良識といったものを感じさせるアイテムだ。
「私は和歌山県軍大佐ジョビ・ルゾンです。あの有名な歌手、サヴォウノ・ルゾンは私の弟です」
ジョビ大佐はさりげなくその点を強調したが、ＰＣＯの二人は相づちを打つだけだった。和歌山県の外ではサヴォウノ・ルゾンはあまり有名でないのかもしれない。
「今回の作戦に政府軍のみならず、ＰＣＯにまで関心を示していただいて、その喜びは言葉に表せられないほどです。なんといっても、

最近の日本の経済成長はＰＣＯの助けなしではあり得ませんでしたからね」
「恐縮です。ただし、我々ＰＣＯはゆるやかな経済的協議組織に過ぎず、実働的な戦力というものは持ち合わせていません」
「それは、我々和歌山県軍も似たようなものですが、ではなぜ和歌山県に……？」
「仕事だよ」
ハチノヘが微笑の顔で言った。クジもうなずき、
「今回の遺伝子強化人間の暴動という事件は、非常に特異なイベントですからね。学べることは少なくないと私達は考えています」
「素敵な心がけですね。でも、正直、見ていてそう面白いものかどうかは分かりませんよ」
ジョビ大佐は悲しげに言って、椅子に体重を預けた。
「遺伝子強化人間と言ったところで、人間となんら見た目に変わりがないのはご存知の通り。たとえ激しい暴動が起きるにしても、和歌山県軍はそれに備えています。おそらく、今年のみかんの生産は落ちず、シフトに変更すらないのでしょう」
「そうですね。まあ、私達の予測外のことが起きる可能性は常にありますし、私達は和歌山県軍になんらかのアドバイスと、技術的な援助を施すことができるでしょう」
「心強い限りです」
ジョビ大佐は破顔して言った。

## 6　ラミタイ

■

和歌山県はそう遠くなく死んでしまうはずの子供たちに対して、贖罪のつもりか、同情のつもりか、無料で、提供できる限りのサービスを提供してきた。そして、その中にはろくなサービスが含まれていなかった。

例えば、映画を例にあげると、和歌山県自身は映画を作る技術を持っていないし、隔離された地理的条件が他県からのフィルムの輸入を困難にしている。そう書かれた県の役人の弁明が映画館でポスター代わりに並んでいる。そういう県なのだ。ラミタイはこの手の台詞を産まれたときから聞かされてきた。

ザーゴの言っていたピートルズを招くために、誰かさんは途轍もない努力をしたことだろう。

ラミタイも世界的芸術家ピートルズの超越的音楽に関する噂は耳にしていたし、少なからず興味もあった。ファレリアにピートルズのことを投げかけてみると、勘弁してくれとの返答がかえってきた。最近のファレリアらしい返答だ。

そこで一人で和歌山アリーナに向かった。だが、もともと狭かったそのアリーナは、人でごった返していた。

死すべき子供たちは、優先して入れてくれるはずだったが、だとしても人があまりに多くて、アリーナの入り口までたどり着く手がなかった。

結局、遥か彼方のステージのピートルズのメンバーがどのような姿なのか見えることはなかった。

ただ、ステージから聞こえてきたのは妙にヨーロッパ風になまった英語だったし、しかも一人の人間の声だけだった。ピートルズは五人組の上、メンバーのジョン・ジクサス以下全員がアルゼンチン

出身なのだから、アリーナに立つのが本物のビートルズかどうかは怪しいものだと思った。
　そのためだろうか、唐突にラミタイは興味を失い、そこを離れると、和歌山県隔離のために朽ち果てた国鉄線路を歩いて和歌山市辺縁部に帰ってきた。気を取り直して、今度は映画でも見に行くことに決める。映画館にあるのは白黒で、滅多に更新もされない映画のみが並ぶが、一昔前のスライド写真や、堅苦しい国営チャンネルのみのテレスクリーン付きラジオより大分面白かった。何よりも、現実を束の間忘れさせてくれる力を持っている。
　気がつけば、なぜか懲りずにファレリアに同行を誘っていた。
　なぜこの期に及んで、他の死すべき子供と接触を保ち、死が近づいてくる以前の生活を真似ようとしてしまうのだろう。
　ファレリアが、そして周囲の人間たちが急速に変わっていくのに対する、反抗なのかもしれない。同時に、ファレリアのように、全てとの接点を絶つ勇気も、気力もないのが現実だった。
　だが、そうした考えを頭の中でまとめる前に、ファレリアから了承の返事が来た。驚かされた。

　病巣に全ての免疫因子が集まるように、全県民がビートルズを見にいったのか、和歌山市辺縁部には人気がない。
　空が赤紫色に染まる中、板葺きの厩の隣、竹穂垣に囲まれた廃墟にも似た木造の映画館の前に二人は立っていた。その入り口は閉ざされている。
「どうする？　帰る？」
　ファレリアが気のせいか投げやりな口調で尋ねてきた。
「帰るっていっても、他にいくほどの場所ももうないよ。ここで残ってる小遣い全てを使ってしまいたかったんだけどな」
「消費は正しい市民活動ね」
　一晩中立ち尽くしている訳にもいかない。ラミタイは柵を飛び越

し、映画館の横の管理小屋に侵入した。

がたつく扉の向こう、暗い小空間は散らかっていて、柑橘類から作る地酒の匂いが充満していた。

机についている人の姿がないので留守かと思ったが、人はいた。

酔っぱらった人間がよくやるように、床に座って上体を壁に持たせかけている初老の男がいた。県の役人には見えなかったが、県の役人の制服を着ている。

「あのーー」

「この県の数少ない娯楽であるはずのここからも人の姿が消えたか。いよいよおしまいだな」

男は呂律の回らない口で言った。

「……別にみんな死んでしまったわけではないですよ。ピートルズを見に行っただけです」

「誰もが幻影へと逃げ込むわけか」

「今日はやってるのかい？」

「ああそうだろうよ。今更そんなことをして何になるというんだ？」

男の焦点の合っていない目は床を見ていた。

「どうせおまえたちはみんな死ぬんだ。今更何の意味があるというのだ？　……そうだ。……おまえたちは呪われた生き物だ」

ラミタイは防御のために目を閉じた。こういった台詞は、非公式の場所で時たま聞かされてきた。

「おまえたちが死に絶えれば、この県もかつてのように、正常な県に戻るだろう。全ての県民に幸福がもたらされるだろうよ」

「今日は閉まっているんだね？」

「おまえたちのせいなんだ……。さっさとくたばってーー」

「私たちは死ぬにしても、誇りを持っているし、何か残せる物はあるわ」

背後から細くて静かな声がして、ラミタイはびくっとした。

ファレリアが戸口に立ち、斜陽が彼女の影を伸ばして小屋の中に投げかけている。
「……機材は全て置いてある。マニュアルもだ。勝手に使え」
酔っぱらいはそれだけ言うと、頭を胸元に埋め、肩を震わせ始めた。泣いているのか、笑っているのかは全く分からなかった。
「行こう」
ラミタイはファレリアの腕を引っ張って、薄暗い一室から引き離した。

映画のフィルムは初めて見る物で、大胆な映像効果に度肝を抜かれた。ストーリーは複雑だったが、それでも簡略すると、狂った軍人から男女が逃げ惑うというストーリーだった。
男女の顔は、まるで遺伝子強化でも施されたかのように悲壮だった。
狂った軍人が、不気味な決め台詞を口から吐く。
『おまえたちに脛骨を突き刺し、壷に放り込んでやろうか！？』
どういう意味なのだろう。薄く気になった。
やがて、この映画にも終わりがやってくる。同時に現実が再開して、ラミタイはため息をついた。
大して意外ではなかったが、フィルムが終わったときにファレリアの姿は隣になかった。

ファレリアの姿はすぐ近くの海岸にあった。
湿気で重たい、涼しい海風が顔に当たる。
太平洋に潜んでいるのだろう、魔物の咆哮が聞こえたような気がした。
大勢の人間が、頭の上に灯台が倒れてきたときに上げるような、どこか悲しさを含んだ声音だ。

「消えたわ」
彼女がつぶやいた。
「何が？」
ファレリアの後ろ姿に問う。
「生き物が消えてしまったわ」
「ピートルズを聞きにいったんじゃないのか？」
ラミタイは言ったが、我ながら意味をなさない言葉だった。
「予兆か……」
「多分ね」
ここで生まれる死の陰から逃げていったのだろう。賢明な手だ。
だが、自分たち、死すべき子供がこの陰から逃げる手はない。
「その時が来たら、どうするつもりなんだ？」
誰にも尋ねたことのなかった質問を、ラミタイは口にしていた。
ようやくそれを人に尋ねる時期が来た気がした。
「やるべきことがある」
「何だ？」
彼女はラミタイの方を見ず、きびすを返す。
「来て」
後ろ姿は、怒っているようにも、泣いているようにも見えたが、
彼女の声は断固としたものだった。

ラミタイはファレリアと交える言葉もなく、ついていった。
みかん収穫時期に急な斜面を荷箱を満載して上り下りするモノトラックが眠っている。みかん畑の地面が青く見えるのはみかんの木の根元に防水布が敷いてあるためだ。地熱も、自然の光も余さず農作物につぎ込もうという、農夫の知恵だった。そして、そのためにみかんの木は水面から突き出しているように見えた。
ラミタイは炎の輝きに気付いた。
みかん畑の一角、夜は黙り込んでいるスピーカータワーの鉄の足

の下。ごうごうとたき火が燃えている。
みかん畑の持ち主は、唐突に、夏の間の除草などといった、面倒な仕事が嫌になって、焼き畑を決心したのだろうか？　ラミタイはそう考えた。
だが、違った。
炎の揺れるパターンは奇妙なシンボルを表しているように見えた。そしてその周囲を取り巻く人影。
ある者は炎で全身を清めようというかのように、炎の舌でなめられそうなほど炎に接して立ち、ある者は座り込んだまま炎を凝視している。
その目はまるでーー神が生まれるのを目撃しようとでもいうかのような狂わしい光そのもの。
そして、炎の周りの人間の年齢はラミタイとファレリアと同じぐらいだった。
死すべき子供たちだ。
ラミタイの足が震えた。自暴自棄になってしまい、放火の罪を犯そうというのか？
隣のファレリアが両手でラミタイの腕を握っていることに気付いた。
「来るぞ！」
炎を取り巻く若い男女が口々に叫んだ。
一人の死すべき若い男が進み出た。火炎を抱くように両腕をひろげながら炎の中へ進んでいく。
ラミタイの震えは立っていられないほどになる。
死を前に、自暴自棄になった子供は、その重圧に耐えきれず、焼身自殺でもって一足早く死んでしまおうというのか。
しかし、それでもなかった。
炎の中で、なにか強烈な反応が起きたかのように火勢は強まり、炎に入った男がまだ両手を広げて天を仰いでいる姿が黒く見えた。男は体を反り、口を大きく開けている。

そして、男は吠えた。異質で、悲痛で、しかし、断末魔とは全く異なる叫び。
その叫びは畑を満たし、ラミタイの頭の中に染みるように入ってくる。
炎の周りの死すべき子供たちが踊るように揺らめいた。ラミタイの視界も、急な涙のためにぼやけていく。
炎の中の男は頭が地面につくほど反り返り、ついに耐えきれなくなったかのように腹がばくんと避けた。そこから新たな何かが生えてくる。
男の体内で様々な変化が起き、それに合わせて外見も変わろうとしていた。炎が飛び散り、みかんの木や周囲の死すべき子供たちに降り注ぐ。
誰もそれに注意を払わなかった。
周りの死すべき子供たちは、皆が皆、恍惚の表情でその劇的変化を見とれていた。
ラミタイは腕の痛みに気付く。ファレリアの指の爪は、ラミタイの腕に食い込むほどだった。
「これが……私たちの……なるべき姿」
彼女は歯を食いしばったまま、かすれた声でつぶやいた。
ラミタイは彼女の手を振り払うと、くぐもった叫びを残して、夜の闇へと駆け出した。

■

## 7　ハチノヘとクジ

■

飛行戦艦ネクサスがどのような理論で宙に浮かんでいるかは、全く知られていなかった。

ネクサスを覆う装甲と武装は数万トンの重さで、にもかかわらず堂々と高度八百メートルを進んでいく様から思うに、ネクサスは周囲の空間の物理法則を曲げているようだ。

クジは目を細め、それからキーボードを叩いてディスプレイを船外カメラから、和歌山県周辺マップに切り替えた。

足下から響いてくるのは、ネクサスの呼吸音。ネクサスに埋め込まれた謎の反応炉は、ネクサスが浮かんでいようが、着地していようがおかまいなく、常に騒々しくうなり続けていた。

ネクサスを造ったのは鎖国期のはるか昔、鎌倉時代か、室町時代のゴールデンエイジに工房にこもっていた天才だろう。日本の現代的な機械テクノロジーの大半が、これらネクサス内からサルベージされた物からもたらされたことは間違いないが、それでもネクサスについて知っていることは実に少なかった。

クジの眼前で幻想的な光と色で和歌山県周辺状況を表しているディスプレイの材質でさえ、なんらかの高次な硅素塩であること以外分からない。クジの指はキーボードの上を目にも止まらない早さで動いているが、彼女自身は自分の打ち込んでいる命令の内容を理解できない。ただ、暗記している意味も知らない文字列をネクサスに与え、ネクサスはそれに無言で従っている。

ネクサスは、自分に乗っているのが偉大な建造者ではなく、こんなちっぽけで愚かな人間だと気付いているのだろうか？

分からなかった。

ネクサスとは、理解のできない、怪物なのだ。

ネクサスに長いこと乗っているクジだが、突然、予測する間もなく恐怖に襲われることが多々あった。
自分たちは巨大な獣の胃袋の中に、無邪気に入っていく虫だ。いつかは、獣はいらだち、自分たちを殺そうと決意するのだろう。いつかは。
そして、自分がやろうとしているのは何だ？
４フレーズ計画。あれはネクサスの怒りを爆発させようとせっせと薪をくべているようなものだった。
いや……だめだ。気弱になっている場合じゃない。
やらねばならないことなのだ。
人類の未来のためだ。
クジは青白い顔で立ち上がり、廊下へ出た。政府軍クルーであふれたブリッジはすぐ隣だった。同僚のハチノへの姿を探す。だが、いるのはブースでディスプレイを睨む政府軍クルーばかり。
そのとき、指揮官らしき姿をブリッジの真ん中で見つけ、クジは歩み寄った。
だが、それはハチノへではなかった。
和歌山県軍のリーダー、ジョビ大佐が笑顔でクジに会釈する。黒い肌の切れ目の向こうで白い歯が光った。
「二十四隻のネクサスとともに進軍なんて、まったく夢のようですね！」
ブリッジ前面にある大形スクリーンに、隊列を組む二十四隻のネクサスが映されていた。
これも船外カメラで撮っているものだ。ネクサスには防御力を高めるためか、窓は一つもなかったが、そこらじゅうに埋め込まれたセンサー類が人間の目よりもはるかに役に立った。
「あの半島戦争でさえ、これほどのネクサスがそろったことはなかったはずです。こんな光景を目にできるとは、私も運がいい」
「ジョビ大佐、あなたも半島戦争に出兵を？」
ジョビ大佐は自嘲めいた笑みを作って、首を横に振った。

「私は最前線に立って、部下を指揮するというのは苦手でしてね」
「なるほど」
クジは適当に相づちを打つ。
一応、当事者の県軍リーダーのため、ジョビ大佐は政府軍ネクサスに乗っているが、和歌山県軍なんていうのはみかん泥棒を追い払うことぐらいしかできない、烏合の衆だろう。
ジョビ大佐にはなんの力もなく、ＰＣＯのプロジェクトの妨害とはなりえなかった。
「しかし、二十四隻ものネクサスというのは、本当にすごい。この姿には、アメリカやソヴィエテといった、列強大国も感銘を受けるとは思いませんか？」
「かもしれません」
「日本が列強大国の一つに加われる日も近そうです。私は嬉しくなってきましたよ」
ジョビ大佐は言う。
だが、クジはゆっくりと首を横に振った。
「地球上にはアメリカ、イングランド、それらと敵対中のシェル、ソヴィエテ、そして、それ以外にもいくつかの列強と呼ばれる強国がそれぞれの野心を持って、天下統一を狙ってます。しかし、私たち小国にとっては、これは困った状況です。現に、日本はリビルダーの利益のための工場と成り下がっています。また、いつ列強の政治的ゲームの一つの犠牲として滅ぼされてしまうとも分かりません」
「でも、あなたたちのおかげで、日本の経済は成長しているではありませんか」
「それだけでは列強の地位へと上ることはできないのですよ、ジョビ大佐。それに、日本は第二次世界大戦や、半島戦争で不必要に目立ちすぎました。日本各地に作られた、リビルダー駐屯基地の存在する意味をご存知で？」
「あれらは、プロセッサー主義者や、中国人が攻めてきたときに、私たちを守ってくれる物でしょう」

ジョビ大佐は言った。リビルダーが発表した通りの言葉だった。
なるほど。県軍のリーダーでこの有様か。
「列強は、新たなライバルが増えるのを許しはしないのですよ。それに、地球上の資源にも限りはありますからね。天下を狙うゲームのプレイヤーは少なければ少ないほど都合がいい」
クジは言う。
「あまり先人に不敬なことを言いたくはありませんが、リビルダーがやって来て命じなければ、遺伝子強化人間などという邪悪なプロジェクトが彼らの頭をよぎることはなかったでしょう」
「そうかもしれませんね」
ジョビ大佐は言ったが、その日本人離れした顔は、判読できない表情を浮かべていた。
「ですが、私たちＰＣＯは最近、新たな技術を手にしました。近いうちに状況は変化を見せるはずです」
「おお、新技術導入による市場の活性化ですか。それは楽しみです」
クジは微笑み、赤い舌で唇を湿した。
ＰＣＯをゆるやかな経済的協議組織と思っているこの男は、来るべきときにはどういう表情でニュースを聞くのだろう？
そのとき、ブリッジにハチノヘが入ってきたのに気付いた。
ハチノヘはサーベルを鞘ごと手に持ち、クジにゆっくりとうなずきかけた。準備ができたという合図だ。
「ジョビ大佐、長野のＰＣＯ本部から重要メッセージが届いたようなので、失礼させていただきます」
「どうぞどうぞ」
クジはハチノヘに続いてブリッジをあとにした。

ネクサスは、建造者の一人一人の精神内部を投影したかのように薄暗い内部構造を秘めている。その奥底の内蔵部には、一部の政府軍高官や特別な人間しか入ることの許されない部屋があるのだが、

いま、その部屋には実に大勢の人間がいた。
彼らは流行の地方からの集団上京のためにネクサスに便乗した人々ではない。全員が学者風の雰囲気をまとった男女であり、多くはかなりの高齢だった。
そして、全員が椅子に縛り付けられている。まるでそうしていないと、椅子の上で体の形を保っておけない、とでもいうかのように見えた。
「これで全員なのか？」
ハチノヘがサーベルの柄に手を置いて尋ねた。
「意外と少ないものだな、遺伝子強化プロジェクト参加の研究者は」
「当時のリビルダーが豊富にデータをくれたおかげで、この人数でやっていけたのでしょうね。あと、全員を捕らえられたわけじゃないことをお忘れなく」
クジは上向きのメスの刃のような目つきで、書類をめくりながらいった。
この囚人達は第二次世界大戦後から半島戦争に至るまでの期間、遺伝子強化プロジェクトに携わり、和歌山で生まれた人間をどんどん遺伝子強化していった、今回の事件の実行犯にして、黒幕、そして元凶そのものでもあった。
ＰＣＯと政府軍は日本中を探しまわって、彼らの行方を探った。ある者はいまだに研究機関に職を持ち、またある者は退職して平安に身を置いていた。それが十年ぶりか、十五年ぶりかに鋼鉄の船の中で再会を果たしたというわけだ。
ハチノヘは囚人たちを威圧的に見下ろした。早くもこの役柄に馴染みはじめている、と自分を分析した。また、そうなっていなければクジにプロ意識を問われる場面だ。
この研究者たちはどこか、ＰＣＯや政府の現職の科学者たちとは違う感じがした。なにかおかしな、狂わしい動きを感じる。
人間の遺伝子とやらをいじって、よき兵士にしようとする狂気の、そしてバカらしいプロジェクトを押し進めるうちに彼ら自身もなに

か悪いものを吸収してしまったのかもしれない。
「ハチノヘ、一番重要なのが欠けてるわね。遺伝子強化プロジェクト主任が」
「くそ。不手際だ。うちの情報部も抜けてるからな」
「でも……ある程度は仕方ないかも。その男の居場所が居場所だもの」
「どこだ？」
「和歌山県県立アカデミー内。それが遺伝子強化プロジェクト主任のフジーム博士の居場所」
ハチノヘは肩をがさがさふるわせて笑った。
「ははは……ユーモラスな奴だな。自分の作品に囲まれて教鞭を握ってるのか。いいだろう。和歌山県軍にフジーム博士を捕らえさせる」
ＰＣＯ警備主任は壁面に取り付けられた受話器を取り、ジョビ大佐に電話した。
その間、クジは座らされている囚人がぶつぶつつぶやいているのに気付いた。もちろん、囚人はぶつぶつつぶやくか、ぎゃあぎゃあ騒ぐものに決まっているのだが、その内容がクジの興味をひいた。
「フジームか。……あれは裏切り者じゃった。我らは大きな可能性を手にしようとしていたのを、あやつはつぶしてしもうた」
「どういうこと？」
クジは目線をあわせようと、囚人の前にかがんだ。
「政府は我らの研究は手遅れで、もう必要ないなどと抜かしたが、我らは期限内に完成させていた。あのフジームが研究を隠しておったのだ。あやつが急に弱気になってあのようなことをしなければ、我らはーー」
科学者の有機金属の義眼はクジなんか見ていないようだった。
「でもね、科学者、実際あなたたちの遺伝子強化プロジェクトは不要だったのよ。あんなものなしでも我々リビルダー側は半島戦争で南下してくるシェル軍とソヴィエテ軍を食い止めて、休戦を結ぶこ

とに成功したわ」
「そうだ」
電話を終えたハチノヘがクジの隣に立った。
「そして半島戦争が終わってから、すでに十年が経つ。いまなおリビルダーの桎梏こそ消えぬが、日本は十年間戦争を味わず、かつてないほどの勢いで経済は成長した。いまや時代は戦争よりも平和を愛する時代へと変わりつつあるのだ。人間の遺伝子をいじくって強い兵士を作るなどという馬鹿なプロジェクトはここで葬らねばならん」
ハチノヘは言う。それに対し、囚人の科学者たちははらわたを滅茶苦茶に揺さぶるようにして、一様に嘲りの笑いを上げた。
「馬鹿はおまえ達だ。ＰＣＯの者たちよ、おまえ達はなにも知らないのじゃな？　我らの遺伝子強化プロジェクトがそんなつまらないものだと思っているのか？」
「思っているぞ」
ハチノヘが即答した。
「たわけ者め。教えてやろう、半島戦争中、リビルダー首脳はよき兵士たる遺伝子強化を施された兵士を作るように命じてきた。それは実につまらぬ仕事でもあった。だが、同時に我々は日本政府側の極秘機関からも命令を受けておった」
「極秘機関ねえ……それが私たちＰＣＯじゃないことは確かね。その命令とは？」
クジが紙になにか書きながら尋ねた。
「新たなる人間の種の創造だ。この惑星を任された人間はそれに相応する責任を持っておる。だが、我々は地球の上で争い合い、汚染し、他の種の生物を滅ぼしておるのじゃ。我々は変わっていかねばならぬ。遺伝子強化人間プロジェクトを用いれば我々は進化できるのじゃ。より強く、より賢き存在に」
「ふん、話が大きくなるな」
「半島戦争が予想に反して早々と終わってしまわねば、我々は遺伝

子強化人間に関してより多くの情報を手に入れ、さらには一代限りの兵器ではなく、我々の種族を置換することが可能な優れたものが産まれたというのに、その機会を潰してしまうとは惜しい話だ」
「狂ってるわね……」
「ここは狂った世界なのだ！　我らの狂った世界なのだ！　だが、短命とはいえ、遺伝子強化人間制作には手間をかけた。奴らがどれほどの破壊を引き起こしてくれるか、楽しみなものだ。そして、奴らが怒りに目覚めたときが、おまえ達の最期だ」
老科学者は歯のない口に笑みを浮かべ、口腔の闇をのぞかせた。
「おお、怖い。あなたたちが改変した哀れな子供たちが怒りに目覚めたときに襲われないよう、私たちはこの空中戦艦から出ないことにするわ。さて、政府軍の和歌山県制圧部隊を早く出撃させないと……。暴動を許すわけにはいかない」
クジは囚人たち椅子の間をゆっくり歩きながら言った。
ふと違和感を感じ、彼女の足が止まる。一番端の囚人の年齢が奇妙に若かった。
この部屋の科学者は皆、第二次世界大戦から半島戦争へと至る時期に最盛期だったため、多くの者が高齢だったが、この囚人の年齢はまだ少女と呼べるほど。
十五歳ほどだろうか。
嫌な予感がしてクジは手元の書類をめくった。
囚人の女は白目を向いていた。その体が小刻みにかたかたと震えている。クジは彼女のプロフィールに目を走らせた。
ＰＣＯが彼女を捕らえたのは秋田県。そして出身は……和歌山県。
「くそっ」
クジは書類を放り投げる。ボキリと音がして女の椅子を床に留めていたボルトが弾けとんだ。彼女を縛っていたワイヤーが甲高い音をたててあっさりとちぎれた。
クジの手がホルスターへと伸びる。
「我らの成果を見よーっ！」

老科学者が、そびえ立つ山頂に立った人間がやるように声を張り上げた。
クジは凄まじい力に殴打され、壁に叩き付けられた。衝撃で天井のランプが落ちる。
ハチノヘは思わず茫然自失としていた。一瞬前まで捕われた科学者に見えた集団の中に、まったくの異形の姿となって部屋の真ん中に立っている奴がいる。
その体の色は悪性腫瘍の黒だ。なおも、その体の内側から、体を大きくしようとする力があるようで、異形はさらに膨らみ、たくましくなっていく。自己の内側からの膨圧に耐えきれないように、異形がおぞましい叫びをあげた。
いかなる他の存在とも似つかない、その姿をハチノヘは解釈できない。恐怖に似た感情を芽生えてくる。異形が、クジを打ち倒した触手を口から放ったが、それにハチノヘが対応できたのは単に訓練の賜物だった。
ハチノヘのサーベルが一閃して、異形の触手は倒錯したソーセージのように床を跳ねた。ハチノヘはうおっ吠えて、科学者たちを踏みながら遺伝子強化の化け物に斬り掛かる。
しかし、敵は新たに腹や胸から手足を生やす。まるで加速された発芽の映像を見ているようだ。
ひるんだハチノヘを何本もの黒い屈強な腕が掴み、天井に叩き付ける。ハチノヘは訳の分からぬ怒声を発しながらサーベルを振り回し、敵の指が何本も斬り落ちた。だが、敵はびくともしない。むしろ嘲笑を漏らすような音をたて、風車のように腕をふるい、ハチノヘノの体は床に突っ込む。空中戦艦の中につかの間の地震を生んだ。
男の息の根を止めるべく、異形の腕がコブラの頭のようにふり上がる。
床に転がるクジは激痛に顔をしかめながら、ホルスターから手銃を引き抜いた。合成樹脂製の銃床を歯で引き出し、肩にあてる。四角い照星の向こうには黒いごつごつした姿。もうそこにはまったく

人間の面影がない。
黒い顔がクジの方をゆっくりと向いた。視覚器らしいものはなにも見当たらないその顔からは、あったとしてもそこから表情を読み取ることなどできはしない。
クジは銃爪を引いた。敵もかわそうと、かすみを残して動く。
だが、動きは直ちに中断された。ハチノへのサーベルが遺伝子強化人間の足を床に縫い留めていた。血まみれのＰＣＯの男が床で、勝者の笑みを遺伝子強化人間に投げかける。
直後、銃弾がうなりを上げて破壊を開始した。

無薬莢弾特有の刺激臭が立ちこめる中、ハチノへはゆっくりと立ち上がった。
科学者は全員息絶えていた。クジの銃弾が、彼らを処刑するハチノへの手間を省いていた。
そして、その真ん中に長々と横たわる横たわる異形の死骸。弾倉一本分の銃弾のために極めて多孔状となったその姿は、ますますかつての人間の姿とかけ離れたものとなっていた。
ハチノへはクジを助け起こした。
「大丈夫か？」
「どっか折れたみたい。あっちもこっちも痛いし」
「長野に戻れば治療できようよ」
ハチノへはサーベルを自分の制服の上着で拭いながら、遺伝子強化人間の煙を上げる死体を足でつついた。
「これが何を意味するのか分かるな、クジ？」
「ええ」
「無害な子供に見えたそれは、突然黒くてでかい化け物に化けた。いや、科学者どもの言葉を借りれば進化した、か？」
「戦闘訓練をまったく受けていない子供が、攻性生物並みの戦闘力を得たわ」

「和歌山県には何匹の遺伝子強化人間がいるんだったか？」
「この世代の子供たち全部がそれよ」
「畜生め」
「……やるべきことは一つね」
ハチノヘは壁から受話器をとってクジに渡した。通話先はネクサス全二十四隻の艦橋だ。
「こちらＰＣＯの派遣オブザーバーのクジ」
ひどいことになるだろう、とクジは予測する。だが、躊躇は許されなかった。クジは一息に命じた。
「ＰＣＯから付加された権限レッド１を完全に発効する。全ネクサス、離陸して和歌山県県境を封鎖せよ。遺伝子強化人間対策プランをフェーズ２に移行する」
二十四人の艦長から了解の返事が返ってきた。

## 8　ラミタイ

■

自分がなにか黒くて恐ろしいものに変わってしまう夢に苦しめられていた。
高い悲鳴、低い悲鳴、あらゆる波長のもの。そして、第二次世界大戦のもの、半島戦争のもの、あらゆる場所での悲鳴全てが凝集して自分を作っていく。
自分の中にも、外にも悲鳴から逃げられる場所などない。
同時に、自分を恐れる無数の悲鳴に、打ち倒されようとしていた。

ラミタイは夢から覚め、窓のない寝室で荒く息をついた。夢が終わり、現実が再開した。
しつこく夜毎襲い来る悪夢だ。
いや、だんだんとはっきりしたものになりつつある。
予兆だ。
暗い破滅がまた一歩近づいてきた。
この絶望的な世界とは、所詮一種の長い悪夢のようなものなのか。死によってこれは終わるのだろうか。
そういった疑問が、不安が、心を責めさいなんで止まない。
県内の多くの同世代の人間、そしてラミタイ自身によってなされ続けてきた思考だった。
腕へと手を伸ばせば、ファレリアの爪によってできた傷に指が触れる。昨夜見た光景は幻ではなかった。
眠りが休息でないように、死は安息ではない。
遺伝子強化人間たる自分たちはその姿を強制的に変えられ、その業苦の生を最低のものへと落として、続けなければならないことを

定められている。
どこへ向かおうとも苦痛と狂気が待っている、迷宮の中にいるようなものだった。
悲鳴とも怒号ともつかない声を上げ、ラミタイは壁を殴っていた。
なぜだ？
なぜこの狂った世界は自分たちに不当な短い生しか与えなかったのみならず、平安とされていた死さえも奪おうとー

ジャーンとけたたましく電話が鳴った。
ラミタイは動かなかった。だが、それでも電話がなにかを責めるかのように、けたたましく鳴り続ける。今日は母が家にいない日だということを思い出すと、ラミタイは布団から這って出て行き、ふすまを開けた。
黒いかぶと虫型電話の受話器を取る。
「ラミ？」
ファレリアからだった。今誰よりも声を聞きたくない相手だ。
「……なんだよ」
「私たちの死がああいう醜いものだというのは見ての通りよ。あの遺伝子強化の化け物になってしまえば、もう理性は残らないわ」
「知っていたのか？」
ファレリアは一瞬口をつぐみ、
「フジーム教授から教えられたの。彼は遺伝子強化プロジェクトの元主任」
「……そうか」
「私はこれからアカデミーへ向かって、私が存在したという証拠を残らず消すつもり。それから自分自身も消す。それが実験材料として、兵器として作られた私の最後の偏狭な抵抗。どれほど意味を持つかは疑問だけれども」
ラミタイは言うべき言葉を見つけられなかった。

「ラミも、変異のときは大切な人が近くにいない場所を選びなさい」
ラミタイは受話器を置いた。
今日が人間として最後の日なのだろうか、と気になった。

もともと淡い色だったラミタイの行動計画は空白になった。
蒸し暑く、暗い家の中の息苦しさに耐えかね、発作的にラミタイは外に彷徨い出た。
頭上には今なお黄色い太陽。暑くて乾燥した風が吹いて、ラミタイの頭上で渦を巻いている。
ラミタイは心をかき乱されたまま、道ばたに座り込み、頭を抱えた。幼い頃から知っていたファレリアが自分の終末を決めて去ってしまったのが悲しかった。そして、死の間近に心に抱くべき平安、学校で唱えられていた説法を思い出しても胸が悪くなるだけだった。
終わりの見えていた自分の道筋は、近づくにつれ、目を背けたくなる醜いものでしかなかった。
全ては嘘の上に作り上げられた空虚な言葉に過ぎなかった。
ラミタイはぼうっとしながら、行き交う人々を眺めた。籠や風呂敷を背負う人々や、休憩中の農園作業者に混じって、荷を引くロバや馬が通っていく。自分が死んだとしても、世界は今までと同じように回り続ける。この光景も変わらないだろう。
何も変わりはしないのだ。

だが、人の流れは変わった。
遠くで叫びが上がり、突然方向転換する者、走り出すものが相次いだ。錆びた農業用具が道に置き去りにされる。
ラミタイは顔を上げ、呆然とした。
何かが起こったに違いない。
ラミタイは耳をそばだてたが、意味ある言葉は聞き取れなかった。

やむなく立ち上がると、ざわめきながら走る人の波に加わる。人の波は地区中央の広場に流れ込んでいた。
平和な農業の世界であったこの地で、人が突如集まり、叫んだり、わめいたりしているのは異様な光景だった。舗装されていない地面から茶色い土煙が何かを暗示するかのように舞い上がっている。
広場の人々が見ているのは、スピーカーを大量に身につけたテレスクリーンの塔だった。
テレスクリーンの画面は和歌山県のどこかの、煙を吐いている街角を映しているが、別に最近では珍しい光景ではなかった。
この人たちは何に驚いているのか。
予想外の心臓発作のような唐突さで日本の経済が麻痺したとか、第三次世界大戦が勃発したとか、という程度のニュースでは和歌山県の人間をここまで慌てさせるには足らない。
と、画面が乱れて、他の番組へと切り替わった。国営ニュースのキャスターの真面目くさった顔が大映しになった。
『ーー十四日に和歌山県を襲ったテロリストの一団は今なお県を占領しています。テロリストによる化学兵器に対抗すべく、政府軍は和歌山県の封鎖を完了しました。卑劣にして奸悪なテロリストに対して、偉大なる政府軍は非難のコメントをーー』
ニュースキャスターは言葉を続けたが、ラミタイは立ったまま身を凍り付かせていた。
テロリスト？
即座に理解した。
政府は遺伝子強化人間のことを隠している。
和歌山県の外の人間は、ここに残る忌まわしい呪いのことを知らない。
政府は……先達の狂った研究を直視することができなかったのだろうか。それとも自分たちに責が及ぶのを避ける為だろうか。
だが、ラミタイの考えをよそに、ニュースキャスターはなおもテロリストの非行を責め、その不吉な口腔からよどみなく死を語った。

『ーー和歌山県の多くの民は、すでにテロリスト側の虐殺によって命を落としたようですが、偉大なる政府はさらなる被害を防ぐ為、そして、テロリストに対する報復と懲罰の意味合いをこめ、新型爆弾を投入するつもりであると、先ほど正式に発表しました。この新型爆弾は和歌山県にはびこる悪を一掃するであろうことを、政府のスポークスマンは誇りを持ってコメントしていますーー』

衝撃。

それから恐怖がやってきた。

日本の様々なお茶の間で、そのニュースはほんのひと時の関心を引いたかもしれない。だが、和歌山県の人間だけには死刑の宣告のニュースであり、そして、それだけでは済まされないものだった。

遺伝子強化人間の寿命から来る死という、普通の和歌山県民にとっては何年も前から起こることを知っていた、言ってしまえば瑣末なことではない。

政府軍による県に対する、普遍的爆撃の宣言。自分たちを、庇護してくれる、よき親であり、よき指導者、少し大げさに言えば信仰する対象でさえある、政府軍からの一方的な攻撃の布告だった。

ラミタイは、自分がどうやってあの騒乱の場から抜け出してきたのか覚えていなかったが、気がついたらさっきの道ばたに腰を下ろしていた。体の震えを押しとどめることすら頭に上らなかった。

思えば、この県はなんと騒ぎと無縁だったことだろう。

いまや死に際した平安は失われた。それは嘘だったのみならず、完全に粉砕されてしまった。

政府は遺伝子強化人間という汚点を隠す為に、県民を巻き込んで爆撃を行うだろうことをほのめかした。一体、この県の何がそこまで政府の逆鱗に触れたのだろう？　それとも彼らは事務的な顔で、

日本を構成する県を一つ減らしてしまうつもりなのだろうか。
テレスクリーンのある広場のみならず、郊外の辻々、いや、和歌山の都市全体が騒ぎに包まれようとしていた。それほど遠くない場所から太くて黒い煙が上りはじめた。
変わりつつある故郷の姿から目を背け、ラミタイは立ち上がると、踵を返した。大勢の人間とすれ違う。道ばたの屋台はひっくり返り、馬が主人を見失って所在なげに立っている。
突如、目の前にあった飲食店のガラス戸がぶち割れて、人が道に転がってきた。いや、違う。木片とガラスの中で突っ伏しているのは黒い、異形の姿だった。
背丈はラミタイと同じほどだろうが、肌が黒く粘つく物に覆われた鱗へと変わっている。
だが、夕べ目にしたような、恍惚の身振りもなければ、歓喜の叫びもない。自身におこった変容への苦しみだけを表すように、憂鬱そうに震えている。
その顔が、ラミタイの方を向いて、目と目が合った。
つい先ほどまで、人間だった生物のその目が、その構造を変えていくのをラミタイは見ていた。
瞳孔が急速に大きくなり、白目の部分を飲み込んだ。そして、踊る炎のような光がその中心で生まれた。
見えざる、冷たい手で触れられたかのように、ラミタイは総毛立った。
眼前の生き物は、自分を同類と識別して、なにかメッセージを伝えようとしている。そのことが理解できた。
そして。
同時にはっきりと感知した。
自分の体内の何かも、それに返答しようと、動いている。
そのとき、飲食店の中から、何か長い柄のついた刃物が飛んできた。異形の生き物の後頸部に湿った音をたてて、突き刺さる。その生き物は、失望した人間のように目を閉じ、そして、もう動かなか

った。
「やったぞ！」
低い叫び声がして、一団の人間が店から飛び出てきた。
様々な階級の人間だった。みかん農園の労働者の老人もいれば、県の施設の制服を着た中年女もいた。
だが、ただ一つ、共通点があった。
彼らは死すべき子供ではない。
先頭の、県の役人の服の男が、異形の死骸から、武器をねじって、抜いた。
みかんの木の枝の皮を剥ぐのに使う、鋭利な鎌だった。木の皮を剥ぐと、養分が幹にたまるので、みかんの実が大きくなるのだ。
いま、その刃は、ねっとりとした異質な黒い体液に染まっていた。
大人たちは、皆、物事に熱中している人間の顔を浮かべているのがわかった。そして、彼らの顔がこっちを向く。
「もう一人いるぞ！」
先頭の男が怒鳴り、こっちを指差した。
一瞬、ラミタイは彼らが指差しているのが背後の誰かだと思って、振り向きさえした。
直後、鎌がうなりながら、自分の二の腕を切り裂いていったのに気付く。
「化け物を殺せ！」
一団が口々にそういう類いの大声を上げる。
違う。おれはまだ変異していない。いずれ変異するにしても、他の人に迷惑をかけるつもりはない。
そんな言葉が浮かぶが、大人たちの目の狂気、その手の中の包丁や剪定用大型はさみがラミタイへと突進してくると、言葉は口の中で消える。
この場で八つ裂きにされることと、平安なる死との相関について考えるよりも先に、ラミタイは身を翻して逃げ出していた。

「こんなことさえも経験しなければならないのか……」
和歌山市辺縁部から逃げ出した際に浴びた、信じがたい悪意を思い出して、ラミタイはふらついた。
人のいない方、いない方へと走ってきたので、自分が林の中にいることは意外でなかった。だが、それがファレリアお気に入りの停止農園の裏手というのは予想外だった。ファレリアはここにはいないが、彼女の画材一式は先日と同じ場所にまだ置かれていた。
ラミタイは主のいないファレリアの椅子に腰を下ろし、傷を調べた。服は大胆な染め方をした服の様に赤く染まっていたし、痛みはうっとおしい蠅のように、行ったり来たりしていた。
ファレリアの絵にかけてある布をとって、傷の少し上のところで縛ると、歯を使ってこれでもかというぐらい腕を締め付けた。
出血する人間に興味でも覚えたのか、防鳥ネットの所に飛びカニが集まってきているのが見えた。
ひどく疲れていた。
難儀な長い旅からの、帰り道のような疲れだ、と表す他ないものだった。
おかしな話だ。旅なんてやったことはない。和歌山県から出ることはできなかったのだから。
ここに座ると、嫌でも和歌山市の煙は目に入ってくる。
暴徒が死すべき子供たちを殺そうとしているのか。あるいは県軍さえも介入したのかもしれない。変異直前の子供だってみすみす殺されることは避けるだろう。いや、変異した後にもすぐには死なないのならば、全ての生き物よりも穢れて卑しい外見になった後さえも、暴徒に抵抗しようと暴れるのかもしれない。
頭に漠然と描いてきた、最期の時とはほど遠い。
暴徒には、自分たちに怒りを抱くよりかは、哀れんでほしかった。
自分たちは、果たしてこんな苦しみを受けるためだけに作られたのだろうか。

そうなのだろう。呪われた生き物である自分たちが、誇りを持って思い出されることだけは絶対にないはずだ。
もう時間がない。変異は目の前に違いない。
残念でならなかった。
もっと、この問題について考えていたのならば。そして、自分がこの地に存在したことの意味を、気付くだけの時間があれば……。
ファレリアの絵を初めて見た。それはいま、ラミタイの前に広がる和歌山の情景を描いたものだ。だが、そこから人間の作った人工物だけがきれいに除かれている。赤く染まった空と、植物と、遠くに見える海だけ。彼女らしい作品と呼ぼうか。
……いや。
そんなのは馬鹿げている。
自分に時間がいくらあったところで意味なんかない。迫り来る死から目をそらし続けてきたのだ。自分は、スタートラインにさえ立てなかった。
出来損ないの生き物の中の、出来損ない。
それが自分だ。
意識せず、ラミタイの血にまみれた右手の指が、絵の表面の赤い空に触れていた。
能うことなら、その表面から何か意味あるものを、なにか赤い果実のようなものや、心臓のようなものをつまみとろうというかのように、表面を引っ掻いた。
ラミタイの血が、ゆっくりと絵の表面を垂れていく。
それなら、自分以外の遺伝子強化人間ならどうなのだろう？
……ファレリア。
すでに、解答を見つけ出し、結論に至っていた彼女。
彼女は心の平安を我がものにした人間の輝きとともに、その時を迎えることだろう。
それを少しでも近くで、なにがしかを学び、吸収するのは許されないことなのだろうか。

分からない。
ラミタイの血は、風景画に赤い雨を降らせていた。
取り返しのつかないことになるかもしれない。自分はどうでもいいが、彼女にとってそうなるのは耐えられない。
だが、それでも、これは最後のチャンスに違いなかった。
自分には、暴徒を食い止める力も、政府軍の爆撃をなくす力もない。だとしても、彼女のその時を妨害しようとするものを、いくらかでも逸らすことはできるかもしれない。
むしろ、それに全力をあげるべきかもしれない。
いっそのことそれに命さえも……？
分からない。
だが、できることをやるしかなかった。ラミタイは立ち上がった。細かいことはファレリアに会った後に決めることにしよう。
猛然たる煙の下の、和歌山市を目指して歩いていく。

ファレリアの絵の表面を、ラミタイの血のあとがゆっくりと四方に広がっていった。
やがて、それは色を変えた。

空の色は血を吸ったかのように赤くなっていた。
ラミタイは自分の穴の空いた靴から目を上げ、一瞬自分と周囲の畑をおぼろげな影に包んだ無数の飛翔物に目を見張った。それは生物の一群だったが、ラミタイの知るいかなるものよりも異質だった。生き物というよりかは、悪い妄想の産物を思わせる、そんな生き物の一団が頭上を通過していく。
和歌山市中心部に入ると、暴徒の代わりにラミタイを迎えたのは死体だった。
初めは転々と転がっていたものが、だんだんと増えていった。

ラミタイは地面に胃液をぶちまいて、その中に黒くうごめく線虫のような姿があるのにも気付かず、よろめき進んだ。いまや、目で見るもの全てに死しか見いだせない。

空気は、信じがたい熱を帯び、粉塵と熱せられた血の匂いで、息もできないほどだった。

第二次世界大戦中に起きた、純然たる殲滅戦については学んでいたが、それが何を意味する訳でもなかった。

赤く染まった道路の上、ずたずたになったかつての人間の構成部品に触れないように気をつけていたが、やがて無理になった。足の踏み場がない。

政府のビルが、暴力的な幼児に襲われた玩具のように、その骨格の半分をえぐられていた。人間がそれをやるには、建設機械か、武器がいるだろう。

だが、彼らにはーー自分たちには、そんな物必要ない。

その隣には見慣れない丘があった。

瓦礫の山だと思ったがーー骸の山だった。

ラミタイはへたり込みそうになりながらも目をそらした。高さ三十メートルの山に含まれているのは、何千という人間だけではない。市内の、人間と関連する動物は、全て殺されたのだろう。

まるで、虐殺の機械と呼ぶべき、仕事の正確さだ。

ラミタイはよろめきつつ、さらに進んだ。

何よりもおぞましいのは、間もなく自分が変異を始めようとしているのを明瞭に感じることのできることだ。それが近づいてくるのを感じる。まるで、五感で感じることのできる物のように。それを理解することさえできそうだ。

自分は全ての生きる物を、死でもって冒涜する魔怪へと変じてしまい、それを止める手は存在しない。

当然のように、アカデミーの玄関ホールも死の回廊と化していた。

誰かの、だらりとのばされた足に蹴つまずき、内臓に足を取られ、ラミタイは柱に叩き付けられた。
直後にーー気付いた。
体内の何かが震えている。共振だった。
柱の反対側、三メートルと離れていないところに、それが一匹いた。
この殺戮を検分にきた悪夢の化身のような黒い姿がゆっくりとラミタイの目の前を横切っていく。
全身から刺を生やし、さらにその下の肌は飛びカニのようにゴツゴツしている。黒い肌のために遠目には気付きにくいが、全身に浴びた返り血が湯気を立てていた。
それがちらりと自分の方に目をやるのを見て、ラミタイは息を詰まらせた。
間違いない。
体内の異生物は、目の前の化け物に反応している。
ラミタイの視界が歪んだ。
化け物は、ラミタイに興味を失い、そのまま進むと、アカデミーの門から出た。その背中から、破裂するように翼が生える。刺だらけの骨格の合間に、分厚い膜が張られている。
それを大きく一回羽ばたかせ、化け物は消えた。
突如、ラミタイの視界の色彩が反転する。
よりかかっていた壁が脂肪のように柔らかくなり、気味の悪さにラミタイは悲鳴を上げそうになった。
いや、そんなことは起こっていない。
ラミタイの方の感覚がおかしくなっているに違いなかった。
熱を感じた。ここの気温は驚くべき高さだが、それだけではない。熱は体内からも生まれていた。
口を開けば自分の内臓が溶け出てくるのではないか。そんな考えが頭をよぎった。
体の中でも外でもひどく間違ったことばかりが進んでいた。

見慣れているが、全く違う場所と化した校内を歩き、フジーム教授の研究室へと入った。
他の全ての場所同様、ここも荒れ果てている。
入ってすぐに、奥の方に転がるその死体に気付いた。全く原形とどめていないにも関わらず、フジーム教授と確信できたが、それ以上は何の感慨も生まれなかった。
すでに、人間の死が当たり前のものとなっていた。
だが、彼女は？
数歩中に入り、そして、背後にめまいを起こさせるようなプレッシャーを感じた。
化け物がいる。
ラミタイは振り向いた。
そこにいたのはー見るに耐えない邪悪な生き物ではなかった。
ファレリアだ。

## 9　県軍人

■

クロノトンが制御板に埋め込まれた通信機のつまみを回すが、和歌山県軍の周波数は空電の音がひどすぎて何も聞き取ることができなかった。

「接続が悪いようだね」

クロノトンはジャイロコプターの計器を叩いたり、配線を引っ張ったり、制御機器の上でみかんをしぼってみたりするが、ノイズは消えない。

「変だな。和歌山市はすぐそこなのに」

「ついに経費削減のため県軍は通信網を破棄することに決めたのかもな」

イルヒラムが低い声で言う。

「暴動の危機があるこの時期にそれはないでしょ」

「あるいは、だ。通信網は暴徒の攻撃で細切れにされちまったのかもしれませんよ、うへひひひ……」

ジョビ大佐からもらった通信機を、スピーカーに改造していたウォンニはそう言って、甲高く爆笑した。

「いくらうちの県軍でも、子供たちの暴徒相手ぐらいにーー」

ジャイロコプターが山を飛び越え、幕がはがれるかのように、眼下に突如として和歌山市が広がった。

「ーーああ！？」

ウォンニが笑顔のまま硬直した。

「うああ……」

イルヒラムがうめき声を上げて席から立ち、窓辺へ寄った。それは快楽のうめきではない。驚愕と絶望のそれだ。

和歌山市は混乱と破壊の様子を強めていた。市そのものが、粘着

質で不健康な赤やオレンジ色の煙にまとわりつかれ、それにゆっくりと蝕まれている。上空から目で見る光景全てが、市の悲惨な破壊の実情を強調している。
　県軍の兵士たちの帰還を迎えるかのように、市の工業区で爆発が相次ぎ、みかん果汁還元塔がゆっくりと倒れていく。
「くそ！　俺たちの守るべき市が！　俺たちの守るべき市民が！　俺たちが留守の間に！　和歌山市防衛任務の県軍兵士どもは何をやっているんだ！」
　ウォンニはさらに神の名や、排泄物に関する悪態をわめき、ジャイロコプター内の装備に全力で八つ当たりを始めた。
　イルヒラムの腕が震え、防弾ガラスをぶん殴ると、それは申し訳なさそうに吹き飛んだ。
　激怒した県軍人たちを乗せたジャイロコプターはひどく騒々しいことになりながら、和歌山市の上を進んでいったが、その中で、操縦席のクロノトンは宗教家が神に祈るときにやるように硬く目をつぶり、そのまま操縦していた。そして、ゆっくりと彼が目を開いたとき、目を閉じる前にあった光が欠落していた。
「イルヒラム」
　クロノトンは席から振り返って、彼の上官を呼んだ。
　イルヒラムがその剃り上げた頭の下、鈍い目が死につつある市を反射している。
「イルヒラム！」
　生まれてからほとんど大声を上げたことがないと言われるクロノトンが怒鳴ると、イルヒラムは殴られたかのように傾いだ。防弾ガラスの割れた塊が窓枠からゆっくりと落下した。
　イルヒラムは顔を上げると、そこにはもう表情と呼べるものは残っていなかった。あるのは見るものをぞっとさせる無表情の仮面と、任務遂行への無機質な決意のみだ。彼は人間があげるとは思えないような声でうなり、床に唾を吐いた。
「死すべき子供たちに県軍は粉砕されてしまったのか。まったく、

たるんどる」
　イルヒラムの手が太腿のホルスターに伸び、軍用手銃を握ると、ウォンニを向けた。
　悪罵の限りを口から吐いていた県軍人は、負の感情に歪んだ顔を上官の銃口に向けた。
「ウォンニ、騒がしいぞ。おまえのその行為が任務を失敗に導くことを考えてみろ」
「うるせえ！　任務がなんだってーー」
「ウォンニ、おまえは任務に逆らえない」
　イルヒラムが銃口を向けたまま、低い声で言うと、ウォンニは歯をむき出し、顎が独立した生き物のように緊張した。彼の八つ当たりにより、彼の両腕から血が点々と滴り落ち、ジャイロコプターの後部には平らなものが無くなっていた。
　彼は勢いよく雄牛のように首を振ると、その口からはいつものように壊れた笑い声が飛び出してきた。
「ひっひっひっひ……」
　和歌山市からいくつも上る煙の柱をジャイロコプターは横切り、黒い汚れたものが機内に吹き込んできた。
　それを通過する中、ウォンニは腹を抱えてひどく笑っていた。
「最高だ。こいつは最高で。ひひひひ……。そうだ、任務を達成せねば！　俺たちに施された条件付けは俺たち県軍同様、程度の低いもののはずなのに、どうしてか逆らえませんね、ひひひ。俺の条件付けは、いかすんですよ」
「十分に武装した方が良さそうだね。フジーム博士とやらを捕まえる前に暴徒を二、三十人蹴散らさなきゃいけないかもしれない」
　クロノトンが言うと、イルヒラムはうなずき、自分の椅子の下から金属製の箱を引っ張りだした。
　中に詰まっているのは、武器と聞いて、ぱっと頭に浮かぶ大抵の種類のものが詰まっていた。どれも古いが、よく整備されている。
　イルヒラムは機械のように動いて、弾倉を次々と体に装備してい

く。最後に折り畳み式木製銃床の目立つ、無骨な長銃を取り出して、まるでバナナのように彎曲した弾倉を差し込み、負い紐を肩にかけた。
「機関銃は僕が使うから残しておいてくれよ」
操縦席からクロノトンが言った。
ウォンニはそれを聞くと、めちゃめちゃに大笑いした。
「ふはひひひ……！　市街戦でそんなものが役に立つか！　暴徒相手の接近戦にはこれに限るぜ」
彼が別の金属箱から引っ張りだしたのは銃器よりもさらにがっしりしたデザインの、電動のこぎりだった。それを手にした彼は、急に血色が良くなり、炯々と目は光った。
ウォンニは起動鎖を引き、重たげな機械のうなり声がジャイロコプターのエンジン音を圧した。
「イルヒラム、後ろに木こりがいるよ。のこぎりを持っている」
クロノトンが言う。イルヒラムはうなずき、
「きっと、紀伊山脈の上質な杉を切りにきたんだろうよ」
「イエエエイ！」
のこぎりを持つ男は長い歓声を上げながら、ジャイロコプター内に並ぶ座席をなぎ払い、床に積もった瓦礫を機外に蹴りだした。
イラヒラムは背後の騒音を完全に無視して風防窓から市を猛禽の目で睨む。眼下の惨状のために、現在位置は掴みにくくなっていた。
視界を横切るようにオレンジ色がかった爆炎が上がり、市の中心部周辺に群生していた複合団地が崩れていく。
県軍人の目はようやく県最大の建物、みかんの選果場を捕らえた。アカデミーも近いはずだ。
ジャイロコプターの騒音や、市での爆音に混じり、和歌山市の三十万の市民が一斉に素っ頓狂な疑問の叫びをあげでもしたかのような、不思議な声か、音がした。
いまの音は何だ？
「一体、死すべき子供たちはどうやってこんな破壊をふりまいたの

かな？」
　クロノトンがつぶやくように言った。
「さあな。みかんの皮から爆薬を抽出する方法でも見つけたのかもしれん。クロノトン、着陸ポイントを見つけろ」
　ジャイロコプターはヘリコプターと違って、ホバリングというのがどうにも苦手であったし、着陸時の機の方向には十分注意しないと、厄介なことになった。イルヒラムはジャイロコプターの下でたちこめる煙の向こうで、アカデミーのヘリパッドらしきものを認め、さらなる命令を出そうとした。
　とてつもない甲高い金属音が響き、ジャイロコプターの防弾ガラスという防弾ガラスが弾けて割れた。
　さっきイルヒラムが殴ったせいだろうか。
　だが、さらにジャイロコプターの装甲された機体を三十ヶ所で突き破る衝撃が走り、ちぎれた部品が機内を弾丸のようなスピードで跳ね回る。
　イルヒラムが出せる限りの大声をあげる番だった。
「対空攻撃だ！」
　操縦席のクロノトンの口が動いたが、なんと言っているのか聞き取れない。
「退避しろ！」
　イルヒラムは台風に倒される案山子のように床を転がった。床はジャイロコプターの苦悶が伝わったためか、でこぼこしている。
　窓のすぐ外をなにかが通過した。
　噴式砲弾かも知れないと思うより前に、イルヒラムの長銃が火を吹いた。
　窓の外で何か液体がぶちまけられるのを見た。だとすると、今のは人間か。
　そのとき、敵の攻撃がエンジンを貫いたということが、体にぶつかってきた熱風から分かった。
　ジャイロコプターの翼が燃えている！

それだけの表現では足りないくらいだった。大火は長大な壁のようだ。
いまやジャイロコプターは燃える制御不能の獣と化した。様々な破片をまき散らしながら、しかし、そのエネルギーは失わず、地面目がけて突っ込んでいく。
イルヒラムは風防窓の外、一瞬黒い影を目にした。炎を背に、機内のイルヒラムを嘲笑する、悪意そのものの姿。それは敵にちがいない。
イルヒラムは怒鳴った。
だが、その声は彼自身にも届かない。
爆音。

イルヒラム曹長は県軍の雄叫びを発しながら、ジャイロコプターの装甲板を蹴りとばして外へ出た。土の上を転がって、体の炎を沈める。
イルヒラムは片膝をついて立ち上がり、悪鬼の表情に笑みを加算した。
戦いだ。
半島戦争以来の、久々の本当の戦いだ。頭では忘れても、体は覚えている。
長銃はどこかに失っていたが、代わりに両方の腿のホルスターから手銃を抜いて構える。燃えるジャイロコプターの破片が雨のように降り注ぐ中、ジャイロコプターをたたき落とした敵へと、その照星をめぐらせる。
敵は一人ではなかった。大勢だ。これは予想通りだった。
だが、銃や爆発物で武装した子供たちではない。人間ですらなく、これは予想していなかった。
イルヒラムの前方には悪意を押し固めたような黒い怪物たちが、その爛と光る狂気の目を県軍人に向けて立っていた。

怪物たちの禍々しい姿を見て、それらがどこかの三流軍隊に調教された攻性生物や、瀬戸内海から上陸してきた肉食動物でないことが直ちに分かる。もっとすごい奴らだ。

もしや、朝鮮半島で数える気にならないほど人を殺したはずの自分を、裁くためにこの世の果てから送り込まれてきた、悪鬼か？

想像を超える状況と、敵手たちの存在にイルヒラムは一瞬ひるんだ。

だが、一瞬だけだ。

イルヒラムは、そういう悪鬼のような存在を認めていなかった。

こいつらは敵だ。何をためらうことがある。イルヒラムは異様な敵を前に背筋を伸ばした。

先頭の化け物が、自分たちを恐れない県軍人を睨みつけると、あの、奇妙な叫びをあげた。

同時にイルヒラムもうおおおと叫び、突進しながら引き金を引く。あまりに素早く引いたために、銃声は一つの連続したものに聞こえるほどだ。

ダムダム弾が何発も体の中で破裂し、化け物は地面に押し倒された。

直後に、肉薄したイルヒラムの足がうなりをあげて敵の頭部を叩き潰す。黒い顔がつぶれて、灰色の脳か何かが飛び散った。

イルヒラムは足下の生物が死ぬのを感じながら、顔を上げる。

余勢の化け物が様々な角度から飛びかかって来るところだった。どいつもこいつも奇怪な外見だが、色は総じて黒い。彼らの体のパーツは、イルヒラムの知る限り、地球上に存在するいかなる生き物の特性も受け継いでいないように見えた。

一体こいつらは何なのか。

ロールシャッハのシミから生まれた悪い妄想、とでも言うべき化け物が視界を埋めようとするなか、流れる時間はゆっくりしたものになり、イルヒラムの頭脳は勝手に働いた。

出し抜けに、化け物たちは空中で不思議な踊りを踊るかのように

回転し、それだけでは飽き足らず、体液までまき散らしだした。
イルヒラムは振り返り、燃えるジャイロコプターの下にクロノトンを見た。拠点防御／分隊支援用機関銃がその手のなかで吠えていて、錆色の銃炎が、東欧の老婆の邪眼のように辺りをゆっくりと睥睨していた。
竹箒で砂をはらうかのように、化け物たちはなぎはらわれた。
最後に、とびきり大きくて、強力で、非常識な物が飛んできて、マンモスの牙そこのけの貫通力で化け物を地面に串刺しにした。騒々しいウォンニの電動のこぎりだ。
「一人で突っ込むだなんて迂闊だぞ、イルヒラム！　うははは」
「平和な県に長く居すぎたようでな」
ウォンニが電動のこぎりを引き抜き、化け物の体を九つに分解した。クロノトンもその貪欲な得物に新たな弾薬を餌付けしている。彼は古代エジプトの王のように金色を自分に巻いているが、それは金細工の装飾品ではなく、弾帯だ。何かの拍子で弾丸が暴発しても自信を傷つけないように、弾帯の弾丸は外側を向いていた。
「なんとも形容しがたい見た目だな。一体この連中は何だ？　みかん農場の農薬が突然変異を誘発して、こんな化け物を作り上げたのかな？」
クロノトンが化け物の死骸を蹴って、推測を口にした。
「それよか、こりゃ思ったよりも過酷な状況だぜ」
「ジャイロコプターからもっと物資を回収できるかもしれん」
イルヒラムが言う。
「いや、それは無理なようだ」
クロノトンが銃身でジャイロコプターの墜落現場を指した。見ると、腹立たしいことに、燃えるジャイロコプターは人間が全員降りたことによって、元気を取り戻したようだった。それは赤い空へ向けて猛スピードで飛び立っていくところだった。
「……これだから機械は嫌いなんだ」
イルヒラムは吐き捨てるように言った。

「一応、全員武器は持っているし、通信機もある。任務遂行に障害はないだろ。なあ、イルヒラム、次のジャイロコプターには高性能レコード・プレイヤーを追加するようにジョビ大佐に頼んでおいてくれよ。できればスウェーデン製」
「考えておこう」
「お……まずいよ、イルヒラム。敵襲だ」
クロノトンが言って、伏射体勢に入った。
赤い空の向こうから、雲霞のような濃密な化け物の群れが襲いかかって来る。鐘を叩くような独特な銃声が響いて、クロノトンが次々と撃ち落としはじめた。
だが、敵の数は信じがたいほど多い。
「ウォンニ！　アカデミーに入れ！」
イルヒラムは叫び、自身はアカデミー玄関の横手の石柱を目指した。
そこにたどり着くやいなや、クロノトンに援護する、との手信号を送る。クロノトンも直ちに了解して、機関銃と弾帯を抱えて走ってきた。
すぐさま、その背中へと殺到して来る翼を生やした化け物たちだが、そんな芸のない直線的な動きは、イルヒラムにとって楽な的だった。両腕が伸び、発砲の反動に備えた柱と化す。引き金を引くと、何匹かの化け物は花火のように空中で弾けとんだ。
長銃と比べ、手銃には弾数に不安があるが、イルヒラムの手銃の弾倉は弾が二列に込められたダブルアカラム。そのための銃把の握りにくさも、イルヒラムの握力で補われていた。
背後から追われるという状況が、クロノトンに普段以上の走力を与え、彼はアカデミーに入った。イルヒラムも殿を務めながら、遅れて入る。
「クリアだ！」
ウォンニがすでにアカデミーエントランスの敵を葬っていた。
イルヒラムは門の横の制御盤を殴りつけると、分厚い石の扉がぴ

しゃりと門を塞いだ。
瞬時にイルヒラムは状況を学習する。太い柱が規則的に並ぶ玄関はめちゃめちゃに荒れていた。床に転がるのは損壊の度合いが様々な人間の死体と、人間の抵抗で殺されたのだろう少数の化け物の死体だ。おぼろげながらも、どこかで全く同じような場面に度々出くわしたことがあるのを思い出す。
半島戦争だろう。他にあるはずがない。
そうだ、間違いない。半島戦争とそっくりだった。気軽にレコードを再生したように、あの状景がここに戻ってきたのだ。
「くそっ、生存者は誰もいないのか！？」
イルヒラムは吠えた。
天井付近の窓がぶち割れ、化け物どもが飛び込んで来る。
「防御円陣だ！」
三人の県軍人は部屋の真ん中に集まった。クロノトンが柱の間を飛び交う敵を狙うために火を吹く銃口をめぐらした。本来は三人一組で使用する機関銃だが、和歌山県軍にその余裕はなかった。にもかかわらず、クロノトンの銃撃は精緻を極める。この男はこの黒くて長い重さ7．8キロの拠点防御／分隊支援火器を母の胎内から持ってきたかのように操ることができる才があった。柱や壁の破片が弾け飛び、広大な部屋の視界が急速に悪くなっていく。
イルヒラムにも、粉塵を切り裂いて化け物たちが躍りかかってきた。イルヒラムは容赦なく鉛玉を撃ち込んでいく。
唐突にスライドが後退して戻らなくなった。残弾数を数えてはいなかったが、手銃の弾がつきたのだ。
直後に化け物がわめきながら迫って来る。不気味な冷たい音をたてて振られるかぎ爪を、体をのけぞらせてかわす。両方の手の親指は手銃の銃把の上にあるマガジンキャッチを押して、手銃は空になった弾倉を排泄した。
続く化け物のかぎ爪の斬撃をかわせないと判断するや、イルヒラムは化け物の腕を自分の腕で防いだ。県軍人は骨がきしむほどの衝

撃に、一方の手銃を取り落とす。だが、化け物のかぎ爪はイルヒラムの顔の上数センチで止まっている。
県軍人の口から裂帛の怒声がほとばしり、それに押されるかのように化け物がのけぞる。さらに、イルヒラムはしびれた腕には一切構わず、膝蹴りを化け物にめり込まして、敵を一歩後退させた。
空いた手で、手首に巻いたベルトから新たな弾倉を抜き取り、銃把に差し込む。初弾が装填され、スライドが前進して、手銃があるべき状態に戻った。
体勢を立て直した敵がすでに眼前に迫ってきていた。
イルヒラムは銃口を敵の顔に押し付け、自身は後方へ倒れ込みながら、何度も引き金を引く。
くぐもった銃声と腕への反動の後、イルヒラムの上で敵の頭が黒く爆発した。
「クリアだ」
ウォンニがそう言い、イルヒラムはすでに部屋の中の全ての敵が片付けられているのに気付いた。
うなりながら自分の体の上の、化け物の死骸を蹴り飛ばす。
「連中、なかなか、やるね」
「ああ。歯ごたえがある」
部屋に転がって死んでいる化け物たちの見た目は多種多様で、同じ姿は二匹と見えなかった。だが、その大きさは、人間より小さなものはいない。
三人の県軍人は用心を怠らず、足早に進んでいった。
新たな部屋に入るときの先頭は、うなるのこぎり構えたウォンニで、必ずクロノトンが援護していた。
だが、敵の姿はない。来る部屋来る部屋が、どれも満員の電車に破片手榴弾を投げ込んだような惨状なのに、化け物の新手が見えない。
どこにいやがる？
三人は広い階段を上り、半壊した石像の並ぶ回廊を進む。行く手

の壁の、巨大な大理石のレリーフに刻まれた人々が陰気な目つきでこちらを見下ろしてきた。
だしぬけに、巨大な太鼓を連打する音が轟わたる。
レリーフが爆砕して、何万という大理石の破片が床と壁を乱打した。
「来たぞ」
もうもうたる白煙の向こう、悪党のゴリラのようにたくましい黒い化け物がやってくる。
そのとき、距離感を正しくつかんで、イルヒラムはぎょっとした。
「冗談だろ？」
イルヒラムはつぶやく。化け物の身長は六メートルほどもある。歩くと地面が震えるほどの巨体だ。
化け物がどすどすと近づいてくるにつれ、三人は敵を見上げるためにのけぞらなければならなくなる。
直後、我に返り、クロノトンが機関銃を一連射した。
ばばっと、化け物の表皮が飛び散るが、それだけだ。銃弾はそこで止められ、化け物に十分なダメージを与えていない。
化け物どもは総じて人間より頑丈だろうと踏んで、イルヒラムは多めに銃弾をぶち込むことにしていたが、この敵の頑丈さは常識はずれだ。
「まるで戦車だな。何食ってそこまででかくなったんだ？」
「手榴弾を持ってこなかったのが悔やまれるね」
「いいや、必要なのは対戦車砲だろう！」
銃弾をものともしない敵が肉薄してくる。後ずさるイルヒラムとクロノトンに対して、奇声を発しながら敵にぶつかっていったのはウォンニだ。
黒い血が辺り構わず飛び散り、片足を失った巨大な化け物がバランスを崩して倒していく。
「ここは俺に任せろ」
ウォンニが生き生きとした様子でそう言って、にやりと笑うと、

通信機をイルヒラムに投げてよこした。
「敵地で分散行動か。素晴らしい」
「あんたらの銃に出番はないんだ。ここいら一帯は掃討しておくぜ。今日の主役は俺だ。ひひひ」
「分かった。クロノトン、来い」
イルヒラムとクロノトンが踵をかえした。
ウォンニは怪力を発揮して、電動のこぎりを放り上げる。それは高い天井すれすれのところで上昇をやめると、今度は回転しながら落下していった。
うなりながら化け物が上体を起こす。そこへ電動のこぎりが落ちてきて化け物の頭に突き刺さり、暴れ回る。
ウォンニは飛んでくる肉片から顔をかばいながら進んで、得物を引き抜いた。
駆逐戦車や、この化け物のような薄のろ相手に有効な手だ。
レリーフにあいた穴からは、さらに似たような敵がぞろぞろと湧き出てくるところだ。ウォンニは笑いの発作を抑えきれずに、武器を構える。
面白くなってきた。

## 10　ラミタイ

■

むしろ、ラミタイが受けた衝撃は、化け物を見たときよりも大きかったかもしれない。
ファレリアの姿はひどく小さく見えた。
彼女がこんなに弱々しく見えるわけがあるのだろうか？
ラミタイは惚けたような表情で、ファレリアの前まで歩いていった。
そして、体の中から響いてくる共振が、彼女の正体を醜い化け物だと告げてくる。その声から耳を塞ぐ方法はなかった。
「ファレリア……」
自分は彼女に何を期待していた？
遺伝子強化の影響さえ、腕の一振りでぬぐい去る超人か？
壁に寄りかかったファレリアは、目の焦点を合わせるのに苦労しているようだったが、やがて口を開いた。
「……ラミ、私の言葉を聞いていたの？」
彼女の顔は血の気がなくて、人間のものとは思えない。
「あなたはここに来るべきじゃなかった。私に殺される前に早く逃げることよ……」
「今となってはそんな事になんの意味がある？　おれに心の平安とか、そういったものを自力で見つけ出す力はないんだ」
ファレリアはラミタイの視線から逃れるように、その場にしゃがみこんだ。
「……大丈夫なのか？　変異まであとどれぐらいだ？」
「すぐよ。運動系から食われたわ。もう少しもつと思ってたんだけど……私は弱いわ」
「おまえが弱いのなら、おれは一体なんなんだ」

ラミタイは両手でファレリアの肩に触れたが、それだけで彼女は堪えがたい痛みに襲われたようだった。
ラミタイはあわてて手を離すと、彼女から後退した。
「やるべきことは何かあるのか？　おれにできることを言ってくれ」
「それ」
ファレリアが机の上に積まれた、堕落したもやしのように絡み合うすごい数の磁気テープと、書類の山を指差した。
「全て燃やして。そこに書かれているのは、遺伝子強化人間の作り方だから」
「そんなものが……」
「フジーム教授は自分の研究を捨てることが、ついにできなかったの。……これは……彼ら人類を救う唯一の手かもしれないって……あのしょうもない種族を……」
ラミタイは一束の磁気テープを握った。
自分たち、遺伝子強化人間の作り方が目の前にあった。
この黒くて柔らかいものに、もう一度この和歌山県で起こったことを起こす力があるのだ。
ラミタイの手に力が籠り、手の中の磁気テープはあっさりぐしゃぐしゃと潰れた。これを葬る。遺伝子強化人間をこれ以上生み出さないために。
まったく、この県ではこんなことまでも、自分でやらなければならないのか？
「今の県を見る限り、フジーム教授の考えは正しくなさそうだな」
ラミタイはささやくように言った。
自分たちは死ぬだろうが、このようなことはもう起きてはならなかった。
「使い方次第なのかも……全ての道具や知識と同じように、遺伝子強化技術さえも」
ファレリアが言うのが聞こえた。
「でも、まだ彼らがこれを手にするには早すぎたのよ」

「政府軍がここを爆撃するんだ。どのみちみんな燃えるぞ」
「急いで、ラミ。もし政府軍が、私の恐れているほど素早いのなら……」
ファレリアは苦しそうに言葉を切った。
ラミタイは火をつける道具を探し、数々の戸棚を物色する。
「これを燃やした後はどうするんだ、ファレリア？　自分を消すっていうのは、どうやるつもりなんだ？」
「私はもう歩けないみたい」
「おれが連れてってやるよ。どこでも望むところへ」
「ラミ……あなた馬鹿よ。最後の時間を自分のために使えばいいのに……」
「そうかもな」
机の上には教授のノート。いや、手紙だ。
死の直前に書かれていた物だろう、血しぶきの散った紙面のインクは乾いていない。
出し抜けに、ぞおっと鳥肌が立った。
顔を上げると、奥から黒い姿がぬうっと現れるところだった。
黒い眼窩の中で、炎の双眸がくすぶっている。
化け物がかっと口を開いた。直径五十センチの口と、赤い血にまみれた無数の牙が近づいてくる。
妙に時間がゆっくりで、辺りは静かだった。化け物がずるずると足を引きずる音だけが、着実に近づいてくる。
こいつだ。
こいつが、フジーム教授殺害者だろう、と妙な確信をもって断言できる。
直後、凄まじい爆音が、あろうことか耳のすぐ隣で弾けた。
ラミタイの耳がしびれ、頭は殴られたかのような痛みが駆け抜け、そして変異した死すべき子供は床を転がった。黒い血で床に奇怪な模様が描かれる。
自分の中で得体の知れないものがざわめくのを感じた。

煙を上げる銃口が顔の隣にあった。
「生存者だ」
禿頭の巨漢がそう言って、歯をむき出して悪鬼のように笑った。

## 11　ハチノヘとクジ

ネクサスは闘争の中で、その力、全てを発揮する段階へと至った。
収納されていた全ての火器を出して、巨大な空飛ぶハリネズミのような外見になると、ネクサスは和歌山県という檻を突き破って外に飛び出ようとする化け物たちに斉射を始めた。
強力な砲炎にあぶれられ、引き裂かれ、空飛ぶ化け物どもは次々と地上へ落ちていく。
和歌山県県境のダムのように高く分厚い壁の上にも政府軍のコマンドがずらりと並んでいた。周囲の県の県軍も、政府と和歌山県の要請に応えて出兵はしていたものの、彼らは太鼓持ちに過ぎなかった。兵力、練度、装備で政府軍には遠く及ばない。
頭上の戦闘でネクサスに粉砕された化け物の死骸が降り注ぐ音のみが聞こえる、不気味な沈黙の中、政府軍兵士は微動だにしない。
黒い津波がこちらへと押し寄せてくる。大地を埋め尽くす化け物の大軍が迫ってきた。
二本足、四本足、あるいは節のある百本もの脚をもつ黒い生き物の侵攻だ。その数は千を軽くこえた。
さすがに政府軍の兵士たちが凍り付いたような表情を浮かべる。
そんな中、政府軍のジャイロコプターが壁の上をかすめるように飛び、そして腰まである白髪をなびかせた一人の男が壁の上に降り立った。
複雑な装飾を施されたサーベル片手のハチノヘだ。すらりと鞘から刃を抜き、鏡のような刀身が迫り来る黒い波を写しだした。
「権限レッド、完全発効だ！　政府軍の指揮は我々ＰＣＯがとらせてもらうとしよう」
ハチノヘが言うと、数千人の政府軍兵士は落ち着きを取り戻して、一斉にうなずいた。まるで全員が一人の人間のように見える動きだ。この軍団は政府の作った完璧な作品だった。

完全に調和した動きで、壁の上で無数の印象的な銃器が、構えられる。
「一匹たりとも通すな！　通せば、奴らは我らが築いてきたもの全てを破壊し、我らの愛する者全てを殺すぞ！」
ハチノへは怒鳴り、短い命令だったが、政府軍兵士にはそれで十分通じた。
黒い波が射程に入ると、銃弾は嵐となって化け物を襲った。穴だらけになって、黒い体液を沸騰させた化け物がばたばたと崩れ落ちる。だが、倒れなかった化け物は壁をよじ登ってくる。そして、その電柱のような太い腕でそこにいた一団の政府軍兵士を掴んで振り回し、引きちぎった。すぐに四方からの近接射撃で、その化け物は破裂しながら落ちていく。そこら中で、それが繰り返された。
化け物は巣穴から湧き出る蟻のようにも見え、全てが、ただ壁を越えたくて仕方がないというように迫ってくる。
政府軍はどうにか食い止めようと奮闘している。
門が開き、政府軍U－2Rゾーレ重戦車の群れがディーゼルの爆音をまとって化け物の群れへと突進する。自分たちを鼓舞するかのようにやたらと砲をぶっ放し、噴式弾をランチャーから発射した。そもそも狙いを付ける必要がないほど化け物は多い。重戦車はとんでもない騒音を発しながら走り回り、ありとあらゆる騒ぎを引き起こしながら戦う。だが、それでも、すぐに化け物たちの黒い波に飲み込まれ、見えなくなってしまう。
脳をひっくり返されそうな、すごい砲声が響いた。
ネクサスの主砲が頭上で吠えたのだ。大地に途轍もない火柱が生まれて、県境は火口のようになる。相当数の化け物が消し炭になり、そして政府軍兵士も百人単位で、爆風にあおられ壁の上から吹き飛ばされてどこかへ消えた。
ハチノへも地面に叩き付けられ、再びどうにか起き上がるのにしばらくの時間を要した。
周囲はとんでもない混乱に包まれはじめていた。

予想以上の敵だ。
半島戦争で、世界中に恐怖を振りまいた日本軍の、最も練度の高い政府軍の猛烈な迎撃に、奴らはまるでひるまない。
ハチノヘは舌打ちした。
ネクサスに戻ることにしよう。
ここはあまりに混沌とした戦場だった。こうなってしまうと、ハチノヘのサーベルの腕をもってしても改善しようがない。それよりも早く4フレーズを投入してけりをつけてしまうしかない。
だが、上を見上げてネクサスもただならぬ危機に直面しようとしていることに気付いた。
空飛ぶ化け物は戦意高く、急降下爆撃ジャイロコプターもかくやという速度でネクサスの弾幕をかわし、ネクサスに飛びついていくのだ。
砲と砲座の兵士が引き裂かれて地上に落ちてくるのが見えた。さらに化け物はネクサス表面のガイドセンサーやアンテナをひっこぬいているようだ。大昔に技術の粋を集めて建造され、幾多の戦を生き抜いたネクサスの装甲が、黒くて醜い生き物に侵されていく。その様は皮膚の壊疽を思わせた。
ネクサスの分厚い装甲に穴があけられ、その下からぶばあっと循環液が噴き出し、地上に雨を降らせた。
「信じがたい……」
ハチノヘはつぶやいた。
大戦でも半島戦争でも傷つくことを知らなかったネクサスが、今では瀕死の病人に見えた。
背後から硝煙をかき破るようにして大柄な化け物が出現した。空の状況に目を見張る白髪の剣士に背後から襲いかかる。その牙とかぎ爪が体に突き込まれる刹那になって、ようやくハチノヘは気を取り直し、サーベルを顔の前に持ち上げると、その金の鍔に下唇を当てた。
化け物はハチノヘに気付かなかったようにそのまま走っていく。

二十メートルも走ったころであろうか、首がごろりと落ちて、化け物の体は驚きを表現した。ようやく斬られたことに気付いたらしい。
ハチノヘはその様子を見もしないで、転がる敵味方双方の死骸を踏み越え、壁のすぐ下に設けられた政府軍のジャイロコプター駐機場へと歩いていく。ハチノヘはサーベルを一回転させて腰に戻した。

「なんて奴らだ。政府軍の精兵が押されている。突破されるのは時間の問題だ」
ネクサスに上がったハチノヘがうなりながらクジの部屋に入る。ネクサスの艦内はヒステリックな赤い照明で照らされていた。
ハチノヘが指揮室に入っていっても、クジは顔を上げる余裕が無いかのように画面に専念し、手はキーボードを叩き続けている。
「４フレーズを投入せねばならんぞ」
崩して着ていたＰＣＯの制服がずたずたになったハチノヘは、４フレーズという名を、すがるべきもののように発音し、倒れるように座り込んだ。
クジは何も答えなかった。
「ＰＣＯの命令でいろいろ胸くそ悪いものを見てきたが、こいつは特にひどい。死がこの県を覆ったのだ。もうどうにもならん」
クジはディスプレイを、宿敵であるかのように睨んでいた。
「だが、おまえはこんな事態にも備えていた。そうだな、クジ？」
「私はそういう生き物なのよ、ハチノヘ」
「炎で滅菌するほか、もう手はない。４フレーズを持ってきたおまえの先見に感謝だ」
ハチノヘの言葉に対して、クジは傷ついたような表情を浮かべた。
「大阪には、総統権限で全市民をシェルターに避難させるように命令しておいたけどーー」
「そんなのは、何の足しにもならん。あの化け物どもは焼き滅ぼすしかないのだ。たとえ、和歌山県民全てを巻き添えにしても、な」

「分かってる。でも、なによりも、ネクサスの損失は防がねばならないわ。ネクサスを失えば、化け物は関東や北海道にまで広がってあらゆる破壊をふりまいて……いや、たぶんもっとひどいことになるわね。４フレーズの影響で」
クジが暗い声で言った。
「いやあ、恐ろしい戦ですね」
ジョビ大佐が不自然に緊張感の欠けた声を発しながら、指揮室に入ってきた。
ハチノヘが彼を見て、なぜこの男がここにいるのだ、という顔をクジに向ける。それに対して、クジは悲しげに肩をすくめただけだった。
「政府軍は爆撃をおやりになるそうですね」
「早耳だな」
「国営ニュースの発表を聞いたのですよ。それで、それは生物化学兵器のようなものなのですか？　いや、そんな物を投入すれば近畿地方全てが汚染されてしまう。それはありえない。そうでしょう？」
「ええーー」
クジがかすれた声を出した。
「話してしまってよいのか？　面倒なことになりうるぞ」
ハチノヘがサーベルの柄頭を撫でながらゆっくり言った。
「彼は和歌山県軍のリーダー……当事者よ。作戦のことを聞く権利はあると思うわ」
クジはジョビ大佐の方を見ずに言った。
そして、もしかしたら生き残る唯一の和歌山県人なのかもしれないのだから。クジは心の中で付け加える。

## １２　歴史の隙間

１９４５年、唯物主義論決定連合とアジア高等精神議会、二つの哲学体系の衝突、第二次世界大戦は、前者の勝利で幕を閉じた。

連合を構成していた国家により、アジアの諸国は制圧された。

日本を占領する仕事は、アメリカという国から派生した新国家リビルダーに任された。だが、やがて、その仕事はアメリカ人が予測していたほど楽な物ではなさそうだということに、リビルダー人は気付いた。

日本軍は能率の良い戦力配置というものを知らず、太平洋各地や、バングラデッシュで連合軍に各個撃破されたと思われていた。だが、終戦の後にどういったわけか無傷の部隊が続々と帰国してきたのだ。その軍勢は盟主のアジア高等精神議会指揮機関でさえ把握していない、日本が独自に配置した兵力だった。日本軍最高指導者はアジア高等精神議会に対して謀反でもたくらんでいたのかもしれない、と思わせるほどの不自然な大軍だった。その軍勢の指揮官たちに問いただしてみても、誰の司令でそのような場所に配置されたのか、詳しくは知らない、と困惑顔をしてみせるばかりなのだ。

この妙な展開に、リビルダーの戦後執行官たちは顔をしかめた。そして、帰国してくる兵員輸送船に加えて、困惑顔のクルーを満載した無傷のネクサスまでがぞくぞくと赤道地帯から帰ってくるのを見て、彼らは青ざめはじめた。

日本軍は十分すぎるほどの戦力を残しながら、降伏していた。日本本土は焦土になったのに、それを守るべき軍はなぜかほとんど傷を負っていなかった。

不可解極めた。

リビルダーが彼らを下手に扱った場合、彼らは連合にいま一度反旗をひるがえすことができるのだ。そうなれば、それは連合の勝利に水をさすだけにとどまらず、連合が戦勝で得た利益を台無しにし

かねない。

リビルダーはどうやったらこの国を上手く占領したままにしておけるのか、頭をひねらなければならなかった。それでも、上手い方法は見当たらず、リビルダーは日本の歴史からその方法を拝借することにした。幸い、日本の歴史は実例に事欠かなかった。

リビルダーは日本の各地に基地を築くと、そこに致命的な毒を秘めた、伝播力の高い改造されたマイコトキシンのタンクを大量に備蓄した。日本が連合、あるいはリビルダーの気に食わないことをしようとすれば、直ちにこれらの毒は解き放たれ、死の天蓋が列島を覆うのだ。これは安土桃山時代に日本の統治者によってよく使われた手法だった。

なにかあればリビルダーは列島で暮らす一億近い人間を一日で殺すことができるし、そのあと他の属領の民を日本に強制移民させて、今まで通りの生産を続けさせることすら可能だ。

１９６３年のいまなお、リビルダー基地は全て稼働している。

## 13　ハチノヘとクジ

「4フレーズ・スーパー・ウエポンは純粋にこのリビルダーの基地を破壊する為だけに、我々ＰＣＯがサルベージした兵器です。その熱は一瞬であらゆる物を蒸発させ、なんら有害な汚れを残さない。リビルダーは反応する暇もないでしょう。生物化学兵器より遥かに洗練された手であると、我々ＰＣＯは誇りを持って確信しています」

ジョビ大佐はそれを聞いて、おおっと感嘆のうなりを上げ、上半身をのけぞらせた。

「夢のような爆弾ですね！」

「いま、政府軍の特務爆撃機が搭載して高空で待機しています。ネクサスの布陣が完了すればすぐにでも投下するつもり。……我々のこの努力が日本のいまの、他国に占領されているという現状を改善し、そして程度の低い二流の国という地位から引き上げてくれることを信じています」

「だとしてもーー」

ジョビ大佐はニコニコしながら言う。

「所詮は爆弾。人間味のない一瞬の閃光で和歌山県は焦土と化してしまうのでしょうね」

「残念ながらな。他に手はあるまい。この県のみかん産業も終わりだ」

クジのかわりにハチノヘが言った。

「そうですね。実に残念なことです」

ジョビ大佐は笑って言う。その笑みは実に自然な物に見えた。

自分の生国が焼き払われようというのに、どうしてこの男はなぜ笑っていられるのか。クジは分析しようとする。ＰＣＯの技術の過小評価？　それとも和歌山県の利益よりも日本全体の利益を優先しようという、崇高な精神？

すると、ジョビ大佐は、クジの心の中の疑問に自ら答えようとで

もいうのか、
「ま、私はみかんよりリンゴが好きですし」
彼はそう言い、なにか赤くて丸い物を懐から出して、自分の口に詰め込んだ。

## 14　ラミタイ

一体いつ部屋に入ってきたのだろう、二人の男が研究室の中にいた。大きな男たちだった。

遺伝子強化の化け物を撃ち殺した男が、手に持ったピストルの握りの部分から、弾を収めておく入れ物を排出した。それが床のタイルにぶつかり、ごつっと重たい音をたてた。

「生存者だ」

ピストルを持った禿頭の巨漢が言った。やたらとごつごつした体の持ち主で、服装はずたずたぼろぼろ。黒い返り血に染まっていた。

「ああ、生存者だ。救われたね」

ひげ面の男は静かな口調だった。彼は兵士ではないだろうとラミタイは思った。技術者か研究者風の雰囲気をまとっている。いや、でも持っているのはマシンガンか。

ラミタイは気付いた。彼らは和歌山県軍人だ。

いまさら和歌山市の救援に駆けつけたのだろうか。だとしたら少し遅すぎたようだ。殺戮の機械たちは、すでに迅速な仕事を終えた後だ。

ファレリアが息を飲んだ表情のまま固まっているのに気付いた。

「私は和歌山県軍曹長イルヒラムだ」

「僕は同軍伍長クロノトン。生き残りがいて本当にうれしいよ」

ラミタイとファレリアの名をきいたあと、二人はそう名乗った。イルヒラムの方が、なにか電話帳ほどの大きさの金属の機械を置く。受話器が付いている。軍用無線通信機だ。

「なんともひどいことになっているからな。和歌山市を奇襲してこんな風に陵辱する奴らがいるとは、信じがたい。平和な県だというのに」

「そうだね。軍事的に価値もないのに」

「一体どこの国に作られたのであれ、あれを送ってきた奴らには報

いを受けさせてやるぞ」
二人の軍人が言うのを聞いて、ラミタイははっとした。
「そいつらに脛骨を突き刺し、壷に放り込んでやる！」
「あ……本当に軍人ってそれ使うんだ」
ラミタイが思わずつぶやくと、なぜか軍人イルヒラムはばつの悪そうな顔をした。
「いや、この言い回しは、その、つまり、伝統的な、あ～」
「現状況が分からないのは困ったね」
県軍人クロノトンの方が通信機のつまみを回したが、ざらざらと雑音が流れるばかりだ。
ラミタイは察した。
この二人、遺伝子強化人間が災厄を招いたことに気付いていない。化け物が、無関係の場所からやってきたものと信じている。
「あの……国営ニュースとか見ませんでした？」
尋ねてみた。
「任務中にそう言ったものを見る許可は出ていない」
と、イルヒラムが答える。
なんて連中だ、という印象を隠せずに、
「政府軍は和歌山を爆撃するらしいんです。遺伝……いや、あの化け物を滅ぼすために、住人を巻き込んで。そして、そのことを他の日本国民や異国から隠しています」
「爆撃だ？　馬鹿な！」
イルヒラムが吠えた。
「そんなことをすれば、内戦になる！」
「それよりひどいことに、もうなってるよ、イルヒラム。でも、戦時中ならともかく、今の政府がそんな強引なことをするだなんて……」
クロノトンは眉間にしわを寄せる。イルヒラムはぐぬぬぬ、とうなり、
「いいや、あり得ないことではないな。クロノトン、大戦前夜に似

たような話がなかったか？」
「フェアニヒトウングかい？　でも今とは違う政府の仕業だよ」
「今の日本の政府は、当時の連中からものを学んだのかもしれないのだぞ」
「ふうむ……。それなら僕たちも急いだ方がよさそうだね」
クロノトンの穏やかな眼がラミタイを見据えた。
「フジーム博士はどこだい？」
ラミタイは眼を伏せ、首を振った。
「遺体はあそこに」
二人はひょいっとそれを覗き、口をへの字に曲げた。
「くそっ、作戦失敗だ。ジョビ大佐に連絡を試みなければ」
イルヒラムは受話器を取り、複雑な認識コードらしきものを打ち込む。
「もしもしもしもし！　ジョビ大佐ジョビ大佐ジョビ大佐！　イルヒラムです！　作戦失敗です！　応答してください！」
とたんに靄のような雑音がクリアになり、低くて平らな男の声が返ってきた。
『騒がしいね。聞こえてるよ』
「和歌山市内はひどい状況です！　死体の海！　崩壊する建物！　化け物ーー」
通信機の声がイルヒラムの大音声をさえぎり、
『フジーム博士は研究室で死んでいるのだね？』
「そうです」
『なにかメモとか、磁気テープとか残ってないかね？』
「ありますあります。山ほど」
『その通信機で送ってくれ。全て』
がんっと、ラミタイは頭を殴られた気がした。
『それが遺伝子強化プロジェクトの実行者たちを裁く際に、証拠として重宝することになりそうだからね。なにせ我々の県はそれにひどい被害を被ったんだ。さあ、イルヒラム曹長、全てをこっちに送

ってくれたまえ』
「了解です。それと私たちはジャイロコプターを失いました。迎えをーー」
途端に、激しい雑音が戻ってきた。
『おおお、政府軍ネクサスは主砲斉射をおやりに……通信が不鮮明……に……のようだ。またあとで連絡してくれ』
「ジョビ大佐？　ちっ、切れちまいやがった」
イルヒラムは、がちゃんと受話器を置いた。
「よし、仕事にかかろう」
二人の県軍人ががさがさとテープあさり始めた。
「だめだ……」
嫌悪感におののいていたラミタイが、かすれた声を絞り出した。
「だめだ！　やめてください！」
「何だって？」
「遺伝子強化人間の技術はここで葬らないと……外に出してはだめなんです！　また悪用されます」
二人の県軍人は視線を交わした後、クロノトンが口を開いた。
「それはないと思うな、ラミタイ。知っての通り、死すべき子供の一件は和歌山県に計り知れない悲しみをもたらしたんだ。その悲しみの大きさは、悪用という事象に到達し得ないほどのものさ。でも、こんなことを二度と起こさないためにも、しっかり責任は追求しなきゃいけないしーー」
だめだ、この二人は遺伝子強化人間の真の実力に気付いていない。
だが、銃を持った二人の軍人を思いとどまらせる方法なんてあるのか。銃を持っているのがラミタイの側だとしても、できそうにない話だった。
いっそのこと、化け物の正体を教えてやろうか。
だが、それをすれば、一つ確実なことは、目の前の二人は自分たちを喜んで殺す気になることだ。
「クロノトン」

イルヒラムが無造作に言葉をふるった。
「化け物の正体は、こいつらだ」
ラミタイの心臓がはねた。
思考を読まれたのだろうか。
だが、県軍人が見ているのは自分ではなかった。
「ファレリア……」
ファレリアが目から黒い涙を流していた。集まる視線に気付いてか、彼女はうつむいたまま、手で顔を拭った。彼女の手の甲で拭われたものはゆっくりと波打っていた。
「君たちが……どうしてだ？」
クロノトンが言った。
「どうしてこんなことを？　この県を？」
ラミタイは唇を噛んで、床を睨んだ。
「……おれたちは体の中に、異生物を埋め込まれている。レトロウイルスのようなものが。それが遺伝子面からの影響力でおれたちを変異させるんだ」
「その結果は、死すべき子供が早死にするだけじゃなかったのか？」
「県はそう言ってたけど……嘘だ。あるいは知らなかったのか。それだけじゃない。変異した後は、体が崩壊するまで遺伝子内の異生物が体を掌握して、暴走するようだ。一体なぜ、こんな風に暴れるのかは分からない……」
「信じられない……この県のすべてを滅ぼすつもりか、悪魔どもめ」
クロノトンが静かに声を荒げた。
震えが消えた。ラミタイはそらしていた視線を二人の県軍人に向ける。
「おれたちはあなたたちが作ったんだぞ。あなたたちが作った政府が」
一歩前に踏み出した。
「おれたちはあなたたちが、自分の利益を守る戦争のために作られたんだぞ。そして、おれたちを作ったときも、政府からそのことを

知らされたときも、あなたたちは政府に逆らわず、それを受け入れたんだ！」
視界を黒い靄のようなものが覆った。
クロノトンが機関銃の横についたレバーに手を置く。県軍だなんていう人々が、威圧してくるのは何だか滑稽だった。
「遺伝子強化人間は、あなたたちの罪を背負っているんだ！　その存在を否定するつもりなのか？」
視界が黒く、鋭くなっていく。
と、強い力で手を引っ張られた。ファレリアが両手でラミタイの腕をつかんでいた。なぜ彼女は邪魔をー
「だめ、それ以上は進まないで、ラミ」
蚊の鳴くような声だったが、そこにじむ悲壮な声音がなによりもラミタイをぞっとさせた。ファレリアほどの人が出すものには思えなかった。
ファレリアの手を振りほどくこともできなかった。唐突に、立っているのが難しいほどの震えが駆け、ラミタイは床に膝をついた。
もう県軍人の顔に視線を戻す勇気は残っていなかった。
「おまえたち、大戦前後の混乱を想像することはできるか？　飢餓と、困苦と、破壊を？　数千万の死を？　終わりなき闘争を？　……ここは列強に挟まれた小さな島国なのだ。負債は、だれもが、何らかの形で支払った」
イルヒラムが低い声で言うのが聞こえた。
「半島戦争で同じことを繰り返すわけにはいかなかった。おまえたちは……希望として作られたのだろうよ」
県軍人は紙と磁気テープの山の方を向いた。
「私は下っ端の軍人に過ぎん。命令には逆らえんのだ。こいつは上官のもと送らせてもらう。すまんな」
モーターの軽い音をたてて、磁気テープは吸い込まれていった。それは電子の列に変換され、ジャミングされた混乱の海の中、確保された通路を通っていく。全てを食らい尽くす意図を見せつつ、通

信機は遺伝子強化人間の起源の情報をむさぼる。止める手だてなんてなかった。
全ての行為は無意味だった。
何をするにしても、ラミタイは疲れ果てていた。
どかん！
突如、通信機は己の存在を一瞬誇示するかのように吹き飛び、部屋中に煙を上げる金属片をまき散らした。
「……？」
イルヒラムはしばし目をぱちくりさせていた。それから、砲丸のような拳で机を思い切り叩いた。
「くそ、ウォンニめ！　一体、こいつをどう改造した！？」
通信機のあった場所には黒いくぼみが残るだけで、もじゃもじゃとしたすごい数の磁気テープも吹き飛んで、部屋中に紙吹雪のようになって舞散りはじめた。
遺伝子強化人間の情報は県の外へと流れ出たが、それは冒頭の部分だけで、大半はいま、謎の幸運によってラミタイの目の前で二度と再生できないほど破壊された。いや、考えてみれば当然な気もした。通信機は遺伝子強化人間なんて邪悪な情報を食べていたのだ。壊れないわけがない。
「なんという謎の不運だ！　通信機は破損した上、予備は二つと存在しない！　高性能とはいえ、所詮は機械だったということか」
県軍人イルヒラムは禿頭から湯気を上げて怒り狂ったが、ラミタイの目にはそれが妙に芝居がかって見えた。
「作戦は失敗だ、クロノトン」
「まあ、このひどい状況下にしては、僕たちは頑張ったよ」
県軍人たちは慰め合うように言う。
遺伝子強化技術は失われた。フジーム教授ももういない。
あとは……自分たちだけだ。

## 15　ハチノヘとクジ

ネクサスの中は騒がしかった。クルーの叫びに、大阪を迂回して届く他ネクサスからのくぐもった報告。廊下の先には飛行甲板へと続くハッチがあって、その向こうはもう外だ。機関銃がうなるたびに、閃光が薄暗いネクサスの中にまで差し込んだ。

ジョビ大佐がイルヒラム曹長に託した通信機はその優秀さを現すかのように、一瞬で転送を終えた。

ネクサスがそれを受信して、ジョビ大佐の眼前でデコードされて、解凍されていく。

ジョビ大佐がいじっているのは通信機の母機だ。

おそらくはネクサスからサルベージされた技術をもとに作られたのだろうそれから、ケーブルが伸びて大画面ディスプレイにデータを表示している。

作戦を把握して、他ネクサスをせかすのに忙殺されていたクジは、ジョビ大佐が受け取ったものに気付いた。

画面が解凍を終えたことを告げ、フジームが産んだ遺伝子強化人間情報の最初のページにあたるコンテンツを表示した。

「素晴らしい……」

ジョビ大佐がつぶやいた。

ネクサスのディスプレイが表す光の乱舞のことを言っているのか、それとも、まさかその内容のことを言っているのか。

「なんて大胆で恐れ知らずなプロジェクトなのでしょうね、これは。見てくださいよ。遺伝子強化プロジェクト主任のフジームという人の発想力は本当にすごい。人間という種族の上限を増すために、こんなことをしようと考えつき、しかも、実行するだなんて素晴らしい。遺伝子強化人間はシェルやソヴィエテを相手取るために設計されたんだ……ただ早死にする子供のわけがありませんでした」

後者らしい。

まるで革新的な芸術品をほめるような、熱っぽい口調。
どこかジョビ大佐の雰囲気が違うように思えた。どこか、遺伝子強化技術を作ったあの科学者たちを想像させる動き。
この呪われた技術は、触れるもの全てに感染していく力でもあるというのか。
「ＰＣＯのお二方も、そう思いませんか？　これに国家単位のプロジェクトとして取り組み、そしてあなたたちの自慢の新型爆弾があれば、鬼に金棒です。そうじゃありません？」
もう、クジは顔に友好的な表情を作るのがうまくいかなくなっていた。ハチノヘはもともとそんな努力はしていない。
二人とも殺気立っていた。不眠症患者がやっと眠れた途端、隣室でバグパイプの演奏会が始まったときでさえ、こんなことにはならないだろう。
せっかく葬れようとしていた情報を、和歌山県軍なんて連中がこっちへ送って来ようとしている。
「例え、政府がこれに興味を示さなくても、和歌山県は違いますよ。この遺伝子強化の技術は和歌山県を蘇らせる。そうは思いませんか？」
ジョビ大佐は挑戦的にさえも聞こえる口調で言った。
この男はネクサスの装甲の向こうで何が起こっているのか理解していないのか？
「私たちが努力すれば、より洗練された遺伝子強化技術さえも手に入るかも入れません」
そう言って、ジョビ大佐は歯を見せて笑った。
気がつけば、ハチノヘが立ち上がってサーベルの鞘で床を規則正しく打っていた。
「だろうよ」
「今回私たちがこの事件から学ぶべきことはーー」
クジが言いながら、ハチノヘに小さくうなずいてみせた。彼に仕事を始めろと命じるサインだ。

「ーー私たちは自分の分を越えたものを作ろうとはしないこと、ね」
ハチノヘは抜く手を見せずサーベルを抜き放ち、銀光が正面から凍り付くジョビ大佐を襲った。

## 16　結合

ネクサスたちは激しく戦いながらもその巨体を進め、予定通りの空域に到達した。
　強力な妨害電波下にも関わらず、二十四隻全てが正しい位置に布陣できたのは、ＰＣＯの事前の正確な指示と、政府軍クルーの練度の高さゆえだった。
　爆弾の投下地点は和歌山市東方三十キロと決まっていた。はるか高空からこの光景を見ているものがいれば、その者は二十四隻のネクサスが投下地点を囲むように浮かんでいるのに気付くことだろう。
　それこそが４フレーズ・スーパー・ウエポンの予想爆破範囲だった。

## 17　ハチノヘとクジ

耳をつんざくような太い音がして、男は壁に叩き付けられた。
立っているのはジョビ大佐。倒れたのはハチノヘだった。サーベルがからからと音をたてて床を滑る。
直後に異変に気付いたクジは、彼女の腰の短銃の銃把を握った。
「おやめになっておくことです」
ジョビ大佐は床のハチノヘから目をそらさず、しかし、左手をぴたりと彼女の方へ向けた。
右手はもうもうと煙を吐き出している。その五本の指は第二関節までが消えてなくなっている。切断面からは指屈筋や腱のみならず、人工的な強化神経がのぞいている。この男は手から弾丸を撃ったのだ。
「あなたが銃を抜くより、この隠密火器インプラントは早く火を吹きますよ」
ジョビ大佐は最前と同じように落ち着いた声で話した。
聞いたことの無い武器。体内収納式だなんて、感染の危険性はどうなっているのだろう。シェルか、アフリカのテクノロジーだとクジは予測を付ける。
クジはゆっくりと銃把から手を離した。
「いきなり斬り掛かって来るとは、驚きですね」
「和歌山県を……故郷を裏切るつもり？」
「この県は確かにのどかで素敵でした。ですが、私の魂はまた別の地に属しています」
「あなたは日本人じゃないの？」
「ＰＣＯの情報部はもう少ししっかりと仕事をするべきなのでしょうよ」
ジョビ大佐はそう言った。クジは辛辣な顔で同意する。
ジョビ大佐は短くなった右手の指で通信機から記録磁気テープを

抜いてポケットに入れた。
「その忌むべき遺伝子強化人間技術を持っていくのは愚かよ」
クジの言葉を聞いて、ジョビ大佐の顔に貼り付いていた笑みが明滅するように消えた。
「……私の国は惨めなことになっているのですよ……。大国の圧政の下に敷かれ、民は誇りを失っています。私はどれほど穢れた技術だって使うことをためらうつもりはありません」
「それなら、せめて日本の二の徹を踏まないことね」
「用心しますよ」
ジョビ大佐は身をひるがえすと、開け放たれたハッチから身を投じた。
クジは窓辺へ走り寄ったが、ネクサスの外、化け物と砲弾飛び交う世界に裏切り者の大佐の姿は無かった。
ハチノヘが毒づいたりうめいたりして立ち上がる。制服はずたずたに避け、その下に着ていた防弾衣は火花を散らしている。
「ＰＣＯ本部はいまのを喜ばないだろうな」
「たぶんね。県軍のリーダーが異国の密偵だなんて予測しなかったわよ」
ハチノヘが血の混じった唾を吐いて、サーベルを拾った。刀身は折れ、束の部分の立派な金の飾りは銃弾で破壊されていた。
「どうする、ハチノヘ？　ＰＣＯ情報部に報告する？」
「やめておけ。あてにならん。それより４フレーズだ」
ＰＣＯの男は帽子も拾って、目深にかぶった。
「裏切り者の始末はわしがつけておく。近いうちにな」

## 18　ラミタイ

「移動するぞ。次のミッションがあるかもしれん」
イルヒラムは言ったが、それから目を細め、
「政府が爆撃してくる今、県軍なんてものが残っているか疑問だが」
「県民の生き残りはいるはずだし、県軍の責務は残っているさ」
クロノトンが言った。
「足と通信手段がいるな」
市の中心部で、県軍とのコンタクトを失うだなんてことはありえないはずだったので、予備の通信器はなかった。
「市内の県軍基地へ向かおう。なにか役立つものが残っていそうだ」
クロノトンはゆっくりと床の二人の死すべき子供を銃身で指した。
「それで、彼らをどうしよう？　遺伝子強化人間は県の敵だ。その解釈で問題ないね？」
イルヒラムは低くうなった。
「……なんで……なんで県民を撃たなきゃならないんだ！？」
「こいつらは敵だよ。やがては、変異して襲いかかってくる」
「知るか！　あの地で……我らはあの地で、民衆を守るために戦ってきたんだ！」
「イルヒラム！　彼らを殺すのがよき県軍兵士の選択だ！」
クロノトンが声を大にする。
県軍が守るのは県民だ。だが、守るべき県民を殺したのは、県民であった化け物だ。頭がおかしくなりそうだった。
くそ、ここは平和な県だったんだ！
「イルヒラム、最強の軍人にして、半島戦争の英雄の君なる分かるだろう？」
「昔の話だ。私はそのことを覚えてすらいない」
クロノトンがなおも反対しようとするのを制して、
「いいか、クロノトン。我々はいま、県軍から命令を受けていない。

フジーム博士を捕まえる作戦は失敗し、フリーな状態だ。そして、県軍と通信する手段もない。だが、県軍が県民を守るのは、県軍の存在意義そのものだ。我々がこいつらを保護して、政府軍の医療チームか何かに引き渡すのに問題はなにもない」
「気に入らないな。僕たちの県をこんなに破壊し尽くしてくれた化け物を保護しようと言うのだね。第一、政府軍の医療チームだかがこの二人の変異を止めることのできる確証は何もない」
クロノトンは銃床を肩に当てた。
「僕が忠誠を誓うのは県だ。そして、彼らは県に害をなす敵だ」
「県は県民から作られるものなんだぞ」
イルヒラムはゆっくりと手銃を抜いて、部下に向けた。
「友人としてではない。上官として命じるぞ。それをやめろ」
クロノトンは凍り付き、それから機関銃を下ろした。
「そうだね。そうすれば条件付けのおかげで僕は逆らえない。……残念だよ」
「すまんな」
「君の条件付けも、ウォンニのものも壊れているようなのに、僕だけがそれに縛られているのは、まったく不公平だね」
「私のは、壊れてなどいない」
戦場での秩序を保ち、戦闘に適した状態へ人の内面を作り替える、古くからの技術、条件付け。そのおかげで、将は部下の兵に撃たれる心配などしないで済む。邪魔で、不要な様々な感情さえ、ある程度は抑えられる。
あるいは、こんなもの、捨てる時が来たのだろうか？
いや、それはあるまい。
この技術が生まれる前の軍人なんてものは、略奪を目的とした盗人でしかなかった。
条件付けは必要だろう。たとえ、それが……非情な決断を求めても。自分の守るべきものを、滅ぼせと命じてきても。
「壊れてなどいない」

イルヒラムはゆっくりと言った。
条件付けは常に存在している。
だが、それでも、自分の守るべき県民の、解釈の自由は残されていた。

ファレリアを、彼女の望む地へ連れて行こうと、抱え上げようとした。だが、無理だ。ラミタイにそんな力はない。
やむなく、肩を貸すようにして、彼女を支えて歩き出した。
それでも、とんでもない労力が必要だった。
「おまえたちを県の外へ脱出させ、政府軍へと引き渡す。それでいいな？」
いつの間にか、隣に禿頭の方の県軍人が立って、何か言っていたが、ラミタイには何の意味もなさない言葉だった。
諾も否も表さず、よろめき進むラミタイに、イルヒラムは言う。
「だが、おまえたちが変異したらその時点で撃ち殺す。これは確実にやる」
クロノトンが無表情で、彼の鉄砲の銃身を手早く交換した。
「ウォンニはどこだろうね？」
「騒音の発生源にいるだろうよ」
二人の県軍人は銃を構えて廊下にでた。
ラミタイはよろよろとその後を追う。

## 19　県軍人

和歌山市の惨状はひどいものだが、ここまで荒れているのなら、もう彼が今さら少し壊したって問題はないはずだった。床には大穴が空き、石柱という石柱は電動のこぎりで伐採されていた。

叩き斬られて分解された化け物の死骸がそこらじゅうに散らばっている。

返り血で黒く彩られた顔に絶えることのない喜色を浮かべ、ウォンニ伍長は大股で廊下を進む。片手にはうなって振動する得物。もう一方の手で葉巻を取り出して口にくわえた。

「仕事中の短い一服は何物にも代え難い」

ウォンニは重々しく宣言して、電動のこぎりの灼熱したモーター部で葉巻に火をつけた。

これだ。

これこそが、自分のやるべきことだ。

自分はこうするために生きてきた。半島戦争が自分の運命を、そしてこの世界での役割を決めた。

自身の内から条件付けが、県の敵を殺すことを求めていた。ウォンニは喜んでそれを実行した。こうやって自分の存在意義を発揮するのは重要だった。

フジームとかいう人間を捕まえるミッションが下されたのは、残念だった。条件付けは、そんなことのために戦いの時間を減らすのは正しくない、と思っていた。ウォンニもそう思った。

だが、その後にジャイロコプターを失ったのは僥倖だった。あとは、通信機さえなくなれば、ウォンニは戦場で自由になれた。もう、県の外からの命令といった、雑音に悩まされることはない。

「さて、敵はどこだ〜？　出ておいで」

アカデミーの大階段に至り、それを上がっていく。

そして、彼は階段の最上段に黒い姿を見つけた。

「自分から出てきてくれると、こっちも楽なんだぜ。ひっひっひっひ」
ウォンニはそう言って、化け物に笑いかけた。
対する化け物は笑うのに適した顔を持っておらず、それどころか身じろぎもしなかった。
ウォンニはにやにや笑いを一層強めるが、違和感がかすかによぎる。
他の怪物は自分を見るなり、襲ってくるなり何なり、リアクションを起こしたものだが、身じろぎもせずに見下ろしてくるのはこいつが初めてだった。頭部には二つの赤い目が、それ自体光源となって光っているが、それは他の化け物のような狂気の色を放っていない。
その色はもっと冷徹な、指揮官。あるいは僧侶か。
だが、ウォンニの思考はそれ以上進まない。条件付けのこともある上、もともとウォンニは行動の人だ。
彼は騒々しい稲妻と化して、階段を駆け上がった。ウォンニの脚の下で階段がめり込み、県軍人のがっしりした体が回転する。全体重を乗せたのこぎりの刃が化け物の首に、がっきと食い込んだ。
だが、それだけだった。
刃はそれ以上進まない。
電動のこぎりは苦しげな音をたてて、持ち主の手の中で震えるだけだった。
ウォンニの顔から笑みが去る。
化け物が、やれやれ、といった風に首を振った。
ウォンニの右手がかすみを残して消えると、ホルスターの手銃を引き抜いた。だが、銃口を向ける前に化け物の手が銃身を掴んで、でたらめな方向へと向けてくる。銃が幾度か火を吹き、スライドが前後し、空薬莢が床を打つ音がしたが、化け物の手は恐ろしい怪力で銃身を離さない。
ウォンニの左手が電動のこぎりから離れ、のこぎりは床へと落ち

ていく。その行程が半分もいかないうちに、ウォンニの左手がナイフを抜いていた。
だが、それもいつの間にか化け物のもう一方の手に掴まれ、びくともしなくなる。
ウォンニと化け物の間で二種類の武器が震えた。
「遺伝子強化の結果は様々な面で表れる」
化け物の体内から、しわがれた異質な、しかし、明確な日本語が流れた。
「ある者は翼を持ち、ある者は鱗を生やす」
ウォンニが肩をかたかた振るわせ、喉から笑い声を出す。
「ひひひひ……！　こいつは可笑しい。喋りあがった！」
「僕の場合は表皮が岩のように硬くなったというわけだ」
うおおおっとウォンニは怒鳴り、化け物に頭突きをかます。
そして、ウォンニは額から血をまき散らし、一方、化け物はそよ風に吹かれたほどの被害も受けていないようだった。
ウォンニが舌打ちする。
「木を切る道具で僕を攻撃したのは間違いだったな、人間」
化け物は言った。その背から、新たな六本の脚が生えてきて、その先端のかぎ爪が光った。

## 20　ラミタイ

足に力が入らず、いつ倒れるのか自分でも分からない。ファレリアを運ぶのはいよいよ難しかったが、先を進む図体のでかい人々を頼ろうという考えだけはなかった。

上を見れば天井の窓から、横を見れば壁一面を使った窓から、燃える街と、嫌な色の空が目に飛び込んできた。

ファレリアが何かつぶやいているのに気付いたが、聞き取れない。もしかしたらこの場にいない人に話しかけているのかもしれない。

そのとき男の悲鳴が聞こえてきて、二人の県軍人は身構えた。

「耳に懐かしい。遠い記憶のはて、朝鮮半島で何度も聞いたものだ。断末魔の悲鳴。どこの国の軍人も等しくあれをあげるのだ」

イルヒラムの方が、場違いな落ち着いた声で言った。

「ウォンニが……？　あの猛者が……？」

クロノトンが静かにつぶやいた。

イルヒラムは無表情の仮面のまま、手銃を前方に向けてゆっくりと歩いていく。

「ああ……まずい……」

ラミタイがつぶやいて、割れたガラスと石片だらけの床に膝をついた。ファレリアは腕の中でがたがた震えた。いまや黒くなった血が、彼女の目から、口の端から流れ落ちた。

同時にラミタイ自身も右腕に堪え難い灼熱の熱さを感じた。ファレリアの髪の下、自分の腕がその色を黒く変え、指がかぎ爪の用な鋭さを得ていくのを、奇妙な諦めとともに眺めた。

「もう駄目だよ、イルヒラム」

クロノトンが言うのが聞こえた。

「彼らは変異してしまう。殺してやるべきだ。……彼らにしても今のままの姿で死ぬのが幸せなことだろう」

もう一人の県軍人イルヒラム何も言わなかった。

「……君が撃たなくても、僕は彼らを撃つよ」
クロノトンが機関銃を構えて、横のレバーを引くのが聞こえた。
ラミタイは大きな窓の外へと目をやる。空は橙色の煙と、天まで届くであろう炎に照らされている。
もはや平安な死など望むべくもないが、それでもファレリアには青空の下で死んでほしかった。彼女にはそれが似合っていたのだから。外の世界は恐ろしい世界だが、それでもこの廃墟よりかはましだろう、とラミタイは背後の二人の銃を持った死神を無視して、ファレリアをどうにか抱え直すと、出口からよろめき出ようとした。
突如として建物の中が暗くなった。
黒い巨大な蜘蛛のような姿が窓に迫るのが見え、ラミタイがなにかの解釈をする前に、それが盛大な破砕音とともに回廊に飛び込んできた。
ラミタイの頭上を何かが飛びすさり、イルヒラムが、幅跳びの選手の動きを巻き戻したかのような動作で回廊をどこまでも吹き飛んでいった。
敵襲だった。
すぐさまクロノトンは準備の整っていた機関銃を連射した。十メートルの距離だった。外しようもない。蜘蛛のごとき化け物は青白い火花を散らしてぐらつき、床のタイルに不思議な模様の傷をつけながら後退する。
だが、化け物は持ちこたえ、さらには至近の銃撃の嵐の中、一歩ずつ前進し始めた。跳弾が床や壁にめり込み、もうもうと埃を舞い上げた。
クロノトンは必死の形相で、裂帛の怒声を発する。必殺の銃撃を叩き込む。
だが、足りない。
化け物は銃撃を押し返すように跳躍し、県軍人にのしかかった。化け物の数ある脚がぶれるような速度で動き、クロノトンは床を転がった。

広大な廊下をどこまでも転がるかに思えたが、やがて男の体は止まる。頭部はなくなっているようで、血だまりが広がっていく。
耳鳴りがする中、機関銃の射撃が終わっているのにやっと気付いた。
化け物は十本もある脚のうち、二本で歩いてきた。こうすると、背中に六本の脚の生えた人間のように見えなくもない。その岩のような表皮が煙を上げている。
顔は、作り始めて早々にあきらめた彫像の様な顔だが、眼窩だけは二つあって、赤い眼が燃えている。
「探したぞ。手間取るはずだ。まだ変異していなかったとはな」
それは言った。重たい石がこすれ合うような声。
だが、名残があった。
「……ザーゴ」
「その通りだ」
化け物は胸の悪くなる声で同意した。世界が破けたような感覚に襲われ、この日何度目だか分からないが、ラミタイの視界が暗くなった。
「おまえ達のことだ、最後まで変異を拒んでいるだろうことは分かっていた」
「理性を……保っているのね？」
ラミタイが我に返る前にファレリアは、冷たくかすれた声で言った。
「僕はいわゆる特異な存在らしい。一つの体に二つの生き物の共存の見本、それが僕だ」
「……あなたが死を前にして平静を失ったのは残念だわ」
「平静を失ってなどいない！　これは正しい選択だ！　正しい進路だ！　僕たちはようやくやるべきことを理解したのだ！」
「……ピートルズを聞いたのか？」
ラミタイはそんな質問をしていた。
ザーゴはそれに対して、かすかに笑いさえしたようだった。

「自力で、だ」
「すると、あなたは自分の意志で暴れているのね？　学んだこと全てに反して？」
ザーゴは眼の光が弱まった気がした。
「奴らが嘘をついていたことは知っているのだろう、ファレリア？　全てに嘘を！」
「だとしても……あんたのやっていることは……」
ファレリアは静かに首を振った。
「私は……あなたを軽蔑するわ……」
「そうか」
ザーゴは鷹揚とも見える動きでうなずいた。
「では、死ね」
ラミタイの視界はぶれて、爆発して、意識のあらゆるものを焼き焦がした。続いて、目は物を見ているのに体は動かせないという不気味な状況となって現実は戻ってきた。モノクロだった視界に徐々にだが色は戻り、そしてしびれる痛みがどこからともなくラミタイを噛み付いてくる。
胸部に熱い物を感じるが、それは焦燥感から来るものではなかった。ラミタイはがはっと血の塊を吐いた。体の中の様々なものを壊されたのを感じる。
首を持ち上げようとしたが失敗して自分の血の池に突っ込むことになった。それでも目だけは頭上へとやった。
ザーゴの背中から生えた脚はファレリアの小柄な体を貫き、頭上に掲げていた。ザーゴはかすかに笑い、無造作にファレリアの体を投げ捨てた。
「変異する前に、変異した遺伝子強化人間を挑発すると、こうなる。これも一つの選択だ」
ザーゴはいった。ラミタイはかすかに溜め息を漏らした。
「変異を拒むのもそうだし、そして、僕がファレリアを殺したいから殺す、というのも、またそうだ」

ラミタイは口を開いたが、後から後から血が流れるだけで言葉にならなかった。呼吸の度に激痛なんかに引き裂かれていた。
ただでさえ赤く血に染まったラミタイの視界の中、ザーゴはその目を赤く光らせ、人間だった頃の癖か、口元を歪めようとした。
「そして、ラミ、おまえも早く選択した方がいいぞ。その人間の体はもう長くは持たないだろう。おまえの中のより高次な存在に委ねるんだ」
ザーゴは背中の六本もの脚を折り畳むと、ガラスやコンクリートを踏み砕きながら廃墟から出て行く。
「ただでさえ僕達の寿命は短いんだ。ゆっくり足踏みしている余裕はないんだ。僕達は圧縮された進化を味わわなくてはならない」
そして彼の姿は消え、遺伝子強化人間の叫び声が遠くで聞こえた。

なんでここに来るのが正しいことだなんて思えたのだろう？
こんな現実、大嫌いだったはずだ。目をそらすのは得意なんだ。面倒なことはみんな体内の化け物にくれてやればいい。
肉体の方の破壊を精神の方も真似しようというのだろうか。
ラミタイの変異はなおも進む。右手は指先から肩まで黒い棘だらけの物と化し、そこからさらに黒い情念が信号として進み、ラミタイの細胞の中の存在が反応していく。ラミタイの胸部、首までも変異は進んだ。ラミタイの折れた骨も、破損した臓器も全て黒い波に飲まれて溶けていった。

自分を悩ましていた悪夢と同じだ。
いや、今まで自分を惑わしていた悪夢の数々は現実に危害を及ぼすほどのものではなかった。だが、これは現実だ。
そして、その分、よりこの変異の意味するものをとらえることができた。
ラミタイは床を這って、やっとの思いでファレリアの隣にたどり

着いた。彼女が片目をかすかに開けた。彼女の周りの黒い血の池は急速に固まり、冷たくなっていく。
彼女の変異はさっきまで肩や背中で進行していたのだが、今ではそこから黒い骨か突起という見た目になっていて、それも一秒ごとにひび割れ、塵となっていく。
変異の全体像には、政府がついてきた無限の嘘のようなノイズにまみれていたが、それでもどこか理解できない一点を目指した変異に違いない。
だしぬけに、激痛の波は消えたが、それは物質的な面だけの痛みだけだった。
ファレリアの口がかすかに動いて何かを伝えようとする。だが、それはラミタイには届かない。
彼女は目を閉じた。そして死んだ。
ラミタイが、遺伝子強化人間が昔から心の底に貯めてきた虚無の痛み。目の前の人の死が何かの引き金になり、意思の力でおさえていたそれも解放されようとしているようだ。奔流となってそれは荒れ狂った。
変異の本質は理解した。そんな気がした。
だが、心から悲しみを排除することはできなかった。
ラミタイは声を出さずに絶叫しているようだった。空気の振動からそれを察知できた。
それに合わせて腕と肩を覆う棘はより長く、鋭く伸び、振動した。
頭の後ろで敵意を感じた。
振動は止み、ラミタイは立ち上がると、振り返った。県軍人と彼の手銃がラミタイを睨んでいた。
「悪いなラミタイ。変異したら殺すという約束だったな」
イルヒラムはつぶれた声で言った。彼の外見はザーゴにやられた傷のためひどいことになっている。
「まだだ」
ラミタイは静かな声で答えた。

「まだ変異は終わってない。進行中かもしれないけど、意識の主導権はおれが握っているよ」
「だとしてもだな、私がおまえを生かしておくことをためらう理由にはならないと思うのだがな！」
ラミタイは目を閉じた。素早くデータを整理した。
そして、
「イルヒラムさん、復讐はしたくないのかい？」
ラミタイは少し離れたところに転がる、頭をなくした県軍人クロノトンの死体を顎で指した。
「そして、あなた一人じゃザーゴを倒すことはできない」
「私を過小評価しているぞ」
「そうは思わないね。考えるんだ。これが唯一のチャンスだ、県軍人」
イルヒラムはかすかにのけぞったが、銃口だけはぴくりとも動かない。
「おまえに何ができるってんだ、小僧？」
「あなたの方こそ遺伝子強化もされてないじゃないか」
「おまえはどこへ行くつもりだ？」
「ザーゴの問いに対する返事をまだしていない」
ラミタイはそれだけ言うと、きびすを返した。ファレリアの亡きがらをその場に残して歩いていく。
イルヒラムの銃口が執拗な目のようにその後を追った。
「……私は和歌山県軍人だぞ！　私の役割は和歌山県民を守ることだ！」
「この街にはもうあまり和歌山県民が残ってないようなんだけどね」
ラミタイの言葉に、県軍人はひっぱたかれたように一歩後退した。彼の体がのけぞる。
イルヒラムはクロノトンの動かない体に目をやる。耳を、ウォンニの最後の声が満たした。それだけではない。さらに大勢の最期の情景がまぶたの裏によみがえった。ヘイス、ボット、ムターツ……

ニチョン村攻略のときに、ソヴィエテの戦車の急襲で失われた奴ら。チュトス、ヒクサム。それからネクサスの救援が遅れて死んでいった、３４砲兵連隊の顔。雨と泥。血の色に変わった泥水。
部下を殺された後、自分は何をやった？
政府軍が、平和な本国では不要だとして、自分に忘れさせたのは何だ？
イルヒラムの口が開いて、貯水槽のような肺に大量の空気をおさめた。
彼は吠えた。
戦場での効率と秩序のための条件付けが、安布のように引き破られていく。
圧倒的な声量が、周囲に立ちこめる硝煙や灰、血の匂いを吹き飛ばし、壁に叩き付ける。ラミタイは背中に圧力さえ感じたほどだ。
ちらりと振り返ると、県軍人の石の仮面のようだった顔に、新たな色が加わっていた。
「その通りだ！」
イルヒラムは語気荒く同意した。そしてラミタイを追って大股で歩きはじめた。
「次の任務が来るまでつきあってやる」
「ありがとう」
ラミタイは小さく礼を言う。
この県軍人の本性は、黙って引き下がりはしなかった。イルヒラムは二艇の手銃に弾をこめた。
「ラミタイ、さっきの遺伝子強化人間がどこにいるのか分かるのか？」
「想像はつくよ」
ラミタイはアカデミーの隣の、小山のようにそびえる選果場の屋上付近を指差した。
飛行する化け物が百匹か、それ以上集まって蚊柱のような物を作っている。

ザーゴはいつだって人気者でリーダーだった。そして、それは変異しても変わっていないのだろう。
ずいぶん変異は進んでしまった。
だが、ラミタイからファレリアという存在は消えた。あとやるべきことは、たった一つを残すのみだった。
「行くぞ。ああだこうだと考えるときは終わりだ。戦うときだ」
県軍人が地割れのような声で言った。
自分が考えるのをやめるときなんてくるのだろうか、とラミタイは思う。

## 21　結合

和歌山県上空。
銀色の六枚翼の特務爆撃機は高度一万二千メートルをゆっくりと進んでいた。妙に寒いそのコクピットの中、計器がまたたく。
ＰＣＯのクジからの命が届く。パイロットはうなずくと、いくつかの操作突起を引いた。
出刃包丁で裂かれたかのように爆撃機の腹が開いた。搭載された４フレーズ・スーパー・ウエポンが陽光を浴びてぎらりと光った。
爆薬の発展や、生物化学兵器の登場とともに、爆弾の大きさが威力を示す時代は終わっていたが、それでも、この爆弾の大きさは異常だった。
手のひらに乗る大きさのガラスの球がそれだ。
だが、これから起こさねばならない破壊には、十分過ぎる威力を発揮するだろう。パイロットは爆撃予定地点に向け、ゆっくりと機を降下させていく。

## 22　優性

選果場を、屋上まで登っていくのはそう難しいことではない。高層ビルほどの高さの選果場の階段を上っていくとなれば一大事だが、みかんの積み降ろしは屋上でも行われたため、トラックやマンモスを上げるための大形エレベーターがいくらでも設置されていた。選果場の地下にある果汁発電所の電力を得て、金属の箱は巨大な選果場の壁面を上りはじめた。

重い沈黙が続いていた。県軍人の体から落ちる血の滴がたてる、栓のゆるい蛇口のようなぽたっ、ぽたっという音だけがする。エレベーターの窓の向こうで和歌山市は燃えていた。

県軍人は、彼が守らねばならなかった都市を見ながら口を開く。

「あの遺伝子強化人間、知り合いだな？」

「同級生だよ」

「なぜ奴は変異したのに理性を保っているんだ？　変異したら、全く異質の生き物になってしまうのだろう？」

ラミタイは顎に手を当てた。自分の中で渦巻くイメージは、借り物だ。自分を体内から食らおうとしている化け物が、手始めに作ったのだろう。それでも、新たに作られつつある基盤から見ると、答えは見えた。

「たぶん……ザーゴは完全に主導権を渡していないんじゃないかな？　ザーゴに封じこめられた生き物はザーゴの理性があった方が都合だと考え、ザーゴも力は得ても、自我までは失いたくなかった」

うまい手。うまい取引だ。さすがはザーゴだ。体内の化け物を説得してしまうとは。

自分にそんな真似はとてもできないだろうことは、確信を持てた。

たとえ両者の意識が共存していたとしても、生物の体は二つの精神が共存することを許さない。これは明らかだ。ザーゴも他の遺伝子強化生物と同じようにそのうち死ぬ。でも、あいつならその前に

いろいろなことをやりそうだ。
「おまえたちの中にいるのは恐ろしい生き物なのだろう？」
「ああ」
ラミタイは強く同意した。体内のその黒い情動のことを、より理解するにつれ、より恐怖は増していく。
飲み込まれるのは時間の問題だろう。
「利害の一致で……それでハイブリッドになったと？　なんっつう、でたらめな……」
「あるいは、それさえもおれたちの設計の一部かもしれない。一つの体に、全く異なる二つの生命が詰め込まれているんだ。どんな効果が起こるのか、設計者も全てを予測することはできなかったのかも」
「おまえはどうなんだ？　ハイブリッドに進化してザーゴとの戦いを有利に、あるいはそうでなくてもせめて五分に持っていくことはできないのか？」
ラミタイは目を閉じて頭を振った。
「おれの遺伝子の中の生き物は何も話しかけてきていないようだ。少なくともおれの気付く方法では」
「詩的な表現を使うじゃないか」
「これより、この状況を気取って言い表せる言葉は持ってないよ」
「ふむ……なら、勝算はこの上なく低い。当たって砕けるしかない」
「だとしても失うものは何もないさ」
事実だ。
遺伝子強化されたことを恨んで、暴れて死のうとしているザーゴたちは一次元的な考えしかできていない。
でも、自分はもっとひどい。自分の行動に意味はない。
生き延びるすべはどこかにあるのかもしれない。まるで、それをちょっとした理由から思い出せずにいるという、不可思議な感覚がつきまとう。
だが、自分たちはそういう風に設計されていないのは明らかだ。

だとすると、何なのだろう？　これは体内の異生物の希望でも意味するのだろうか？
ラミタイは思い描けるだけのイメージを頭の中に作ってみるが、無理だ。
生き延びる手なんかない。
空飛ぶ黒い姿へと目をやる。翼手類でも、羽虫でもない醜い連中は、同類だ。知り合いでさえあったかもしれない姿。
しかし……ザーゴたちのように周囲のもの全てを破壊するのは……傲慢だ。どんな理不尽な滅ぼされ方をして、絶滅へと追いやられた生き物とて、最後は静かに消えていく。次の生き物にその座を譲るために。
長い目で見るとファレリアの活動の方が歴史にもずっと影響を与えていることだろう。まったく、彼女は殺されるべきではなかった。彼女の望むやり方で最期を迎えるべきだった。
ファレリアを美化しすぎだろうか？　……まあ、いい。
自分がやるのは復讐だなんていう、まるで意味のないことだ。
それでも、人間は意味のないことに意味を見いだすのが得意な種族だ。
あるいは、意味のないものなんてこの世にはないのかもしれない。

エレベーターは停止した。
ラミタイの右腕や肩の棘状となった皮膚が逆立ち、イルヒラムの目にさえとらえられない速さで振るわれた。エレベーターの扉が弾け飛び、金属の塊となって四散した。
二人はゆっくりと屋上を歩いていく。
イルヒラムは頭上高くを、空飛ぶ遺伝子強化の化け物が取り巻くように飛び回っているのに気付く。だが、ラミタイは一切気にしない様子で歩き続けた。
屋上の床にはマンモスやトラックを誘導するための線がひかれ、

高いクレーンが街路樹のように規則正しくどこまでも続いている。クレーンはみかんの積み降ろしだけではなく、保存中のみかんの味を良くするため、みかんのコンテナをひっくり返すためにも使われる。

選果場の大きさは、隣の学校に通っていたラミタイにとっても感銘を与える大きさだった。

オレンジ色のもやの向こうから、染み出るように身長五メートルを越える姿が現れ、二人の前に立ちふさがった。選果場の労働者ではない。十匹ほどの異形だ。

「さあ、どうする？」

イルヒラムがきいた。両手にはすでに拳銃が収まっている。

だが、それに対し、ラミタイは異形たちを見てもいなかった。心の平安という、せっかくの精神のインフラストラクチャを、体内の化け物に食われることで失うことは、事実誤認も甚だしかった。

こんな連中は、野獣と変わらない。

ラミタイは凍り付いたようにそのさらなる向こう、選果場の屋上のふちに立っている六本の脚を生やすただ一人の男を見ていた。

奴は違う。

ラミタイは悲しげに息を吐き、右腕を振るった。彼の隣に生えていた高さ五十メートルほどのクレーンが、鋭い音とともに根元からへし折れて、ゆっくり倒れてくる。

異形たちが驚いたが、もう遅い。

けたたましい地響きがおきて、十匹の大柄な遺伝子強化の化け物は押しつぶされてしまった。

さらにラミタイは横たわるクレーンを右手でつついて、吹き飛ばした。クレーンは風車のように回転しながら悠然と立つ異形の首領、六本脚の影へと猛然と襲いかかった。だが、ザーゴもかすかに体を傾げてそれをかわすと、二人の前に歩み出た。

「選択したぞ、ザーゴ」

ラミタイが吐き捨てるように言った。

「ずいぶんとまずい選択だな」
「おれたちに遺伝子強化みたいなことしかできなかった、心の平安を知らない、哀れな人間のために祈ってやることはできないのか？」
「無理だ。僕はもう自分の怒りを抑えきれない」
ザーゴは両手を広げ、背中の六本脚もそれに同調した。それを合図に空の百匹もの異形が迫ってきた。化け物たちの黒い姿が空を覆い隠す。
ラミタイはそれを見て、戦いの予感に総毛立ち、彼の変異はさらに進む。黒い線が首を上がって頬にまで達し、ついには片方の目がそれに飲み込まれる。
彼は自分でも認識できない感覚に身を委ねる。
気がつけば、自身に切り裂かれた空飛ぶ遺伝子強化の化け物が、死体と成り果てて転がった。
だが、依然として空は見えない。
高速で周囲を飛ぶ無数の化け物が土砂降りの雨のように視界を埋めていた。
すでにイルヒラムの姿はなかった。人間はひ弱な上に、死を死ぬほど嫌がる生き物だ。この状況は人間が生きるには過酷すぎたに違いない。
カーテンが開くように空飛ぶ化け物たちの壁に亀裂ができて、ザーゴが眼前にやって来た。
「おまえに宿っている生き物は、さぞ素晴らしいものなのだろうな、ラミ。完全に変異していないのにこれほどとは」
彼は言った。
ラミタイの攻撃は一瞬だ。
黒い手刀の切っ先をザーゴの心臓に突き込む。予備動作に必要な時間は六十ミリセカンド。
だが、ザーゴの六本の脚が牙のようにがちっと閉じると、ラミタイの手はそれに挟まれ、止められていた。ザーゴの心臓までは数センチ及ばない。

「惜しむべきは、おまえにまだ人間の部分が残っていることだ！」
衝撃。
ラミタイは床に叩き付けられ、コンクリートは放射状にひび割れ、半径五十メートルほどの円を作った。
「あるいは逆かな？　一番劣った個体なのかもしれない。まだ変異が終わらないのだから」
さらなる攻撃を予測して、即座に頭を上げて迎撃しようとする。
自分の切断された右腕が床に突き刺さるところだった。ラミタイの肩の切断面から、心臓の鼓動に合わせて黒い血が噴き出した。ラミタイは溜め息をついて、左手を傷口に押しあてたが、もう状況は好転しようがない。
直後にそれが来た。
変異した部分を切り落とされたからだろう。
体内の異なる存在が、主導権を奪いにやってきた。ラミタイの意識が粉砕されそうになる。恐ろしく、圧倒的で、黒くて邪悪な、同居人。そして、敵だ。
もう一方の敵、ザーゴは渦を作るように周りを飛び交う遺伝子強化の化け物たちを、陶酔した様子で見上げ、床の苦悶の表情のラミタイなど見てやいない。
「見ろ！　僕の政府への、遺伝子強化人間を作った研究者への、憎悪に応じて、こうも多くの同胞が集まったぞ！　いや、いまや政府も研究者もどうでもいい。僕たちは県境に残っている政府軍を粉砕して、日本中の、可能なら世界中の無防備な都市へと攻め込んでいくのだ！　僕たちの短い寿命がつきる前に人間どもを殺しまくってやる！　その死者の多さから、人間は僕たちのことを忘れることなどできなくなるほどにな！　これが奴らに作られた生き物のメッセージだと、奴らに刻み込んでやるんだ！」
ザーゴは叫ぶように言った。
ラミタイはうなずきもしなければ、首をふりもしない。そんな余裕もない。

ただ、意識の片隅で、悲しい生き物だ、とザーゴのことを思った。
そして、ザーゴは抑えが利かなくなったように、なおも叫んだ。
「分かるか、ラミ？　生物というのは、長い鎖の歌のようなものなんだ！　この鎖の長さが分かるか？　三十五億年前から続いてきた、遺伝という名の自然の無意識のプロセスなんだ！　おまえの体内の生き物はこのことを歌わないのか？　単細胞から始まり、藻となって世界の組成を変え、陸上へあがって緑で覆い、イクチオステガからテコドントへ続いて恐竜が栄え、それが終わった後、世界の覇者の座は哺乳類へと移り、凡獣類から長鼻、偶蹄、奇蹄、肉歯、齧歯、食虫、翼手、有袋、単孔へとつづいて、そして霊長類だ！　原猿、真猿と分かれ、さらにオナガザル、テナガザル、オラウータン、ヒトが現れた！　そしてーー」
ザーゴに霊感を与えた、黒い情動に自分を浸すのは、幸福の絶頂ともいえるものなのかもしれない。
それでも……自分はできない。
変異はしない。変異は許さない。
そう決めていた。
体内の生物が、体の主導権を奪おうとする。
だが、無駄だ。これはおれの体。産まれたときから操っている、自分の方に利はあった。
意思の力でその生き物を押し返し、主導権を再び掌握した。
「ザーゴ」
「ほんの数千年前だ！　そして、ヒトには突然得体の知れない知性が宿り、それがーー」
「ザーゴ、もういい」
ザーゴは喋るのをやめた。
ラミタイはふらつきながらも、静かに立って彼を見た。どうしてザーゴほどの者が、舌先の言葉で自分の意思を翻せると思っているのか分からない。
何か手はないだろうか？

非常に不利な展開だ。これを切り抜けるのはほとんど不可能だ。体内の異生物は、あと八秒の間、抑えておくことができそうだが、それが過ぎれば、変異は再開するだろう。
急いで、ザーゴへの攻撃パターンを探す。
先ほどのラミタイの動きは、完全に読まれていた。そしてザーゴはそのときに、さらに詳細な情報を手にしているのは明らか。
だとすれば、彼の意表をつく事態を引き起こし、ザーゴの防御様式に一瞬の隙を作るしかない。
どうすればいい？
ラミタイはザーゴが何か隙を見せないかと、睨みつける。
「最後にきくぞ、ラミタイ！　変異を終えて、僕たちに加わって復讐を遂げるか！？　それとも、ここで人間と遺伝子強化人間のどちらでもない姿のままーー」
「ザーゴ」
ラミタイは言った。
「ファレリアを殺したのは間違いだったな」
ラミタイは地面を蹴った。
ザーゴは嘲笑とも、いら立ちのうめきともつかない声を上げて、それを迎え撃つ為の完全な準備を整える。遺伝子強化生物の卓越した感覚と、人間の知性の前には、対面しながらの奇襲という要素は意味をなさなかった。
だが、次に起こったことには全ての遺伝子強化人間が肝を抜かれた。黒い渦を形づくってザーゴとラミタイの対決を見物していた空飛ぶ化け物たちが、唐突に血をまき散らして四散しはじめた。
その降り注ぐ死体を蹴散らして現れたのは、県軍人イルヒラム。
黒い返り血と、自身の赤い血に染まりながらも、イルヒラムの目は燃えていた。県軍人を燃やすのは怒りの炎だった。
自分の部下と、自分が守るはずだった世界を同時に奪われた男の、言葉に表すことのできないほどの怒りだった。
イルヒラムは弾の尽きた銃を捨て、ひるむザーゴにつかみかかる。

その太い腕をザーゴの首に巻き付け、頭を胡桃のように割ろうとでもいうのか、拳を振り下ろし続ける。ザーゴの表皮は銃弾をも弾くのだが、イルヒラムはそのことさえ頭にないのか、ザーゴを殴って殴って殴りまくった。

その姿は狂った県軍人の像そのもの。

恐ろしい男だった。

ザーゴが肘を背後の県軍人をに叩き付け、明らかに県軍人の体の何かをへし折った。だが、それでも県軍人は離れようとしなかった。

ザーゴはここに至って、その体の主導権を完全に遺伝子内の同居人に託したに違いない。知性の影は直ちに消え失せ、他の遺伝子強化の化け物同様、あるいはそれ以上のとてつもない凶暴性を発揮すると、イルヒラムを弾き飛ばした。

全てはラミタイにとって十分な時間だった。

ザーゴは迫るラミタイに気付く。だが、イルヒラムの攻撃のせいで遅れを取りながらも、ザーゴとその同居人の素早さはラミタイを遥かに越えていた。

振り向く前に、ザーゴの六本の脚が迎撃を開始している。それはくねり、六種類の軌跡を描いて、ラミタイを迎え撃った。先ほどのけちな小手調べとは違う。ザーゴの本気だ。

完全な変異を越えた化け物ならではの、あらゆる生物に真似する術のないスピード。ラミタイによける手はない。

彼は六本の刃に瞬時に切り刻まれた。

ザーゴの迎撃はラミタイがその身から繰り出すことのできる、あらゆる攻撃を無力化し、同時にラミタイを倒すことを意図したものだった。

だが、ザーゴは視線を下ろし、己がラミタイの攻撃に串刺しにされているのを知り、愕然とした様子だった。

ザーゴが切り落としたラミタイの右腕が、投げ槍となってザーゴ

を貫いた武器で、それはザーゴの予測したいかなる攻撃よりも直線的で、単純なものだったに違いない。いまや、ザーゴは人間だったときに見せたことがないほど弱い存在に見えた。黒い血が彼の体の前後で吹き出す気配を見せた。

ザーゴと彼の同居人の化け物が震えながら、ラミタイを見る。

床に崩れたラミタイは苦労してかすかな笑みを作った。

「ラミ……僕はこんな……」

ザーゴは何かつぶやきながら後ずさっていく。十歩も後ずさったところで選果場の屋上は終わりだ。

だが、ザーゴは構わず後退して、そこから落下した。六本の足が空気を引っ掻く。彼は遥か眼下の燃える和歌山市へ、一言も発せず静かに落ちていった。

ラミタイの体の中の黒い情動は一声叫んで、沈黙した。

死んだのかもしれない。

あるいは、ラミタイが変異を拒んだように、この生き物も変異を意思の力で止める気になったのかもしれない。

ラミタイは自身の生命状況へと目を向け、すでにどうしようもないほど死が近づいていることに気付いた。ザーゴの攻撃は仮借なかった。

結局、ラミタイという個性の消失は免れない。まあ、こんなものだろう。

ただ、変異間際の、様々な洞察を得たにもかかわらず、ラミタイには分からなかった。

結局、遺伝子強化人間が生きのびる方法なんてあったのだろうか？

## 23　県軍人

イルヒラムはラミタイの体を抱えると、選果場をあとにした。
集結していた遺伝子強化の化け物たちはザーゴが破れるとともに、霧散していった。彼らがラミタイとイルヒラムに恐怖したのか、それともザーゴの敗北など気にせず政府軍と一戦交えようというのか。人間には分からないことだが、とにかくイルヒラムへと近づいてくるものはいなかった。
イルヒラムは、もう人間の姿をしていない、しかし化け物でもない姿のラミタイをアカデミーの床の上、ファレリアの隣に横たえた。
イルヒラムは手銃に弾をこめるが、もう使う必要がないのは明らかだった。ラミタイはザーゴを破ったときにはすでに虫の息だった。変異した部位も活気を失い、ひび割れていく。
すでにファレリアの血で一度黒ずんだ床に、ラミタイの黒い血が広がっていった。
イルヒラムにできることは何もなかった。

やがて、イルヒラムはラミタイが死んだのを知り、立ち上がるとバルコニーへと歩み出た。
和歌山市は燃えていて、守るべき県民の姿は全く見えなかった。生を見いだすことさえできなかった。県民がいないのならば、県軍の存在する必要も、もうないのだろう。
政府軍の包囲を遺伝子強化人間たちが破っているのなら、日本中の都市が間もなくこのような姿となる。
だが、イルヒラムは何ももたず、何の任務も与えられていない。
イルヒラムにできることが何もないことに変わりはなかった。
空はやはり赤い色だが、こころなしか暗くなってきたようだった。煙の柱は今なお太く、静まる気配はない。

遥か高空を銀色の鳥らしきものが横切るのが見える。
イルヒラムは無言でそれを見上げていた。

そして。

## 24　破砕

時空はもろい。
ガラスの中、一つの彎曲した構造の原子が、宇宙を作り出しているプール線をぼかすスピードで回転していた。
プール線は宇宙の中心から離れれば離れるほど希薄になっていって、この惑星上ではもはやその存在は無にも等しい。
だが、増幅させる手ならあった。
ＰＣＯが原理は知らねども、起こりうる効果は知っているキャタリストが、百八の辺、二十六の面、八つの超面を持つ図形の形とって、彎曲原子をとりまく。新たな力場に驚いた原子はエネルギーを体内に溜め込むだろう。だが、この時点ではキャタリストの方が力は上だ。
音高く原子にヒビが入った。
たちまち原子は安定性を失って暴走を始めた。原子の周りの、キャタリストや、ガラス、空気、プール線で織られた世界などがまとめて内破する。
そうして周囲の次元を吸い込んで、宇宙の線に波紋を投げかけた後、今度は打って変わって純粋なエネルギーとして膨張した。
世界の繊維がほどけていく。
全ては飲み込まれた。

その衝撃波たるや、凄まじかった。
最初の内破で和歌山県の表土はひっくり返され、形あるものは、形ないわけの分からぬものになってしまった。
そして十億分の一秒後に生まれた膨張で何もかもが巻き上げられ、空中で消滅していく。
秒速十キロメートルを越える速さで四方に膨らんでいく、光と熱

の球体に全ては飲み込まれていった。

## 25　結合

二十四隻のネクサスは防波堤だった。
クルーの誰もが緊張のあまり発狂寸前なのをクジは感じていたが、それは失敗の際の言い訳になるはずもない。
「爆弾投下を確認！」
クルーが叫んだ。
「失明したくなければ絶対に光を見ないことだ」
ハチノヘが分かりきった忠告を発した。
クジは制御盤に埋め込まれた無機質なパネルに対峙し、その中央の金属の鍵に手を置いた。

ネクサスと４フレーズ・スーパー・ウエポン。
４フレーズがネクサスの反応炉から作られたという点が重要だった。その効果こそ、まるで異なるが、その根源的な力の流れは共通。
物理法則を歪める場を作るには劇的な舞台が必要だ。
例えばビッグバン。
室町時代前後のゴールデンエイジに、宇宙開闢の瞬間に似た輝きの下で作られたのだろう、スーパー・フォースが粒子大の空間に封じ込められている。そこから産まれる影響力が増幅されて、ネクサスを宙に浮かべている。
最近、ネクサスの祟りを恐れぬ無謀なＰＣＯ技術者が、ネクサスを解剖して手に入れた因子はキャタリストと名付けられた。
キャタリストの本来の用途は分からないが、それはネクサス反応炉が作られた時に封じ込められたスーパー・フォースを、幾ばくか解放させる。
ネクサスの姿勢制御用小型反応炉から作られたものが３フレーズ、推進用主反応炉から作られたのが４フレーズのコードネームで、す

でに政府軍に極秘に配備さえようとしている。
爆弾を作るためにネクサスを失うのは痛かった。
だが、世の中にはそうしなければ、滅ぼせない悪があるのだ。

ＰＣＯ技術班は二十四隻という数のネクサスを集めることで、ネクサスの何万トンという質量を宙に浮かばせている力場が協調して、４フレーズに拮抗できる壁を生めると信じていた。
４フレーズの小型な従兄弟、３フレーズですでに二度ほどテストしたし、シミュレーションも完璧だった。
とはいえ、ネクサスも４フレーズも、本質的に自分たちの理解が及んでいる代物ではない。いつ何時、何を引き金に破綻ができて、地球の北半球の半分をこそげとられるか分かったものではなかった。
だが、やらねばならない。
この狂った世界、狂った計画によって作られた、元は人間だった化け物が、より多くの死と、破壊と、絶望を広める前に。
クジの手が金属の鍵を回した。
全てのネクサスの動力反応炉をオーバーロードさせる、緊急制御装置。
ネクサスはその巨体に似合った咆哮を放ち、時空を歪める力場を解き放つ。

## 26　愚者

ディスプレイがぱちぱち音を立てるが、なにも映りはしなかった。
「反応炉は全エネルギーを使っちまったわけか」
ハチノへがうなった。暗闇に包まれ、なにも見えはしないが、部屋は散乱の極みのはずだ。
電子機器が時折放電する他、音はない。ネクサスは進水以来初めの静寂に包まれていた。ハチノへの隣の政府軍クルーは首の骨を折って死んでいた。シートベルトを忘れたのだ。同様にネクサス内の大半のクルーが息絶えていることが想像できた。
ネクサスが全ての動力を失い、数百メートル下の地表へと石のように落下しようなんてこと、誰に想像できただろう？
クルーがそういった展開に対する訓練を受けていないことは明白で、そのつけは彼ら自身の命で支払われた。
だが、ネクサスが蒸発していないことは、作戦の成功を意味していた。ＰＣＯは４フレーズを押さえ込んだのだ。
和歌山県は深さ数キロのスラグの煮え立つ盆地となった。
だが、周囲の地域に大きな被害はないはずだ。
詳しい状況はセンサーが息を吹き返すか、ネクサスの外に脱出するまで知ることがかなわない。いま、ネクサスは巨大な恐竜の死骸のようにその身を大地にめり込ませていることだろう。
ハチノへはネクサスのハッチへと歩み寄ったが、それは開かなかった。手動で開けるようには設計されていないのだ。
このネクサスの電気系が死んでいるなら、ハッチを抜けるにはアセチレンバーナーかなにかが必要なのだろう。
クジは無表情で、何も映さないディスプレイを見つめていた。
「４フレーズの成功が確認されたら、ＰＣＯは日本に存在するリビルダー基地を全て、和歌山県のように吹き飛ばすのでしょうね」
クジは言った。

「ああ、だろうな。リビルダー基地は日本の足枷だ。何をためらうことがある？　プロセッサー主義者のテロリストの仕業という証拠をでっち上げれば、リビルダーも、アメリカもイングランドも素早くは動かないだろう。連中の興味はベトナムやシェルを向いている」
パチッとモニターの一つが火花を散らして、ハチノへの顔を一瞬青白く染めるが、すぐに暗闇が戻ってくる。
「……私達は愚かね。たった今、手に負えない遺伝子強化技術を葬ったばかりなのに、これからさらに手に負えない４フレーズを乱用しようとしている。時代は明らかに平和の愛される方向へと進んでいるのに……」
クジの声は弱々しかった。それに対してサーベルを持つ男は、闇の向こうで笑ったようだった。
「クジ、我々は武器を捨てることができるほど賢いのか？」
「……」
「あるいは、弱くなっても生きて人類を導くことができるほどに？」
「……いいえ」
「平和を愛することは、平和になることを意味すまい。我々ＰＣＯがやるべき仕事は多いはずだ」
そしてＰＣＯが目指す道が険しいものだということは二人とも強く感じていた。
だが、今は二人とも暗闇の中、救助を待つほか、できることはなにもなかった。

## 27　歌手

■リビルダーによる占領下にある日本共和国の西部に位置する県国鹿児島■

四人ほどしか客の入れない定食屋には、天井の隅にテレスクリーン付きラジオが据えられていた。

選択されているのは民営のチャンネルだ。国営のチャンネルの硬い感触はこの定食屋に似合わないというのが、店長の考えなのかもしれない。

昼食時だというのに、客はただ一人で、その客も出された料理にろくに手を付けようとしていない。それでも、禿頭の店長はサービス精神の塊だった。

店長が提供する話題にいちいちうなずきながら、黒い肌の客、ジョビ・ルゾンは左手をテーブルの上で握ったり開いたりしている。

自力で交換した義手の調子はよく、しっくりと馴染んでいた。生身のものより具合がいいくらいだ。世界最高の医師に設計してもらっただけのことはあった。

頭上のテレスクリーン付きラジオは、白黒の画像とやる気のない声でニュースを流していたが、やがてニュースキャスターの声が緊張を帯びた。

『ーー続いて、昨日から事態が急展開を見せた和歌山県のテロリスト襲撃に関するニュースです。すでに政府軍により、事態は完全に掌握されました。政府軍の爆撃と同時にテロリストは自爆したとの情報もあり、その被害ははだはだしく、その死者たるや十万とも二十万とも定めることができないとのことですーー』

店長はうなり声を上げ、エプロンで手を拭いながら、

「嫌な事件だねぇ」

「そうですね」

客はそう答えたが、テレスクリーン付きラジオの方を見てはいなかった。
「お客さん、あたしは考えているんでさ。こいつはただの事件じゃない」
「へえ？」
「政府はテロリストがどうのこうのと言っているが、そいつは真実じゃない。お客さんもそう思っているんでしょう？　ねえ？」
店長の声は異常な確信に満ちている。
ジョビの目が鋭くなって、店長の顔を見た。
「……そうですね」
ジョビの手がゆっくりとテーブルの上で開いて、指先が店長を向いた。
それに対して、店長は何度も激しくうなずいていた。
「そうでしょう！　そうでしょう！　あたしは知っているんだ！　和歌山県を襲ったのは、人類への復讐のために宇宙の深淵からやって来た霊的生命さ！」
店長はそう叫ぶと、ぶるぶる震えた。
「あたしはどうも、地獄のような世界からやって来た復讐鬼ってのが苦手でね……政府軍はしっかり和歌山県を爆撃してくれていればいいのですが……」
「……心配ないと思いますよ」
客はそういって、手を机の下に下ろした。
『ーー政府は半島でのプロセッサー主義の再燃と、それに影響を受けたテロリズムのさらなる勃発に用心しているとのことですが、リビルダー政府に目立った動きは今のところ見られませんーー』
「なーにがプロセッサー主義の再燃だ！　霊的生命の裁きが、ついに地球へと下されようというのに、政府は気付いていないのか！？」
今回の仕事は危険が大きかった分、得たものの価値も高かった。
そして、ＰＣＯの追撃はジョビがいままで受けたことがないほどの、激しいものとなるだろう。ＰＣＯとのゲームは始まったばかり

だった。
こんな場所でぐずぐずしているのは得策ではなかった。だが、共に和歌山に潜入した、弟のサヴォウノ・ルゾンとは、ここで落ち合うことになっていたのだ。ジョビは時計に目をやる。
時間はもう限界だった。
いまにも、ＰＣＯの追っ手はここを嗅ぎつけるだろう。
あと五分。
あと五分で、サヴォウノが現れなかったら、彼も和歌山の民、数十万人とともに、４フレーズで蒸発させられてしまったと考え、あきらめることにしよう。
『ーー岩手、函館、札幌。十一時現在、戒厳令が敷かれている都市は以上の二十八個です。では、続いて気になるベトナム情勢に関するニュースです。サイゴンにいるタナベ記者を呼んでみたいと思います。タナベさーん？　ーー』
ジョビの時計の針の速度は、緩まりさえせず、あっという間に五分は過ぎていく。
有限な時間に対して、時計の針はなんと無情なことか、とジョビはつぶやいた。
その時、定食屋の扉がガラリと開いて、ジョビと同じ肌の色の男がゆっくりと入ってきた。
「いらっしゃい！」
男はジョビの隣に腰を下ろす。
店長は、一人目の客のそっくりさんが現れたことを何かの吉兆とでも考えたのか、踊りださんばかりに見えた。
「兄さん、首尾は？」
「悪くないですよ」
ジョビはサヴォウノにそう言い、和歌山にいる間一度も作ったことのなかった、本当の笑みを顔に浮かべた。
「そちらは？」
ジョビは英語に切り替えた。

「結局、ピートルズはリビルダーの工作員だったのですか？」
「違う。アメリカだよ」
サヴォウノの英語はひどくヨーロッパ風になまっている。
「五人組のうち、四人は片付けた。でも、リーダーのジョン・ジクサスには逃げられた。ありゃ、凄腕だ」
「ふむ。さすがにいい駒をそろえているようですね。まあ、いいでしょう」
「その後、ついでにピートルズになりすまして、和歌山アリーナで歌ってきた。久々の大舞台でね」
ジョビはサヴォウノの、人間のものとは思えない金切り声の歌声を思い出して、顔をしかめた。
「なんでそんなことを……。私が言うのもあれですが、あなたの歌は酷いものじゃないですか」
「芸術を理解できないとは、残念極まる人だな、兄さん。熱烈なファンだっていたようで、先日ファンレターも来たぞ」
「何通？」
「一通だけだったけど。和歌山県軍人からだったかな？　なんであれ、県民も俺の歌を耳に残して、最期を迎えられて幸福だったろ」
「バカバカしい。死んでしまえばそれきりですよ」
ジョビは低い声で言って、立ち上がった。
「行きましょう。私たちの帰りを待っている人々がいます」

## 28　繋ぎ

空の赤と金のまだら模様の下、真っ平らな大地がどこまでも広がっている光景は心が痛むほど美しかった。
この大地は空白だった。
全ての生き物は一掃され、地球上には他に存在しない静けさに包まれている。
だが。それも今だけだ。
やがては、目的を持った動植物が移民としてここへなだれ込み、以前とは違った様相の自然を作り上げるのだ。
そして、人間もーー。
一陣の風が海の方からやってきて、自分の髪／感覚毛を揺らすのを感じた。
自分？
自分の名はーー。
『ラミタイ』
そうだ。それだ。
自身の内からの声が何度ともなくその名を強調したのを思い出した。
その声は、こちらが質問したり、相づちを打ったりしてやらなくても、好き勝手なことを喋り続けた。
「なあ、同居人」
そして、こちらが話しかけると即座に反応が返ってきた。
「この大地を焼き付くした炎はおまえを、そしておれを殺さなかったのかい？」
『では、ラミタイ、他者の遺伝子の中でその存在を保てる我らにとって死とは何なのだろう？』
「他の遺伝子強化人間は死に絶えたじゃないか……」
『ああ。それは実に悲しいことだ。彼らは皆方法を間違えてしまっ

た。みんな、破壊と殺戮に耽ってしまった。生存のためにはそんな事よりも重要なことがあったのだが、思い出せなかったのか』
　同居人は溜め息をついたようだ。ラミタイの頭にファレリアのことが浮かんだ。
『その少女の同居人が私に統合を尋ねてきて、私もそれを受け入れた。他に統合ができそうな同胞は見当たらなかったからな。統合は私の体液を介して行われ、なんの問題もなく済んだ』
「でも、二種類の生き物が一つの体に生きるのは無理ではーー」
『その誤った考えは何に由来するのだね？　すでに君と私がその反証ではないか。所詮は容量の問題でしかないんだ。人類を含む、普通の生き物に二種類の精神は無理だ。容量過大で破綻してしまう。だが、統合のおかげで容量が二倍になった私／私たちにとって炎に耐えれるように自身／君を作り替えることは造作もなかったというわけだ』
　同居人は誇らしげだった。
「そ……そんな単純な？」
『何を期待していたのだね？　私／私たちは単純な種なのだよ。付言すれば、その少女を殺した暴走体を君が始末したことにも、少女の同居人はいたく感銘をうけたそうだよ。自分よりも強い個体に勝つ行為というのは、私たちにとって重要な意味を持つものだからな』
「ふうん」
『そうそう、統合相手によると、少女は君が生き延びることを強く望んでいたそうだ。そのためにも、私と統合する気になったのだとさ』
「ファレリア……なぜだ？」
『私は知らないな。自分で尋ねたまえ』
　ラミタイは同居人の存在のさらにその向こう側に、ファレリアの存在をかすかに感じて目を丸くした。
　なんてこった。
　ファレリアまでもが同居人なのか。

……まあ、これも他の全てのことと同じように慣れていくべき事柄の一つなのだろう。
ラミタイはゆっくりと立ち上がった。
「これからどうするんだい、同居人？」
『君次第だ、ラミタイ』
同居人は何だか眠たげに言った。生存に成功して満ち足りた思いなのだろうか。
『死はいまや回避された。だが、君がかつて探していた平安が見つかるかどうかは、保証できない』
「そうか」
平安は探すことができるだろうし、そうするつもりだった。
ラミタイは背中から黒い羽を伸ばし、遠くの世界へと飛び去っていった。

## 28　繋ぎ（後書き）

私が初めて書いた長編がこれですね。
複数同時主人公にも挑戦しています。
舞台はなぜか和歌山県。
原爆、レーダー、コンピューターが登場せず、代わりに不思議なバイオテクノロジーが主役な第2次世界大戦に敗北した日本の昭和を描こう！　というプロジェクトのはずでしたが、あまり原型とどめていません……

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1775j/

鎖の歌

2010年10月8日15時24分発行